

丹波市(旧氷上郡)市島町

十ノ貝遺跡

2005年3月

兵庫県教育委員会



丹波市（旧氷上郡）市島町

十ノ貝遺跡



2005年3月

兵 庫 県 教 育 委 員 会



空中写真（南西上空から）



空中写真（北東上空から）

カラー図版 2



空中写真（南上空から）



空中写真（北東上空から）



第1調査区空中写真（北東上空から）

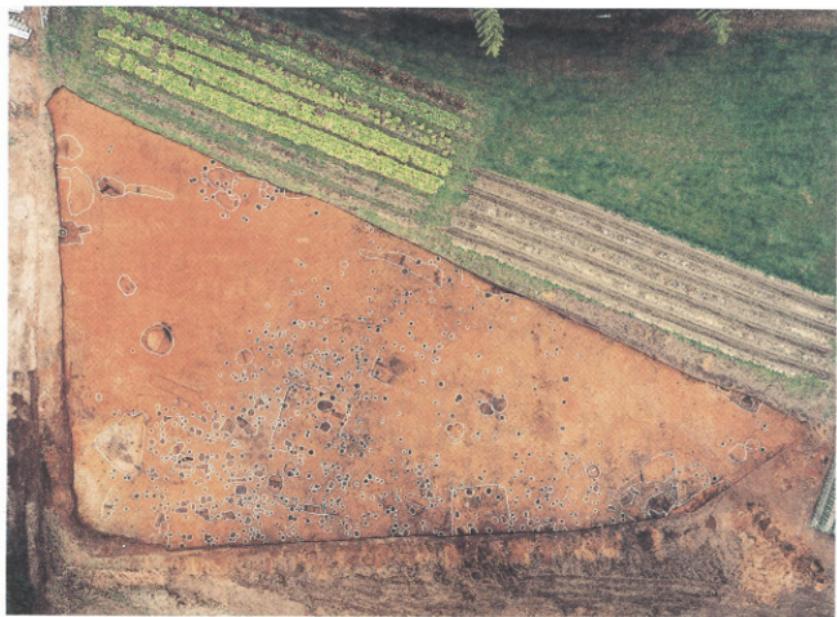


第1調査区空中写真（南東上空から）

カラー図版 4



十ノ貝遺跡遠景（横峰山から）



第2調査区空中写真



第2調査区空中写真（北東上空から）



第2調査区空中写真（北西上空から）

カラー図版6



第1調査区全景（南西から）



第1調査区銭貨出土状態（北西から）



第2調査区全景
(北東から)



第2調査区 SH05
(南東から)



第2調査区 SH06
(西から)

カラー図版 8



古墳時代出土遺物



中世出土遺物

例　　言

1. 本書は兵庫県丹波市（旧氷上郡）市島町下竹田字十ノ貝に所在する十ノ貝遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書は兵庫県柏原土木事務所が計画している国道175号線竹田道路公共道路改築事業に伴う発掘調査報告書である。
3. 分布調査を平成5年度に実施し、No11地点として要確認調査地点として上げられていたところで、平成12年度に確認調査を実施した。ともに兵庫県教育委員会が主体となり、分布調査は吉田 昇・山田清朝・所崎明雄が、確認調査は甲斐昭光が担当した。
4. 本発掘調査は、平成13年度に兵庫県教育委員会が調査主体となって実施した。その結果、南側に遺跡が伸びている可能性が高くなったので、南側の確認調査を本発掘調査時に併せて行った。その結果、遺跡の存在が確認されたので、同年度内に本発掘調査も実施した。
5. 北側の調査（第1調査区）は西口圭介・官田耕平が、南側の調査（第2調査区）は渡辺 昇・松岡千寿が担当した。
6. 調査で使用した方位は国土地理院第V系を使用した。また、水準は兵庫県柏原土木事務所設定のB.M.を使用した東京湾平均海水準である。
7. 個別遺構図・土層断面図などは調査員・補助員が実測したものであるが、遺構図は2回の本発掘調査とともに大阪測量㈱に委託したものである。
8. 写真は調査員が撮影した。ただし、空中写真については図版1は国土地理院撮影、それ以外については大阪測量㈱撮影のものである。
9. 整理作業は、平成15・16年度に兵庫県丹波県民局と委託契約をかわして兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で行った。
10. 执筆は各担当者が行い、文責は本文目次の通りである。遺構の部分で細かく文責が分かれているところは本文中に記載している。編集は増田麻子の協力を得て渡辺が行った。
11. 本書にかかる遺物や図面・写真などの資料は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号）ならびに同魚住分館（明石市魚住町清水立合池の下630-1）に保管している。ご活用下さい。
12. 発掘調査・整理調査にあたって、下記の方々・機関のご協力・ご指導を得ました。感謝致します。
(敬称略)
青木哲哉・氷上郡教育委員会・市島町



本文目次

例言

Iはじめに

1 調査に至る経緯	西口圭介	1
2 分布調査・確認調査の経過と結果	西山	1
3 第1次本発掘調査の経過	西山	2
4 第2次本発掘調査の経過	渡辺 畏	3
5 整理調査の経過	渡辺	4
II 位置と環境	西口	5
III 遺構		
1 第1調査区の概要	西口	8
2 第2調査区の概要	渡辺	9
3 古墳時代の遺構	西口・渡辺	9
4 中世の遺構	西口・松岡千寿	12
IV 出土遺物		
1 弥生時代の遺物	渡辺	26
2 古墳～飛鳥時代の遺物	渡辺	26
3 中世の遺物	西口	28
4 石器	渡辺	33
5 金属器	渡辺	33
V 十ノ貝遺跡の立地と地形環境	青木哲哉	42
VI まとめ		
1 古墳～奈良時代の十ノ貝遺跡	渡辺	48
2 中世十ノ貝遺跡の位置づけ	西口	48
VII おわりに	渡辺	54

挿図目次

第1図

調査風景	1
------	---

第2図

調査区配置図	2
--------	---

第3図

現地説明会風景	3
---------	---

第4図

現地説明会準備風景	3
-----------	---

第5図

調査参加者	4
-------	---

第6図

十ノ貝遺跡の位置と周辺の遺跡	6
----------------	---

第7図

竹田川中・下流部の地形面区分図	43
-----------------	----

第8図

調査区付近の地形面	45
-----------	----

第9図

調査区における堆積物	46
------------	----

第10図

中世の遺構	53
-------	----

カラー図版目次

- カラー図版 1 (上) 空中写真（南西上空から）
(下) 空中写真（北東上空から）
カラー図版 2 (上) 空中写真（南上空から）
(下) 空中写真（北東上空から）
カラー図版 3 (上) 第1調査区空中写真（北東上空から）
(下) 第1調査区空中写真（南東上空から）
カラー図版 4 (上) 十ノ貝遺跡遠景（横峰山から）
(下) 第2調査区空中写真
カラー図版 5 (上) 第2調査区空中写真（北東上空から）
(下) 第2調査区空中写真（北西上空から）
カラー図版 6 (上) 第1調査区全景（南西から）
(下) 第1調査区銭貨出土状態（北西から）
カラー図版 7 (上) 第2調査区全景（北東から）
(中) 第2調査区SH05（南東から）
(下) 第2調査区SH06（西から）
カラー図版 8 (上) 古墳時代出土遺物
(下) 中世出土遺物

写真図版目次

- 図版 1 十ノ貝遺跡の位置
写真図版 2 空中写真（国土地理院撮影）
図版 3 調査区配置図（1/600）
写真図版 4 (上) 空中写真（東から）
(下) 十ノ貝遺跡遠景（石像寺磐座から）
図版 5 第1調査区平面図（1/300）
写真図版 6 第1調査区空中写真
図版 7 第1調査区遺構平面詳細図 I (1/200)
写真図版 8 (上) 第1調査区全景（南西から）
(下) 第1調査区南西部（南東から）
図版 9 第1調査区遺構平面詳細図 II (1/200)
写真図版 10 (上) 第1調査区全景（南西から）
(中) 第1調査区全景（西から）
(下) 第1調査区東側柱穴群（西から）
図版 11 第1調査区土層断面図
写真図版 12 (上) 第1調査区中央から西半部（東から）
(中) 第1調査区中央から西南部分（東から）
(下) 第1調査区西端部（東から）
図版 13 第1調査区下層確認トレンチ土層断面図
写真図版 14 (左上) 下層トレンチ 7（北西から）
(右上) 下層トレンチ 7（東断面）
(左中上) 下層トレンチ 8（北から）
(右中上) 下層トレンチ 8（東断面）
(左中下) 下層トレンチ 9（北東から）
(右中下) 下層トレンチ 9（南断面）
(左下) 下層トレンチ 10（北西から）
(右下) 下層トレンチ 10（東断面）

図版15		第2調査区平面図（1/300）
写真図版16	(上)	第2調査区全景（北東から）
	(下)	第2調査区全景（南西から）
図版17		第2調査区土層断面図
写真図版18	(上)	第2調査区全景（東から）
	(中)	第2調査区全景（西から）
	(下)	第2調査区南側全景（東から）
図版19		SH01・04実測図（1/50）
写真図版20	(上)	SH01（北東から）
	(中)	SH04（北から）
	(下)	SH02・03（西から）
図版21		SH02・03実測図（1/50）
写真図版22	(上)	SH02・03（西から）
	(中左)	SH02・03（南西から）
	(下左)	SH02内土器出土状態（東から）
	(中右)	SH02内土器出土状態（南から）
	(下右)	SH02内土器出土状態（西から）
図版23		SH05実測図
写真図版24	(上)	SH05全景（南東から）
	(下)	SH05堆積状況
図版25		SH06実測図
写真図版26	(上)	SH06全景（西から）
	(中左)	SH06堆積状況
	(下左)	SH06堆積状況
	(中右)	竪断面（西から）
	(下右)	竪（北から）
図版27		SH08実測図
写真図版28	(上)	SH06全景（西から）
	(中左)	SH06調査風景
	(下左)	SH06調査風景
	(中右)	SH05・08（南東から）
	(下右)	SH08土坑断面
図版29		SH07実測図
写真図版30	(上)	SH07全景（南東から）
	(中左)	SH07堆積状況
	(下左)	SH07土坑堆積状況
	(中右)	SH07土坑土器出土状態（南東から）
図版31		SB01・02実測図（1/80）
写真図版32	(上)	SB01・02（南から）
	(中左)	SB01 P28断ち割り
	(中右)	SB02 P3断ち割り
	(下左)	SB05 P17断ち割り
	(下右)	SB05 P18断ち割り
図版33		SB03・04実測図（1/80）
写真図版34	(上)	SB03・08（南から）
	(下左)	SB03 ピット断ち割り（上からP24、P25、P26）
	(下右)	SB08 ピット断ち割り（上からP12、P13、P29）
図版35		SB05・06実測図（1/80）
図版36		SB07・08実測図（1/80）
図版37		SB09・10実測図（1/80）
写真図版38	(上)	中央掘立柱建物跡群（南東から）
	(中左)	SB06 P32断ち割り
	(下左)	SB07 P22断ち割り
	(中右)	SB10 P23断ち割り

	(下右)	SB07 P13断ち割り
図版39	(上)	SB11・I2 SA01・02実測図 (1 /80)
写真図版40	(下左)	SB11 (南東から)
	(下右)	SB09 P21 土器出土状態
写真図版41	(上)	SB09 P21 出土土器
	(中左)	SB12 (南東から)
	(下左)	SB26 P1843 断ち割り
	(中右)	SA09 P1472 断ち割り
	(下右)	SB36 P1620 断ち割り
写真図版42	(上左)	SB40 P1674 断ち割り
	(上右)	P30 断ち割り
	(中)	P1 遺物 (温石) 出土状態
	(下左)	P1820 銭貨出土状態
	(下右)	SK32 鉄鎌出土状態
図版43	(中)	P1879 土器出土状態
写真図版44	(上)	SD01・02 SX07 他 実測図
	(中左)	SD01 (北から)
	(中右)	SD01土層堆積状況 (北から)
	(下)	SD01・SX07土層堆積状況 (南から) 第1調査区土層断面 (西から)
図版45		SX03 実測図
写真図版46	(上)	SX02 (北から)
	(左下)	SD15 (南から)
	(右中上)	SD14 (東から)
	(右中下)	SD15 (南から)
	(右下)	SD18 (南から)
図版47		SX14・土坑 (1) 実測図
写真図版48	(上)	SX02・03周辺の状況 (北西から)
	(中左)	SX03 (北西から)
	(中右)	SX03堆積状況
	(下左)	SX14 (南東から)
	(下右)	風倒木
図版49		土坑 (2) 実測図
写真図版50	(左上)	SK02 (東から)
	(左中上)	SK03 (北から)
	(左中下)	SK05・06 (東から)
	(左下)	SK09 (南東から)
	(右上)	SK10 (北西から)
	(右中上)	SK11 (南から)
	(右中)	SK12 (南から)
	(右下)	SK13 (南から)
図版51		上坑 (3) 実測図
写真図版52	(左上)	SK16 (南西から)
	(左中上)	SK17 (南西から)
	(左中下)	SK19 (東から)
	(左下)	SK20 (東から)
	(右上)	SK21 (西から)
	(右中上)	SK21 (西から)
	(右中下)	SK22 (東から)
	(右下)	SK23 (南から)
図版53		SX02・P1820 実測図
写真図版54	(左上)	SK24 (東から)
	(左中上)	SK25 (南から)
	(左中下)	SK26 (南から)

(左下)	SK27 (南から)
(右上)	SK28 (南から)
(右中上)	SK28 土器出土状態
(右中下)	SK29 (東から)
(右下)	SX05 (北西から)
図版55	出土遺物 実測図 (1) (堅穴住居跡)
写真図版56	出土遺物 (1)
図版57	出土遺物 実測図 (2) (堅穴住居跡・土坑)
写真図版58	出土遺物 (2)
図版59	出土遺物 実測図 (3) (ピット・落ち込み)
写真図版60	出土遺物 (3)
図版61	出土遺物 実測図 (4) (古墳包含層)
写真図版62	出土遺物 (4)
図版63	出土遺物 実測図 (5) (ピット・土坑・落ち込み)
写真図版64	出土遺物 (5)
図版65	出土遺物 実測図 (6) (溝)
写真図版66	出土遺物 (6)
図版67	出土遺物 実測図 (7) (中世包含層)
写真図版68	出土遺物 (7)
図版69	出土遺物 実測図 (8) (石器)
写真図版70	出土遺物 (8)
図版71	出土遺物 実測図 (9) (金属器)
写真図版72	出土遺物 (9)

I はじめに

1 調査に至る経緯

国道175号線は明石市から三木市・小野市を通り、美嚢川合流点から加古川沿いに北上し、加東郡・西脇市・多可郡を通る。そこから丹波に入り、最も低い分水嶺である水上低地を通って由良川水系へと至る。水上郡（丹波市）から京都府福知山市を通って舞鶴市で日本海側に達する国道である。国土交通省や京都府・兵庫県土木事務所では順次国道の改良事業を計画施工している。兵庫県柏原土木事務所では、そのうち舞鶴自動車道完成に伴って春日町域の整備を実施してきた。引き続き市島町域においても改良工事が行われ、中竹田から県境の塙津岬手前までを竹田バイパスとして整備計画が実行されつつある。竹田バイパスは国道175号竹田道路公共道路改築事業でそれに伴い、平成4年度以降、兵庫県教育委員会においては工事対象範囲の埋蔵文化財調査について随時実施してきた。分布調査や確認調査は数年にまたがって順次行っている。本発掘調査も南からの場遺跡・上の段遺跡・高坂古墳群が実施されている。

2 分布調査・確認調査の経過と結果

〔分布調査の経過〕

分布調査は、平成4・5年度にまたがって兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所によって実施された。竹田バイパス用地は広域に渡ることから、南半を平成4年度に、北半を平成5年度に行った。十ノ貝遺跡は北半の分布調査で土器の散布が見られたことから、11地点として確認された。調査は企画調整班吉田昇、調査第2班山田清潮・所崎明雄が担当した。

〔第1次確認調査の経過〕

分布調査の結果を受け、平成13年2月に確認調査（遺跡調査番号2000361）を実施した。十ノ貝遺跡（Null地点）については、その北東部分において7世紀代を中心とする遺構・遺物の検出をみた。

調査期間は、平成13年2月20日・21日。調査面積は156m²（他地点の確認面積を含む）であった。

調査の組織

調査主体 兵庫県教育委員会

調査事務 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

企画調整班 所長 大村敬通

企画調整班 主任調査専門員 井守徳男

主査 甲斐昭光

稲田 穎

総務課 課長 森 俊雄

調査担当 企画調整班 主査 甲斐昭光



第1図 調査風景

[第2次確認調査及び下層確認調査]

第1次本発掘調査の進捗に伴い、第1次確認調査では遺跡の有無が明確でなかった南西部について、本発掘調査区から遺構が伸びる可能性が高くなった。

以上の結果を踏まえ、兵庫県丹波県民局県土整備部柏原土木事務所より平成13年7月23日付丹波（柏土）第1593号で依頼を受け、第2次確認調査を実施した（遺跡調査番号2001129）。

結果、方形堅穴住居跡・柱穴を検出し、南西部に遺跡が広がることが判明した。

また、本発掘調査区内についても、出土遺物中に縄文土器が含まれていることに加え、立地的な条件からも縄文・旧石器時代の遺跡が存在する可能性が考えられた。このため、本発掘調査のなかで下層の確認調査を上面の精査終了後に実施した。

下層については遺構・遺物ともに検出されなかった。

以下に下層確認調査の概要を述べておく。

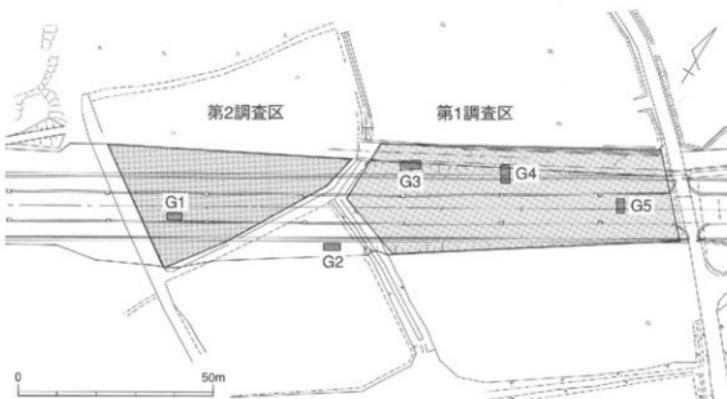
第1次調査区全域を対象に幅1m・全長3mもしくは5mのトレンチを11本設定した。

基本的には遺構面を構成する1層 黒褐色シルト、2層 明褐色縞・砂混じりシルト 3層 赤褐色シルトの順に古い層が出現したが、遺構・遺物ともに検出されなかった。

調査期間は平成13年7月23日～8月10日、調査面積は151nfであった。

3 第1次本発掘調査の経過

以上の結果を踏まえ、兵庫県丹波県民局県土整備部柏原土木事務所より平成13年4月2日付丹波（柏土）第1003号で依頼を受け、本発掘調査を実施した。



第2図 調査区配置図

調査の方法は 調査対象範囲の1,856m²について水田耕土・近世以降の堆積土については機械力によって排除し、以下の堆積については人力によって掘削・精査を実施した。

また、ヘリコプター使用による空中写真撮影を7月25日に実施している。

現地説明会については7月28日に実施している。

調査期間は、平成13年5月7日～8月11日であった。

調査の組織（平成13年度第1次本発掘調査・第2次確認調査及び下層確認調査）

調査主体 兵庫県教育委員会

調査事務 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長 大村敬通

企画調整班 主任調査専門員 井守徳男

主査 山田清朝

稲田 穀

総務課 課長 森 俊雄

調査第2班 小川良太

調査担当 調査第2班 主査 西口圭介

臨時の任用職員 宮田耕平

調査参加者 櫻井雅子・中村真也・高橋てるみ

作業委託 株式会社荻野工務店

（現場代理人）荻野俊博



第3図 現地説明会風景



第4図 現地説明会準備風景

4 第2次本発掘調査の経過

第2次確認調査の結果、遺跡が西側に広がっていることが明らかとなった。その部分について早急な対応が必要となったので、同一年度内に本発掘調査を実施することになった。兵庫県丹波県民局県土整備部柏原上木事務所からの依頼により、調査を行った。調査は、2001年1月28日に調査範囲の確定をし、機械掘削からはじめた。当該地は圃場整備が行われている水田で、現況は旧地形とは異なっている。北東部分では遺構面も削平されており、遺構の残存状態は不良である。浅い遺構はすでに削られているようである。逆に南西部には盛土がなされており、機械掘削土量も多くなっている。ただ、圃場整備時に耕土は除去しているようで、盛土部分も包含層は全くと言ってよいほど残っていない。盛土は圃場整備時のもので堆積層は残存していない。2月4日から人力掘削を開始した。暖冬との長期予報であったが、2度の降雪に遭いながらも順調に調査は進んだ。2月26日に空中写真撮影を行った。3月9日に現地説明会を実施し、断ち割り作業や後片付けを行い、3月15日に撤収し、調査を終了した。

調査の組織（調査事務は第1次本発掘調査と同じ）

調査調整 調査第4班 調査専門員 西口和彦

調査担当 調査第4班 主 査 渡辺 昇

技術職員 松岡千寿

調査参加者 前田陽子・足立尚美・

東浦幸世

作業委託 株式会社荻野工務店

（現場代理人） 萩野俊博



第5図 調査参加者

5 整理調査の経過

整理作業は、発掘調査段階から順次行っていた。十ノ貝遺跡現場事務所で水洗い作業と台帳作成を実施した。それ以降の作業を平成15・16年度の2ヵ年に渡って兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で実施した。平成15年度は注記作業から接合・復原・実測作業と写真撮影・写真整理までを行い、16年度はトレース作業と原稿執筆・レイアウトと報告書刊行を行った。

整理調査は、調査担当者である渡辺・西口・松岡が担当した。保存処理については整理保存班 主任岡本一秀が担当した。

調査主体 兵庫県教育委員会

調査事務 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

平成15年度

総務課 所長	平岡憲昭	所長	平岡憲昭
課長	織田正博	課長	織田正博
事務職員	木下良夫	事務職員	木下良夫
整理保存班 主任調査専門員	池田正男	主任調査専門員	池田正男
主 査	村上泰樹	主 査	村上泰樹
主 査	菱田淳子	主 査	菱田淳子

調査担当

調査第1班 主 査	渡辺 昇	主 査	渡辺 昇
主 任	松岡千寿	主 任	西口圭介
調査第3班 主 査	西口圭介		

調査参加者（兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所嘱託員）

平成15年度

増田麻子・友久伸子・吉田優子・眞子ふさ恵・石野照代・中田明美・西野淳子・藏幾子・大仁克子

平成16年度

増田麻子

保存処理担当

栗山美奈・三好綾子・藤井光代・三島重美・豊田貞代・森田美穂

II 位置と環境

1 地理的環境

遺跡の所在する丹波市（旧氷上郡）市島町は、神戸市より北東へ約60km、大阪より北北西へ約67kmで兵庫県丹波市の東北部に位置する。市島町は竹田村・前山村・吉見村・鶴庄村・美和村の5ヶ村が昭和30年に合併し町域を形成してきた。平成16年11月、更に氷上郡全域の町合併により丹波市となった。平成16年9月現在の人口は約7万人、面積は49,328km²、市島町の人口は約1万人、面積は7,679km²である。

丹波市市島町は、旧丹波国に属し、南を丹波市春日町・西を丹波市青垣町・北を京都府福知山市と接している。町の中央部を北流する竹田川は春日町南東部に端を発し、由良川へ合流し日本海へと流れ出している。春日町の南、氷上町石生には瀬戸内海側へと流れる加古川水系との分水界が存在しており、佐治川・加古川となって瀬戸内海側へと流れている。標高100mを超えない低い分水界を通じた交通路は『氷上回廊』・『加古川・由良川の道』と呼ばれ瀬戸内側・日本海側の南北をつなぐ重要なルートであったと評価されている。同ルートは現在のJR福知山線や国道175号に引き継がれている。

市島町はこの竹田川と竹田川に流れ込む前山川・鶴庄川・美和川などの支流によって周囲の丘陵が解析され、段丘・沖積地が形成されている。解析された段丘は細長い小さな尾根が竹田川へ突き出した形となっている。段丘上は昭和40年代以降の開拓によって耕地と姿を変え、段丘の形状も徐々に薄れています。十ノ貝遺跡はこの段丘上に位置している。

2 歴史的環境

丹波市市島町は奈良時代には氷上郡に含まれ、『和名抄』には竹田郷・前山郷の存在が記載されている。当遺跡が所在する下竹田地区もそのいずれかに含まれていたと考えられる。

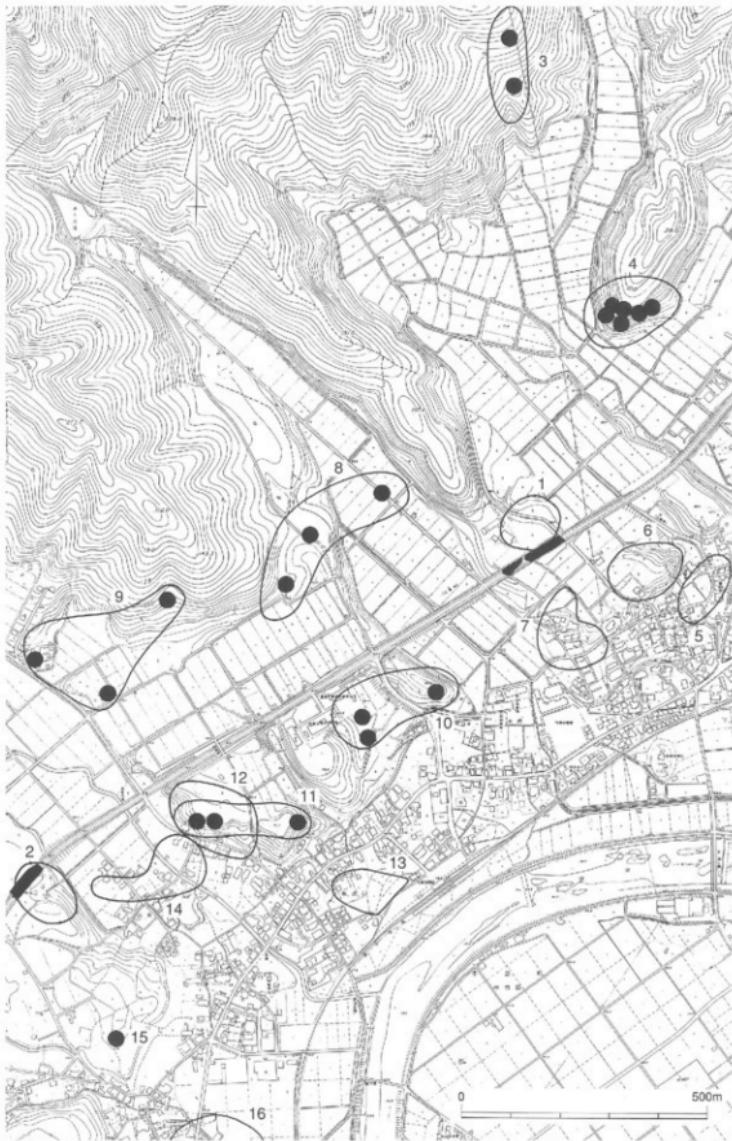
中世には長講堂領に所属する前山莊の存在が建久2年（1191）の『長講堂所領注文』に記されており、『丹波志』ではその所在を上竹田・中竹田・下竹田の3ヶ村に求めている。

前節においてふれた『氷上回廊』・『加古川・由良川の道』は春日町国領周辺で、古代山陰道の丹後の分枝いわゆる山陰道丹後支路へと合流している。丹後支駿馬家の『日出』（白出）駅家は上竹田地区の段宿あるいは宿に比定されており、次駅の『花浪』（前浪）駅家は福知山市内に比定されている。当地での山陰道丹後支路は現国道175号とは重複していたと考えられ、十ノ貝遺跡からは段丘下即ち眼下を官道が通っていたことになる。山陰道丹後支路は中世・近世を通してほぼ同じルートを通りいたと考えられ、現在でも、「明智街道」と呼ばれることがある。

『氷上回廊』・『加古川・由良川の道』・山陰道丹後支路・明智街道・国道175号と多彩な名称で呼ばれる幹線道や河川による交通は京都・瀬戸内側（播磨）・日本海側（丹後）あるいは山陰道本道を通じての但馬・因幡方面との物流が活発であったことを想像させるに足るものと言えよう。

3 周辺の遺跡

十ノ貝遺跡周辺を含めた旧氷上郡内の遺跡については、『氷上郡埋蔵文化財分布調査報告書（1）～



第6図 十ノ貝遺跡の位置と周辺の遺跡

(3)』・兵庫県教育委員会発行『的場遺跡・上ノ段遺跡』・今年度に刊行される『高坂古墳群』に詳しく述べ、本報告では多くを触れない。周辺の遺跡については、分布地図と一覧を上げておく。

市島町域では、梶原遺跡において旧石器のブロックが検出されており、上竹田の上ノ段遺跡においても石器が出土している。

縄文時代については、中竹田の高坂西遺跡において晚期の住居跡が検出されている。

弥生時代前期の状況は詳らかではないが、的場・上ノ段・高坂遺跡において土器が出土している。

弥生時代中期にはいると沖積地において集落が出現する。上竹田の的場遺跡・上田位川原の上田遺跡などが見つかっており、弥生時代中期に入つて、開発が進んだことが伺える。

また、弥生時代後期では的場遺跡など沖積地の微高地に小規模集落が点在するようであるが詳らかではない。

古墳は下竹田から中竹田地区にかけて、10基未満で円墳から構成される古墳群が密に分布している。十ノ貝遺跡周辺においても清瀬寺古墳群や新道貝古墳群など段丘縁辺部に古墳群が多く認識されている。

古墳時代以降世にかけての集落では、才田遺跡・寺内遺跡など古墳時代より継続する複合遺跡が段丘縁辺に出現する。これに対して、奈良時代以降に出現する集落遺跡は新道貝遺跡・安下遺跡など段丘下に出現するようになる。

(参考文献)

- 氷上郡埋蔵文化財調査団・奈良大学文学部考古学研究室『氷上郡埋蔵文化財分布調査報告書（1）～（3）』1994～1996年
- 春日町歴史民俗資料館・兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『七日市遺跡と氷上回廊』2000年
- 兵庫県教育委員会『的場遺跡・上ノ段遺跡』2002年
- 兵庫県教育委員会『高坂古墳群』2005年

第1表 周辺の遺跡

1. 十ノ貝遺跡	9. 中山古墳群（1号墳～3号墳）
2. 高坂古墳群（1号墳～7号墳）・高坂西遺跡	10. 水西古墳群（1号墳～3号墳）
3. 西谷古墳群（1号墳・2号墳）	11. 新道貝古墳群（1号墳～3号墳）
4. 才田古墳群（1号墳～6号墳）	12. 新道貝城跡（東）
5. 才田遺跡	13. 新道貝遺跡
6. 清瀬寺古墳群（1号墳～10号墳）	14. 高坂遺跡
7. 寺内遺跡	15. 安下北古墳群
8. 氷上古墳群（1号墳～3号墳）	16. 安下遺跡

III 遺構

本発掘調査は2回に分けて行った。各遺構は通し番号を与えているが、一部時期不明の遺構などあるので、両調査区の概要を記してから、時代ごとの遺構の報告を行う。

1 第1調査区の概要

北東から南西方向を長辺に、短冊形の調査区を設定した。長辺が約81m・短辺が最大25mの規模を測る。面積は1,856m²である。

調査の結果、主に古代の集落跡と中世の集落跡を検出した。

層序

調査区内の基本的な堆積層序は第1層－現地表・薄茶色土層、第2層－黒灰色土層、第3層－黒色土層、第4層－地山層である。

遺構は基本的には第4層地山面上で検出されたが、中世後期の遺構は第2層の上層から検出されており、古代（7世紀）から中世前期の遺構については第3層上面から第2層中にかけて掘り込まれたものと認識している。また、弥生時代の遺構（S X03）については、第3層によって埋没しており、第4層上面より掘り込まれた遺構である。

古代の集落

7世紀前半を中心とした遺構・遺物が全域から検出されている。主な遺構として方形堅穴住居跡4棟（SH01からSH04）、性格不明の土壙（SX01・02）、ピット（SP1821・SP1873・SP1874）がある。このほかにも焼土や瓶・壺の破片が調査区の全域から出土しており、後世に削られて輪郭のはつきりしなくなった住居跡が数棟存在した可能性が考えられる。

中世の集落

掘立柱建物36棟・櫛10列・土坑115基以上・溝16条を検出した。柱穴は約800個検出しており、建物として現地において復元できたものはSB12、1棟のみであった。その他の建物は整理の過程において復元した。多数の柱穴が存在することから、更に複数の建物が存在したと考えられる。

中世の遺構は全域から検出されているが、建物・構・土坑・溝の多くは調査区の南半に集中している。調査区の北東半では後世の削平が激しいこともありやや密度が低い。

調査区南半において検出される建物の規模・密集度・棟数は北半に対して優勢であり、加えて、溝・櫛によっての区画の存在が調査区南半では伺えることから、中世集落遺跡の中心は調査区の南半にあつたものと推測される。

その他の遺構

弥生時代中期の遺構（SX03）のほか、縄文土器・磨製石斧などが出土した。このことが契機となり、下層の確認調査を実施したが遺構・遺物ともに検出されなかった。

出土遺物

縄文土器・磨製石斧のほか弥生時代中期の壺が古い時期の遺物として注目される。

遺跡を構成する主な時代の遺物としては以下のものが挙げられる。

7世紀代の住居跡・土坑からは須恵器杯蓋、土師器甕・高杯・鉢などが出土している。

中世の遺物は土師器皿・鍋、須恵器捏ね鉢、瓦質擂鉢・鍋、丹波焼擂鉢、備前焼擂鉢、瀬戸美濃製天目茶碗・皿、中国製青磁碗、壺土、砥石、鉄鎌、鉄釘、銭貨などが出土している。時期は13世紀から16世紀にわたる。

2 第2調査区の概要

1,053m²の本発掘調査で、古墳時代末の堅穴住居跡4棟、中世と考えられる掘立柱建物跡11棟を検出した。調査区は圃場整備で大きな削平を受けている。そのため、遺構の残存状況は悪く、包含層もほとんど存在していなかった。北側の方は削平が著しい。そのため、層序は盛土もしくは耕土直下が地山であるところが大半である。南側は盛土がなされているものの、耕土はその間に採取されており残っていない。盛土は存在するが、包含層はほとんど認められなかった。ただ、遺構は南東部に比較的集中しており、削平の度合いは少なかったかもしれない。

遺構は、それ以外に多数のピット、横列2条、土坑34基、落ち込み2基、溝5条を調査している。大半の遺構は中世に属する遺構である。

3 古墳時代の遺構

1 堅穴住居跡

堅穴住居跡は8棟検出している。第1調査区・第2調査区ともに4棟ずつ確認している。第1調査区がSH01からSH04、第2調査区がSH05からSH08である。

SH01（図版19・写真図版20）

第1調査区西端より検出した方形堅穴住居跡である。SH04の西隣に位置する。

本住居跡は北側から北壁（短辺）の中ほどまでが著しく削平を受けており、検出できた平面形状はやや歪な長方形となっている。

住居跡は長辺をN39°Wにとり、残存する規模は、長辺は約3.50m、短辺は約3.00m、残存する床面までの深さは約20cmである。

住居跡に伴う遺構として、四周を巡る壁面以外には柱穴・ピット6個、焼土1箇所を検出している。壁溝はない。

柱穴は東壁と西壁にはそれぞれ2個ずつ、それぞれ1.65mの柱間をもって径約40cm・深さ25cmの柱穴が穿たれており、これが主柱穴と考えられる。また、南側の2個の柱穴を結んだ中間に径約20cm・深さ5cmのピットが床面上に開いている。東隅にあるピットは径約35cm・深さ7cmと浅い。焼土と近接することから柱穴ではなく、炊事等の機能に係わる小土坑と考えられる。

焼土は径約30cmの円形を呈し、南壁の東隅近くから検出されている。壁を越え屋外に半分はでている。簡易な竈の存在を考えておきたい。

遺物は土師器甕（1）が出土している。

SH02（図版21・写真図版20・22）

第1調査区東端より検出した方形堅穴住居跡である。SH03と切り合い新しい。

本住居跡は全体に著しく削平を受け、床面まで浅く、壁面の立ち上がりは殆ど残っていない。更に搅

乱坑や中世の柱穴が幾つか掘り込まれ平面的にも残存状況は良くない。

住居跡は長辺をN60°Wにとり、残存する規模は、長辺は約4.65m、短辺は約4.55m、深さは最大で約12cmである。

住居跡に伴う遺構として、四周を巡る壁面以外には壁溝、柱穴4個・ピット1個・土坑2基、竈を検出している。

壁溝は東壁に沿って幅約15cm・深さ8cmの規模で検出された。壁溝は北・南・西壁では検出されていない。

柱穴は壁溝に沿って並んでおり、柱間は1.70mと2.00mである。また北東隅のピット、南壁中央の柱穴についてもSH02に伴う柱穴と考えて良いであろう。

竈は北壁中央において検出されているが、大半は電信柱保全のため調査ができなかった。

遺物は(2)～(17)が出土している。

S H03 (図版21・写真図版20・22)

第1調査区東端より検出した方形堅穴住居跡である。SH02と切り合ひ先行する。

東側の大半をSH02によって損壊されており、全容は今ひとつわからない。

住居跡は長辺をN30°Eにとり、残存する規模は、長辺は約5.70m、短辺は約4.65m、深さは最大で約12cmである。

3方に残る壁面以外には壁溝が部分的に検出されているほか、壁溝にうがたれた柱穴4個・住居跡内に1列に並ぶ柱穴3個・ピット1個が本住居跡に伴うものと認識できる。

壁溝は東壁の一部・南壁・西壁の一部・北壁の一部において幅約20cm・深さ10cmの規模で検出された。

壁溝に沿って並ぶ柱穴の間隔は1.6mである。また、住居跡内に1列に並ぶ柱穴3個の間隔は1.45mである。

遺物は(18)が出土している。

S H04 (図版19・写真図版20)

第1調査区西半より検出した方形堅穴住居跡である。SH01の東隣に位置する。

本住居跡は全体に著しく削平を受け、床面まで浅く、壁面は殆ど残っていない。更に擾乱坑・中世の柱穴・土坑が掘り込まれ、平面的にも残存状況は良くない。

住居跡は長辺をN59°Eにとり、残存する規模は、長辺は約3.50m、短辺は約2.55m、深さは最大で約9cmである。

幸うじて四周を巡る壁面以外に伴う遺構は詳らかではないが、北壁上に並ぶ柱穴3個と床面中央北よりの径50cmの柱穴1個は住居跡に伴う可能性がある。壁溝はない。

遺物の出土はない。

S H05 (図版23・写真図版24)

第2調査区中央付近で検出した堅穴住居跡で、残存状態は非常に悪い。壁で5cm程度からうじて残っている。床面は全体残っているわけではないが、規模は復原可能である。床面南東部が損壊を受けている。北辺で5.5m、西辺も5.5mを測る。5.5m四方の正方形プランの堅穴住居跡である。主柱穴はSH06のように突出して深くはない。北辺東側の柱穴は壁の一部にかかっている。一応4本柱と考えているが、主柱穴間に支柱穴が両辺ともに存在している。主柱穴の深さが浅いことを補完するためであろうか。床面南東側に焼土集中部分がある。住居跡南東部が損壊を受けて残っていないが、跡跡が南東隅にあつ

た可能性を強く示しているものと思われる。床面北東部に長方形の土坑が存在する。南北1.9m、東西1.0mを測る。0.1m前後と浅く、クロボク層を埋土としている。遺物も出土していない。

S H06 (図版25・写真図版26)

第2調査区中央付近南壁沿いで検出した竪穴住居跡である。当初は調査区外へ一部延びていたが、空中写真後に調査区を広げて住居跡は全掘した。南辺は3.6m、西辺は3.9mを測る。北東コーナー部は掘り残しており、そこに竈を設けている。いわゆる青野型住居跡である。今回調査した住居跡のなかでは残りがよく、最大28cmの深さを測ることができた。壁溝は認められず、主柱穴は東西の壁沿いの2本ずつの4本柱と思われる。ほとんど壁に接した内側に配されている。主柱穴は深さが他の柱穴とは異なって深くなっていることから、明らかである。床面から50cm前後の深さがある。主柱穴間の心々間の距離は東西が3.3m、南北が1.5mである。南北方向ではほぼ3等分した位置に主柱穴を配している。

S H07 (図版29・写真図版30)

第2調査区北東端で検出しておらず、調査区外へ大半は延びている。方形の竪穴住居跡で南辺はすべて調査している。4.4mを測り、東辺は1.1m、西辺は0.3mを調査している。残存状況は良好とはいえず、かろうじて0.1m調査することができた。壁溝は検出していない。埋土はクロボク層で、ほとんど遺物は含んでいない。遺物は南東隅に位置する土坑（S K36）から出土している。土坑は東西0.95m、南北0.75mの梢円形で、深さは0.25mである。底の方の埋土は炭・焼土を含んだ暗褐色シルト質細砂である。下の方に堆積している層で5cmほどあり、自然堆積層と思われる。この層の上から遺物が出土している。土器壺・杯が出でている。焼土・炭が土坑内埋土に入っているが、焼土は明瞭に焼けていないことから、確実に炉跡とは断定できない。竪穴住居跡の北東隅を検出しているが、S H06のような床面の掘り残しはない。住居跡のタイプは異なったものであろうか。主柱穴も異なった位置にあるようである。柱穴と思われるピットは南西部で1基検出している。径30cm、深さ25cmを測る。ピット北側の調査区壁沿いに土坑が1基ある。東西長0.75mを測る不定形である。深さは0.15mで、埋土は地山土のブロック混じりのクロボク層である。

S H08 (図版27・写真図版28)

第2調査区のはば中央で検出している住居跡で残存状態は不良である。南西コーナー部のみ残っており、東西1.8m、南北2.5mで、深さも最も残りの良い南西隅で8cmである。壁溝は確認できなかった。S H05と主軸方向が同じで、S H05の東辺とS H08の西辺が直線上に並ぶことから、計画的に設営されたものと思われる。コーナー間で3m離れている。床面南西隅に並んで2基のピットが存在する。内側のピットは径40cm、深さ10cmを測り、底から須恵器壺（43）が出土している。ピットの南側床面からは須恵器杯（42）が出土している。西辺沿いに他に2基のピットが存在している。床面中央付近に土坑がある。南北0.8m、東西0.7mの不定形の浅い（4cm～7cm）土坑である。被熱しておらず、炭・焼土も含まれないので、炉跡ではない。

2 その他の遺構

S X01 (図版7)

S H02の東側に位置しSD06と重複あるいは同一遺構として捉えられる遺構である。

全長約2m、幅約50cm、深さ16cm～27cmを測る「へ」の字状の落ち込みである。遺構は南半分が深く土坑状を呈しており、土坑が切り合う可能性も高い。

遺構の性格は不明、遺物は土器壺（57）が出土している。

S X 02 (図版53・写真図版46・48)

第1調査区中央西寄り、S B 41・42と重複、切りあい古い。

遺構の形状は不整形で、あるいは東西に並ぶ2基の土坑が切りあう可能性もある。

長軸約4.0m、短軸約3.30m、深さ約0.7mの規模をもつ。

遺物の出土量は比較的多く、中・下層より土師器壺等が出土している。

S X 03 (図版45・写真図版48)

S X 12の西側に位置する。全長約4.30m、幅約1.0m、深さ約30cmを測る、長方形の土壌状遺構である。

断面形状は逆台形を呈しており、底面付近からは円礫・弥生土器・石礫が出土している。

遺構の性格は不明である。可能性の1つとして土壌墓が挙げられるが詳らかではない。近接して存在する同形状のS X 12は斜めに穿たれており、そのあり方から倒木による痕跡と考えている。馬蹄形に溝状の痕跡がS X 03・12両者の間を巡ることから、本遺構もS X 12の成因となった同一の樹木の根が関係しているとも考えられる。

S X 04 (図版7)

S X 02の西側に位置する。全長約4.10m、最大幅約2.4m、深さ約30cmを測る、不整な矩形の土坑状遺構である。

断面形状は浅い皿状を呈している。時期は不明である。

S K 01 (図版49・写真図版50)

第2調査区南東部で検出したもので、長径192cm、短径94cm、最大の深さ20cmを測る。平面形態は不定形である。遺構の性格は不明であるが、埋土から土師器が出土していることから、古墳時代の遺構であることが判明した。

S K 02 (図版49・写真図版50)

第2調査区南東部で検出したもので、長径208cm、短径156cm、最大の深さ20cmを測る。平面形態は不定形である。遺構の性格は不明であるが、埋土から土師器が出土していることから、古墳時代の遺構であることが判明した。

S K 03 (図版49・写真図版50)

第2調査区南東部で検出したもので、長径152cm、短径120cm、最大の深さ22cmを測る。平面形態は不定形である。遺構の性格は不明であるが、埋土から土師器が出土していることから、古墳時代の遺構であることが判明した。

4 中世の遺構

掘立柱建物跡47棟・櫛12列・土坑149基以上・溝17条を検出した。この内、第1調査区において検出した遺構の総数・概要是前述の通りである。

第2調査区は、西半部の標高が高く、東半部は緩やかに標高を下げている。全体に後世の削平を受けており、西半部でその影響が大きい。このため、今回の調査で検出した中世の遺構の多くは、東半部に集中している。第2調査区では、柱穴は約400基・土坑33基・溝5条・櫛2列を検出した。

1 掘立柱建物跡

第2調査区では柱穴は、約400基を検出し、掘立柱建物跡11棟が復元できた。しかし、西側の削平が

著しく、当時はもっと多くの掘立柱建物跡が存在したと考えられる。

S B01（図版31・写真図版32）

第2調査区北西側に位置する建物跡で、一部S B02と重複して調査区外にのびる。N10°Wに長軸方向をとる、2間×2間以上の側柱建物跡である。規模は、長軸方向4.1m、短軸方向3.6mを測る。柱間の平均値は長軸方向2.2m、短軸方向1.8m、柱穴は径20cm～30cmの円形で、深さは、16cm～50cmである。

この建物跡から土師器片が出土した。

S B02（図版31・写真図版32）

第2調査区北西側に位置する建物跡で、一部S B01と重複して調査区外にのびる。N60°Eに長軸方向をとる、2間×1間以上の側柱建物跡である。規模は、長軸方向4.6m、短軸方向2.0mを測る。柱間の平均値は長軸方向2.3m、短軸方向1.8m、柱穴は径30cm～40cmの円形で、深さは、10cm～30cmである。

S B03（図版33・写真図版34）

第2調査区南西側に位置する建物跡で、一部は調査区外にのびる。N34°Eに長軸方向をとる、2間×1間以上の総柱建物跡である。規模は、長軸方向3.7m、短軸方向3.4mを測る。柱間の平均値は長軸方向1.8m、短軸方向2.7m、柱穴は径30cm～50cmの円形を呈する。

S B04（図版33）

第2調査区東側に位置する建物跡で、一部は調査区外に広がる。N45°Wに長軸方向をとる、2間×2間以上の側柱建物跡である。規模は、長軸方向6.5m、短軸方向5.6mを測る。柱間の平均値は長軸方向2.5m、短軸方向2.8m、柱穴は径10cm～50cmの円形で、深さは、10cm～40cmである。

S B05（図版35）

第2調査区西側に位置する建物跡で、一部は調査区外に広がる。N19°Wに長軸方向をとる、3間×1間以上の側柱建物跡である。規模は、長軸方向8.3m、短軸方向5.0mを測る。柱間の平均値は、短軸方向3.3m、柱穴は径10cm～40cmの円形で、深さは、10cm～40cmである。

S B06（図版35・写真図版38）

第2調査区東側に位置する建物跡で、一部は調査区外に広がる。N47°Eに長軸方向をとる、2間×1間以上の側柱建物跡である。規模は、長軸方向4.9m、短軸方向2.6mを測る。柱間の平均値は長軸方向2.4m、短軸方向2.0m、柱穴は径20cm～50cmの円形を呈する。

S B07（図版36・写真図版38）

第2調査区西側に位置する建物跡で、N31°Wに長軸方向をとる、2間×2間の側柱建物跡である。規模は、長軸方向5.8m、短軸方向4.8mを測る。柱間は長軸方向2.9m、短軸方向3.6m、柱穴は径20cm～30cmの円形で、深さは、10cm～40cmである。

S B08（図版36・写真図版34）

第2調査区東側に位置する建物跡で、N42°Wに長軸方向をとる、2間×2間の側柱建物跡である。規模は、長軸方向6.3m、短軸方向4.9mを測る。柱間は長軸方向3.2m、短軸方向2.6m、柱穴は径20cm～30cmの円形で、深さは、10cm～40cmである。

S B09（図版37・写真図版40）

第2調査区北側に位置する建物跡で、北西側は後世の削平のため、N55°W方向の3間の柱穴、一列

しか復元できなかった。規模は、長さ6.2m、柱間の平均値は2.0mである。柱穴は径20cm～40cmの円形で、深さは、10cm～40cmを測る。

この建物跡の柱穴P21の柱痕から、非機械成形の土師器皿が9枚重なって出土した。

S B10（図版37・写真図版38）

第2調査区東側に位置する建物跡で、N53°Wに長軸方向をとる、3間×3間の側柱建物跡である。規模は、長軸方向5.1m、短軸方向3.8mを測る。柱間の平均値は長軸方向1.4m、短軸方向1.2m、柱穴は径10cm～30cmの円形で、深さは、10cm～40cmである。

S B11（図版39・写真図版40）

第2調査区東側に位置する建物跡で、N27°Eに長軸方向をとる、1間×1間以上の側柱建物跡である。規模は、長軸方向1.6m、短軸方向1.1mを測る。柱穴は径10cmの円形で、深さは、20cmである。

この建物跡からは時期の特定できる遺物は出土していない。

S B12からS B47は第1調査区において検出され復元した。

S B12（図版39・写真図版41）

調査区中央西より、S D05の東隣に並行して存在する。

桁行2間（約6.0m）、梁行2間（約4.8m）の規模を測る。桁行をN45°Wにとる側柱建物跡である。径約50cmの柱穴を使用しており、柱間は桁行方向で3.0m、梁行方向では2.4mを測る。

S B12はS B30と重複しているが先後関係は不明である。また、南梁行の並びにS A10が近接して存在している。方位・位置から推して同時期に存在して機能していたものと考えられる。また、S D05とも方位を同じくしており、同時期に存在して機能していた可能性が考えられる。

S B13（図版9）

調査区西側南より、S D03の東隣に並行して存在する。

桁行2間（約5.2m）、梁行3間（約4.6m）の規模を測る。桁行をN60°Wにとる側柱建物跡である。

径約30cmから50cmの規模の柱穴を使用しており、柱間は桁行方向で2.6m、梁行方向では1.75m・1.1mを測る。

S B13はS B15・S B20と重複し新しい。また、S B14・S B16・S B17と重複するが先後関係は不明である。

S B14（図版9）

調査区西側南より、S D03の東隣に存在する。

桁行9.3m、梁行約4.5mの規模を測る。桁行をN24°Eにとる側柱建物跡である。

径約30cmから50cmの規模の柱穴を使用している。柱間は、幾つかの柱穴が検出されていない可能性もあり詳らかではないが、桁行は5間であった可能性が高く、梁行は2間もしくは3間で構成されていたと考えられる。柱間の規模は桁行方向で2.1mから2.2m、一間分は1.2mを測る。

S B14はS B18と重複し新しい。また、S B13・S B15・S B16・S B17・S B19・S B20・S B29と重複するが先後関係は不明である。

また、桁行・梁行に並行して存在するS A07・S A08は軸方位をほぼ同じくしており同時期に存在した可能性が高い。

S B15（図版9）

調査区西側南より、S D03の東隣に存在する。

東西桁行 6 間（9.3m）、南北梁行 2 間（約4.6m）の規模を測る。桁行をN38°Wにとる側柱建物跡である。

径約30cmから50cmの規模の柱穴を使用している。柱間は、幾つかの柱穴が検出されていない可能性もあり詳らかではないが柱間の規模は桁行方向で0.6m・1.2m・1.5m・1.8mを測りばらつきがある。梁行1間は2.3mを測る。

S B15はS B20・S B29と重複し先行する。また、S B13・S B14・S B16・S B17・S B19・S A07と重複するが先後関係は不明である。

S B16（図版9）

調査区西側南よりに位置する。

東西桁行3間もしくは4間（5.6m）、南北梁行3間（約3.6m）の規模を測る。桁行をN57°Wにとる側柱建物跡である。

径約30cmから40cmの規模の柱穴を使用している。柱間は、幾つかの柱穴が検出されていない可能性もあり詳らかではないが、柱間の規模は桁行方向で1.2m・1.5m・1.8mを測りばらつきがある。梁行1間は1.2mを測る。

S B16はS B17と重複し先行する。また、S B13・S B14・S B15・S B18・S B19・S D09と重複するが先後関係は不明である。

S B17（図版9）

調査区西側南よりに位置する。

東西桁行2間（4.7mから5.2m）、南北梁行2間（約4.0m）の規模を測る。桁行をN58°Wにとる側柱建物跡である。

径約30cmから40cmの規模の柱穴を使用している。建物の平面形のゆがみは激しく、柱間の規模は桁行方向で2.0m・2.7m・2.6mを測りばらつきがある。梁行1間は2.0mを測る。

S B17はS B16と重複し新しい。ほぼ同一箇所にあることから建て替えと考えられる。また、S B19と重複し新しい。S B13・S B14・S B15・S B18とは重複するが先後関係は不明である。

S B18（図版9）

調査区西側南より、S D05の西隣に位置する。

桁行5間（約5.4m）、梁行3間（約5.1m）の規模を測る。桁行をN33°Wにとる側柱建物跡である。径約30cmから50cmの規模の柱穴を使用しており、柱間は桁行方向で0.6m・1.2m・1.5mを測りばらつきがある。梁行では1.5m・2.1mを測る。

S B18はS B14・S D05と重複し先行する。また、S B16・S B17・S B19・S A08・S D09と重複するが先後関係は不明である。

S B19（図版9）

調査区西側南より、S D05の西隣に並行して位置する。

桁行3間（約6.7m）、梁行2間（約3.8mから4.2m）の規模を測る。桁行をN54°Eにとる側柱建物跡である。径約30cmから50cmの柱穴を使用しており、建物の平面形は西梁行が東梁行に対して少し長く、開いた形となっている。このため、柱間の規模は桁行方向で2.0m・2.2m・2.5mを測り、梁行1間は東梁行では1.9m、西梁行では2.1mを測る。

S B19はS B17と重複し先行する。S B14・S B15・S B16・S B18・S B20・S B29・S A07・S

A08とは重複するが先後関係は不明である。S D09はS B19の雨落ち溝である可能性が高い。

S B20（図版9）

調査区西側南よりに位置する。

北東桁行2間（4.7m）、西南梁行2間（約4.6m）の規模を測る。桁行をN38°Wにとる総柱建物跡である。

径約50cmから70cmの規模の柱穴を使用している。南端の柱穴が検出できず、あるいは南西の1間を欠く可能性もある。柱間は桁行1間23mから2.4m、梁行は1間2.0mと2.6mである。

S B20はS B15と重複し新しい。また、S B13と重複し先行する。また、S B14・S B19・S B21・S B24・S B26・S B29・S A07と重複するが先後関係は不明である。

S B21（図版9）

調査区西側北より、S D01の南隣に存在する。

南北桁行4間（9.2m）、東西梁行2間（約4.5m）の規模を測る。棟行をN39°Wにとる総柱建物跡である。建物の北から1間目の中央と3間目の中央には柱穴が存在する。

径約20cmから40cmの規模の柱穴を使用している。柱間は、幾つかの柱穴が検出されていない可能性もありあまり詳らかではないが柱間の規模は東桁行方向で2.1m・2.4mを測る。梁行1間は2.3mを測る。

S B21は、S B20・S B22・S B23・S B24・S B25・S B26・S A06と重複するが先後関係は不明である

遺物は柱穴P1820より銭貨がまとめて出土している（写真図版42・図版53）。

P1820は長軸約65cm・短軸約50cm・深さ5cmを測る炬形の土坑として検出されている。銭貨は土坑中央より15枚以上検出されている。差しの状態で埋納されたものと考えられ、建物廃絶時に入れられた可能性を考えておきたい。

S B22（図版9）

調査区西側北より、S D01の南隣に存在する。

南北桁行3間（5.0m）、東西梁行2間（約3.8m）の規模を測る。棟行をN34°Wにとる個柱建物跡である。

径約50cmから70cmの規模の柱穴を使用している。柱間は桁行1間が2.0m・1.0m、梁行は1間1.9mである。

S B22は、S B26と重複し先行する。また、S B21・S B23・S B24・S B25・S B31と重複するが先後関係は不明である

S B23（図版9）

調査区西側北より、S D01の南隣に存在する。

南北桁行3間（5.0m）、東西梁行1間（約3.8m）の規模を測る。棟行をN31°Wにとる個柱建物跡である。

径約50cmから70cmの規模の柱穴を使用している。柱間は桁行1間が2.0m・1.5mである。

S B23は、S B22・S B24・S B25・S B26・S B31・S A09と重複するが先後関係は不明である。

S B24（図版9）

調査区西側中央、S B23の南隣に存在する。

南北桁行 3 間（5.2m）、東西梁行 2 間（約3.6m）の規模を測る。棟行を N28°E にとる側柱建物跡である。

径約20cmから40cmの規模の柱穴を使用している。柱間は桁行 1 間 1.4m・1.8m・2.0m、梁行は 1 間 1.8m である。

S B24は、S B22と重複し新しい。また、S B20・S B21・S B25・S B26・S B31と重複するが先後関係は不明である。

また、梁行に並行して存在する S A06は軸方位をほぼ同じくしており同時期に存在した可能性が高い。
S B25（図版 9）

調査区西側中央に存在する。

南北桁行 5 間（8.3m）、東西梁行 1 間（約2.5m）の規模を測る。棟行を N23°E にとる側柱建物跡である。

径約30cmから50cmの規模の柱穴を使用している。柱間は桁行では 1 間が 1.2m・1.5m・1.8m、2.2m である。

S B25は、S B31と重複し新しい。また、S B21・S B22・S B23・S B24・S B26と重複するが先後関係は不明である。

また、梁行に並行して存在する S A05は軸方位をほぼ同じくしており同時期に存在した可能性が高い。遺物は柱穴 P1821より土師器片が出土している。

S B26（図版 9）

調査区西側北より、S D01の南隣に存在する。

南北桁行 3 間（4.6m）、東西梁行 3 間（約4.5m）のほぼ正方形の規模を測る。桁行を N20°E にとる側柱建物跡である。

径約30cmから40cmの規模の柱穴を使用している。柱間は 1 間が 1.5m・1.0m である。

S B26は、S B22と重複し新しい。また、S B20・S B21・S B22・S B23・S B24・S B25・S B31と重複するが先後関係は不明である。

S B27（図版 9）

調査区西端、S D01の西端クランク部分に位置する。

南北 2 間（2.4m）、東西 1 間（約2.4m）の正方形の規模を測る。桁行を N40°E にとる側柱建物跡である。

径約20cmから30cmの規模の柱穴を使用している。柱間は南北では 1 間 1.2m である。

S B28と重複するが先後関係は不明である。ほぼ同一箇所にあることから建て替えと考えられる。

S B28（図版 9）

調査区西端、S D01の西端クランク部分に位置する。

2 辺が残る。S D01の西端クランク部分に位置することから構の可能性も残るが、重複する S B27の存在から建物跡と判断した。南北 2 間（2.8m）、東西 2 間（約2.6m）のほぼ正方形の規模を測る。桁行を N28°E にとる側柱建物跡である。

径約20cmから30cmの規模の柱穴を使用している。柱間は南北 1 間 1.4m・東西 1 間 1.3m である。

S B27と重複するが先後関係は不明である。ほぼ同一箇所にあることから建て替えと考えられる。

S B29 (図版 9)

調査区西側南よりに位置する。

南北桁行 3 間（4.2m）、東西梁行 1 間（約2.1m）の規模を測る。桁行を N19°E にとる個柱建物跡である。

径約20cmから40cmの規模の柱穴を使用している。建物の平面形にはゆがみがある。

柱間の規模は桁行方向で1.2m・1.8mを測る。

また、S B15と重複し新しい。S B14・S B20・S B19とは重複するが先後関係は不明である。

S B30 (図版 9)

調査区中央西より、S D05の東隣に並行して存在する。

南北桁行 2 間（約3.4m）、東西梁行 1 間（約2.1m）の規模を測る。桁行を N36°E にとる個柱建物跡である。径30cmから50cmの柱穴を使用しており、柱間は桁行方向で1.7mを測る。

S B30はS B12と重複しているが先後関係は不明である。

S B31 (図版 9)

調査区西側に位置する大型の柱穴である。

東西桁行 6 間もしくは 7 間（12.5m）、南北梁行 2 間（約5.3m）の規模を測る。桁行を N75°E にとる。棟行の柱穴は梁行の柱穴を除き 4 個を検出している。

柱穴は径約30cmから50cmの規模の穴を使用している。柱間の規模は、幾つかの柱穴が検出されていない部分もあり詳らかではないが、桁行方向で2.3m・1.5m・1.8mを測りばらつきがある。梁行 1 間は 1.2m・1.8m・2.3mを測る。

S B31はS B25・S B26・S D05と重複し先行する。また、S B21・S B22・S B23・S B24・S B32・S B33と重複するが先後関係は不明である。

S B32 (図版 9)

調査区西側に位置する。

東西桁行 3 間（4.8m）、南北梁行 2 間（約4.5m）の規模を測る。桁行を N74°E にとる個柱建物跡である。

径約30cmの規模の柱穴を使用している。柱間は桁行 1 間が 1.1m・1.5m・2.2m、梁行は 1 間約2.2mである。

S B32はS D05・S X09と重複し新しい。また、S B31・S B33・S B34・S B35と重複するが先後関係は不明である。

S B33 (図版 9)

調査区西側に位置する。

東西桁行 4 間（6.7m）、南北梁行 2 間（約2.6m）の規模を測る。桁行を N63°W にとる個柱建物跡である。

径約20cmから40cmの規模の柱穴を使用している。柱間は桁行 1 間が 1.0m・1.7m・2.0m、梁行は 1 間約1.3mである。

S B33はS D05と重複し新しい。また、S B31・S B32・S B34・S B35と重複するが先後関係は不明である。

S B34（図版9）

調査区西側に位置する。

東西桁行4間（6.0m）、南北梁行2間（約4.5m）の規模を測る。桁行をN60°Wにとる純柱建物跡である。

径約40cmから60cmの規模の柱穴を使用している。柱間は棟行・桁行1間1.5mを基本とするが棟行の柱列には重みがある。梁行は1間約2.25mである。

S B34はS D05と重複し新しい。S B32・S B33・S B35・S X08・S X09と重複するが先後関係は不明である。また、S B37と梁行の並びを揃えており同時に存在していたと考えられる。

S B35（図版9）

調査区西側に位置する。

東西桁行5間（7.1m）、南北梁行2間（約3.0m）の規模を測る。桁行をN55°Wにとる側柱建物跡である。

径約20cmから50cmの規模の柱穴を使用している。柱間は桁行1間1.0m・1.5m・2.0m、梁行は1間約1.2mである。また、建物内に位置する3個の柱穴（P1548・P1889・P1857）は同建物に伴う柱穴と考えられ、うち、P1548・P1889は棟行の柱列の可能性がある。またP1857は間仕切りの柱穴と考えられる。

S B35はS D05・S X09と重複し新しい。また、S B32・S B33・S B34と重複するが先後関係は不明である。また、S B36と梁行の並びが近く、同時に存在していたと考えられる。

S B36（図版9）

調査区西側、S D05の東隣に位置する。

東西桁行4間（6.4m）以上、南北梁行2間（約2.9m）の規模を測る。桁行をN55°Wにとる側柱建物跡である。

径約30cmから50cmの規模の柱穴を使用している。柱間は桁行1間1.6m、梁行は1間約1.2mと1.8mである。

S B36はS B37と重複するが先後関係は不明である。また、S B35と梁行の並びが近く、同時に存在していたと考えられる。

S B37（図版9）

調査区西側、S D05の東隣に位置する。

東西桁行3間（3.6m）、南北梁行2間（約3.1m）の規模を測る。桁行をN32°Eにとる側柱建物跡である。

径約20cmから35cmの規模の柱穴を使用している。柱間は桁行1間0.7m・1.45m、梁行は1間約1.55mである。

S B37はS B36と重複するが先後関係は不明である。

S B38（図版7・9）

調査区中央に存在する。

東西桁行2間（1.7m）、南北梁行1間（約1.6m）のほぼ正方形の規模を測る。桁行をN39°Eにとる側柱建物跡である。

径約30cmの規模の柱穴を使用している。柱間は南北桁行では1間0.6mと1.1m、北桁行では1間0.85m

である。

S D07と重複するが先後関係は不明である。

S B39（図版7・9）

調査区中央に存在する。

南北桁行2間（2.3m）、東西梁行1間（約2.2m）のほぼ正方形の規模を測る。桁行をN46°Wにとる側柱建物跡である。

径約40cmから50cmの規模の柱穴を使用している。柱間は桁行では1間1.15mである。

S B40と重複するが先後関係は不明である。同様の形状であることから建て替えと考えられる。

また、梁行に並行して存在するS D08は軸方位をほぼ同じくしており同時期に機能した可能性が高い。

S B40（図版7・9）

調査区中央に存在する。

南北桁行1間（2.2m）、東西梁行1間（約1.5m）の規模を測る。桁行をN49°Wにとる側柱建物跡である。

径約30cmの規模の柱穴を使用している。

S B39と重複するが先後関係は不明である。同様の形状であることから建て替えと考えられる。

S B41（図版7・9）

調査区中央に存在する。

東西桁行2間（7.1m）、南北梁行1間（約3.7m）の規模を測る。桁行をN52°Wにとる側柱建物跡である。

径約30cmから50cmの規模の柱穴を使用している。柱間は桁行では1間3.3mと3.8mである。

S B41はS B42と重複し古い。ほぼ同一箇所にあり、桁行の柱穴を2箇所共有していることから建て替えと考えられる。

また、S X02・S X04と重複し新しい。

S B42（図版7・9）

調査区中央に存在する。

東西桁行2間（6.6m）、南北梁行1間（約3.7m）の規模を測る。桁行をN54°Wにとる側柱建物跡である。

径約30cmから50cmの規模の柱穴を使用している。柱間は桁行では1間3.3mである。

S B42はS B41と重複し新しい。ほぼ同一箇所にあり、桁行の柱穴を2箇所共有していることから建て替えと考えられる。

また、S X02・S X04と重複し新しい。

S B43（図版7）

調査区東半北端に存在する。

東西桁行2間（3.7m）以上、南北梁行2間（約4.6m）の規模を測る。桁行をN38°Eにとる側柱建物跡である。

柱間は桁行1間が1.7m・2.0m、梁行は1間2.3mである。

S B43はS B44と重複し新しい。

S B44 (図版7)

調査区東半北端に存在する。

南北桁行3間(6.5m)、東西梁行1間(約3.9m)の規模を測る。桁行をN40°Eにとる側柱建物跡である。

柱間は東桁行で1間2.5m・2.5m・1.5m、西桁行で1間2.3m・2.3m・1.9mである。

S B44はS B45と重複するが先後関係は不明である。

S B45 (図版7)

調査区東半北端に存在する。

南北桁行2間(4.8m)、東西梁行2間(約3.65m)の規模を測る。桁行をN45°Eにとる側柱建物跡である。

柱間は桁行1間2.0m・3.8m、梁行は1間1.8mである。

S B44はS B45と重複するが先後関係は不明である。

S B46 (図版7)

調査区東半南端に存在する。

東西桁行1間(2.8m)、南北梁行1間(約2.0m)の規模を測る。桁行をN47°Eにとる側柱建物跡である。

径約30cmの規模の柱穴を使用している。

S B47 (図版7)

調査区東半南端に存在する。

南北桁行3間(4.3m)、東西梁行2間(約3.4m)の規模を測る。棟行をN25°Wにとる側柱建物跡である。

径約40cmから50cmの規模の柱穴を使用している。西桁行の柱穴は失われており、明確でない部分も多いが、残存する柱間は桁行1間1.3m・1.3m・1.7m、梁行は1間1.7mである。

2 構列

第2調査区では構列2列を検出した。調査区北西側に1列と調査区南西側に1列が位置している。S A03からS A12は第1調査区において検出・復元した。

S A01 (図版39)

第2調査区北西側に位置し、N54°Eの軸方向をとる4間の構で、延長は6.4mを測る。柱間は0.5m~2.3mと、ばらつき大きい。柱穴は径10cm~50cmの円形で、深さは、10cm~40cmである。

この樹から土師器片が出土した。

S A02 (図版39)

第2調査区南西側に位置し、N62°Wの軸方向をとる4間の構で、延長9.3m、柱間の平均値は2.3mを測る。柱穴は径10cm~40cmの円形で、深さは、20cm~50cmである。

この樹からは、遺物は出土していない。

S A03 (図版9)

調査区西端、S D03の西隣に位置する。軸方向をN46°Wにとる全長7.5mを測る4間の構列である。

柱間は1間が2.0mと1.5mである。

S A04と重複するが先後関係は不明である。

S A04 (図版9)

調査区西端に位置する。軸方向をN82°Eにとる全長6.7mを測る5間の構列である。

柱間は1間が0.7m、1.0m、1.5m、2.0mである。

S D03と切り合い新しく、S A03と重複するが先後関係は不明である。

S A05 (図版9)

調査区西端に位置する。軸方向をN68°Wにとる全長14.0mを測る7間の構列である。

柱間は1間が2.0mを基本とするが北から2間目は1.7m、3間目は2.3mである。

S D01と切り合い新しい。また、S B27・S B28と重複するが先後関係は不明である。

S A06 (図版9)

調査区西端 S A05の東隣には並行して位置する。軸方向をN65°Wにとる全長6.0mを測る3間の構列である。

柱間は1間2.0mである。

S A06はS A07・S A09と直交した位置関係にあることから同時期に機能していた可能性を考えられるが柱の間隔には違いがある。また、S B21と重複するが先後関係は不明である。

S A07 (図版9)

調査区西端、S B14の北側に近接して並行して位置する。軸方向をN24°Eにとる全長4.2mを測る3間の構列である。

柱間は1間1.4mである。

S A07はS A06・S A09と直交した位置関係にあることから同時期に機能していた可能性を考えられるが柱の間隔に違いがある。また、S B15・S B20と重複するが先後関係は不明である。

S A08 (図版9)

調査区西側南より、SD05に近接して位置する。軸方向をN70°Wにとる全長6.2mを測る5間の構列である。

柱間は1間1.4mである。

S D05と切り合い新しい。S B29とは並行した位置関係にあることから同時期に機能していた可能性を考えられる。また、S B18・S B19と重複するが先後関係は不明である。

S A09 (図版9)

調査区西側北より、S D01・02に近接して位置する。軸方向をN65°Wにとる全長6.2mを測る5間の構列である。

柱間は1間が1.4mと1.0mである。

S A06とは並行した位置関係にあることから同時期に機能していた可能性を考えられる。また、延長上にS D12があり区画として同時に機能していた可能性を考えられる。また、S B23・S B25・S B31と重複するが先後関係は不明である。

柱穴P1469から須恵器捏鉢片が出土している。

S A10 (図版9)

調査区中央南より、S B12に近接して位置する。軸方向をN45°Eにとる全長7.5mを測る5間の構列である。

柱間は1間1.5mである。

S B12の南梁行の並びがS A10と近接して存在している。方位・位置から推して同時期に存在して機能していたものと考えられる。

S A11 (図版9)

調査区中央北より、S B38に近接して位置する。軸方向をN79°Wにとる全長4.7mを測る5間の欄列である。

柱間は1間が1.4m・1.0m・1.0m・1.0m・0.3mである。

S A12 (図版9)

調査区西端、S D01の西側に近接して位置する。軸方向をN3°Eにとる全長4.9mを測る2間の欄列である。柱穴が3個であること、調査区の西壁に沿って検出されていることから調査区外に延びる建物跡の一部の可能性もある。

柱間は1間が2.3m、もう1間は2.6mである。

3 土坑・落ち込み状遺構

第2調査区の土坑34基の中で、出土遺物から時期が判明しているものは少ない。出土遺物から所属時期が中世と判明しているものは、SK26・SK34の2基である。

S K26 (図版51・写真図版54)

第2調査区北側に位置する、N68°Wに長軸方向をとる土坑である。規模は、長軸方向2.6m、短軸方向2.4m、深さ10cmを測り、方形を呈する。この土坑から土師器が出土した。

S K34 (図版15)

第2調査区北側に位置する、N65°Eに長軸方向をとる土坑である。規模は、長軸方向1.0m、短軸方向0.1m、深さ10cmを測り、長胴形状を呈する。この土坑から土師器が出土した。

第1調査区で検出された土坑及び落ち込み状遺構は115基を越える。ここでは遺物を上げたものを中心に主なものについて述べておく。

S K29 (図版43)

調査区東端において検出した。長軸1.1m・短軸1.0m・深さ約0.25mの土坑である。断面観察から径約0.9mの桶を据えていたことがわかる。

土坑からの出土遺物はなく、時期は不明である。

S K30 (図版9)

調査区東端、SK29の西隣において検出した。長軸2.6m・短軸1.0m・深さ約33cmの不定形土坑である。

土坑から15世紀代の土師器焼片が出土している。

S X07 (図版43・写真図版44)

調査区西端 S D01の北側にありSD12と切り合うもしくは取り付く位置関係にあるものである。全長4.3m・幅2.8m・深さ0.3mを測る不定形の落ち込みである。

落ち込みから15世紀代の備前焼焼鉢片が出土している。

S X08 (図版9)

調査区西側に位置する。全長1.9m・幅1.4m・深さ7cmを測る菱形に近い不定形の落ち込みである。

落ち込みから14世紀代の瓦質鍋片が出土している。

S X08はS D05と切り合い新しい。S B35と重複し先行する。

4 溝

第1調査区において検出された溝状遺構は12条である。以下主なものについて述べておく。

S D01・02（図版43・写真図版44）

調査区北西端に位置する。東西方向に流れる溝である。S D01はS D02を切っており、掘り直しの可能性が高く、まとめて述べておく。

S D01は調査区北西隅から始まり西端に流れる溝である。幅1.0～2.0m・全長22m・深さ40cmを測り調査区西端において屈曲し深い溜まりを作り出している。軸方位をN54°Wにとる。この溝は地形から推して西へ流れ、流末が溜りに流れ込むものであろう。溝内には径20cm内外の河原石が土器とともに大量に投入されている。

溝の西端の溜まりは直角の角を造り出しており、近接するS B27・28は方位がコーナーの方位に近く同時期に存在していた可能性を考えることができよう。

また、近接するS X07はS D01が半ば埋没した時点で掘られたことが判明している。

S D02は調査区北西隅から始まり弧を描きながら西に流れる溝である。幅0.5m・全長7m・深さ5cmを測りS D01と重複し先行する。地形から推して西へ流れるものであろう。

S D03（図版9）

調査区西端、S A03の東隣に位置する。南北方向に流れる溝である。幅0.5m・全長10.5m・深さ24cmを測り、走行をN55°Wにとる。この溝はS A04付近から出現しており、地形から推して南西の調査区外へ流れでゆくものと考えられる。

S A04と重複するが先後関係は不明である。

位置的にはS D01と共に機能し、建物群の西端を限る可能性があるが、根拠はない。

S D04・S D12（図版9）

ともに調査区北西端、S D01の北側に位置する。S D04・S D12はともに独立した溝であるが、関連がある遺構と考えており、ここで一緒に述べることとする。

S D04は調査区北西端、壁際にある。全長1.2m・幅0.3m・深さ9cmの溝と全長1.4m・幅0.4m・深さ10cmの溝に分かれて検出されているが、もともとは同一の溝であったと考えられる。走行をN26°Eにとる。地形から推して西の調査区外へ流れでゆくものと考えられる。

S D12はS D04の東側にありS X07と切り合うもしくは取り付く位置関係にあるものである。検出全長2.3m・幅0.3m・深さ10cmを測る。走行をN67°Wにとる。

S D12の南延長上にはS A09があり区画として同時に機能していた可能性が考えられる。またS D04はS D12と直角に交わる位置にあり、同じく同時に機能していた可能性が考えられる。

S D05（図版9）

調査区中央西よりに位置する。調査区を北東から南西に横断する溝である。検出全長24m・幅0.5m・深さ15cmを測る。走行をN45°Wにとる。流末は近代の溝にあたり消失している。

S B18ときり合い新しい。

S B31・S B32・S B33・S B35・S X08ときり合い先行する。

S D07 (図版9)

調査区中央に位置する。検出全長3.6m・幅0.3m・深さ10cmを測る。走行をN58°Wにとる。S B38ときり合い先行する。

S D08 (図版9)

調査区中央に位置する。検出全長8.0m・幅0.5m・深さ8cmを測る。走行をN40°Eにとる。S B38・S B39・S B40と同方位をもっており、同時期に機能していた可能性が高い。

S D09 (図版9)

調査区中央西より、S D05の西側に位置している。全長2.5m・幅0.4m・深さ8cmを測る。走行をN46°Eにとる。北側に近接してS B19が位置している。S D09はS B19の雨落ち溝である可能性が高い。

第2調査区において検出された溝17条の中で、出土遺物から時期が判明しているものは少ない。出土遺物から所属時期が中世と判明しているものは、S D14である。

S D14 (図版15・写真図版46)

第2調査区南側に位置する、N75°Wに長軸方向をとる溝である。規模は、長軸方向2.0m、短軸方向2.4m、深さ15cmを測り、長胴形状を呈する。この溝から15世紀代の瀬戸・美濃皿(120)が出土した。

IV 出土遺物

1 弥生時代の遺物

土器と石器がある。第1調査区のS X03からまとまって出土している点が注目される。土器3点と石鏡・石斧が出土している。(76)は磨滅しており、明瞭ではないが繩文土器の可能性がある。胎土と底部の器肉が厚いことから深鉢底部かと思われる。石器にも石匙(S 1)が1点出土していることも繩文時代の遺物の可能性を示している。

弥生土器は4点図化している。(2)はS X03の3点以外の出土品で、S H02から出土している壺である。口径に最大径を有していることから、住居跡の時期である古墳時代末ではなく、弥生時代の壺と考えられる。

(73)は弥生時代前期末の壺である。口縁端部に刻み目を有している。如意形の口縁部で端部は丸くなっている。内外面ともユビ成形を行っている。頸部下に5条のヘラ指き沈線を有する。胎土には長石などの砂粒を多く含む。(74)も壺である。口径27.6cmとやや大型で、如意形口縁で、端部は丸く、刻み目を施している。口縁部はユビにより折り曲げて成形している。外面にその痕跡が明瞭である。内外面ともにハケ整形し、端部はヨコナデで仕上げている。(75)は壺で、復原径17.1cmを測る通常の大きさである。頸部下は欠損している。頸部に2条の沈線が認められ、口縁端面には3条のヘラ指き波状文が認められる。全体にヨコナデで仕上げている。口縁端部を僅かに内側に肥厚している。胎土にはクサリ塵の砂粒多く含む。外面の色調は橙で明るみをもつ。端面に施されていることと端部を肥厚させていることから、新しい要素を感じさせる。壺2点は前期の所産であるが、セット関係を重視すれば、やや新しくなる可能性が高く、中期はじめの時期を与えておきたい。

石器は石斧(S 4)と石鏡(S 2)である。石斧は磨製柱状船刃石斧で中型の完形品である。刃先に敲打痕が認められる。石鏡は平基式である。

2 古墳～飛鳥時代の遺物

(竪穴住居跡出土土器)

竪穴住居跡から比較的まとめて出土している。S H01出土は壺(1)である。球形の小型で、径13.95cm、器高14.8cmを測る。内面ヘラケズリのちハケ整形している。

S H02出土は16個体を図化している。内訳は弥生土器1、土師器9、須恵器6で、弥生土器(2)は前代のものである。土師器は壺4(3～6)、杯5(7～11)で、小瓶品に限られている。壺は内面ヘラケズリで外ハケ整形、口縁部ヨコナデのものである。(4)も同種の壺と似るが、長胴のタイプで径が小さくなる。マダコ壺と考えている。(3)もマダコ壺かもしれない。(5)が丹波で多く見られる壺で、青野型とされている壺である。口縁部は厚く外反するもので、強いヨコナデによって作っている。(6)は小型の球形の壺で比較的精製品である。器高16.35cm、最大腹径17.15cm、口径14.75cmを測る。内面ヘラケズリで、底部内面は指圧痕が顕著である。杯の技法はほぼ同じで、外ハケズリ、内面ナデ、口縁部ヨコナデである。大きさに差があり、大型のものは粗雑な作りである。特に口縁部が内

湾する（8）（9）はラフで、一見製塙土器のようである。小型の（10）はやや丁寧な仕上がりである。須恵器は杯蓋2点、杯身2点、高杯1点、平瓶1点である。杯はロクロケズリのちロクロナデとナデ仕上げを行っている。杯身の底部は未調整で粗い仕上げである。（15）には窓壁片が付着している。

S H03出土は（18）の大型壺で、口径28.4cmを測る。口縁部は強いヨコナデを施している。

（19）～（22）はS H02・03上面の検出時に出土した土器である。どちらの住居跡かは明らかにできない。壺と杯2点ずつである。個々の技法はS H02のものと同じである。（19）は通常のやや大ぶりの壺である。（21）は大型の杯であるが、口縁端部は丁寧に仕上げているが体部には粘土紐の継ぎ目が明瞭に残っている。

S H06出土遺物は8点であるが、壺は同一個体かもしれない。（23）（24）は壺で通常の壺である。口縁部を特に強くヨコナデを施していない。磨滅が著しい。底3点の残存状態は悪く、把手も半分欠けている。（28）は須恵器杯身で、体部は内湾するが直線的である。端部は僅かに反っている。底部の器肉は厚い。稜線は明瞭である。（29）（30）は生焼けに近い焼成の悪い高杯である。無蓋高杯で透孔のないものである。ロクロナデのち仕上げナデを行っている。杯身より古い時期と思われる。

S H07は11点の土器を図化している。そのうち5点は北側土坑から出土している。壺は口径23.6cmの大型の壺1点である。外面はハケ整形、内面はヘラケズリのち板ナデで整形している。土器器杯は5点あり、（32）は大型の杯で縦方向のヘラミガキで仕上げた精製品である。外面も磨滅しているがヘラミガキが施されている。（34）～（36）も口径は異なるがヘラミガキが見られる杯である。S H02・04出土の杯に比べると調整の点で大きな差がある。（33）だけは粗い作りである。須恵器杯蓋はつまみが付くもので、器高がある程度高い。宝珠つまみ部まではどれも残っていない。（41）は杯身である。口径11.3cmと通常の大きさで口縁部のゆがみが激しいことから、セット関係は明確でない。

S H08からは2点の須恵器が出土している。杯身（42）は重ね焼きの痕跡が残っており、S H07出土杯より口径が小さい。プロボーションも稜線が明瞭でなく丸みを帯びている。壺底部（43）は不安定な平底で稜線は不明瞭である。内面にはロクロナデ後の仕上げナデが見られることから、大型品ではないであろう。

（その他の遺構出土遺物）

堅穴住居跡以外の遺構では土坑・落ち込み・ピット・溝から出土している。堅穴住居跡のように一括性の高いものは少なく1～3点が出土している。S X02が大きな遺構であることにもよるが、15点の遺物を図化している。

（44）（45）はSK01出土で、（44）は内外面ともハケ整形の壺口縁部で、（45）は磨滅しているが口径17.7cmと大型の杯身である。直線的に開き、端部は丸い。色調は白っぽく、砂粒が多く含む。

（46）はS K02出土で、土器器壺の口縁部である。頸部の器肉は厚い。砂粒多く含む。

（47）は須恵器杯身のほぼ完形品である。S K05出土で、薄く焼き上げられており、僅かに内湾する体部が端部近くで外反する。砂粒含み、やはり灰白色を呈している。

S K06出土は3点の土器器壺である。2次焼成を受けており、口縁端部は丸く仕上げている。（48）

（49）は頸部が厚く、内面ヘラケズリ、外面ハケ整形である。体部が比較的直線的に延びる点も十ノ貝遺跡出土壺に共通している。

S K08出土は（51）の須恵器杯身である。底部は平底で、体部との稜線は明瞭である。稜線はヘラケズリによっている。底部から直線的に広がり、大きく内湾して屈曲し、上方に延びてから口縁部は外反

する。端部は丸く納める。胎土はやや精良である。口径は9.6cmと小振りである。

S K28出土は(52)の須恵器杯身と(53)の上師器杯である。(52)の底部は丸底に近く、体部との接線は明瞭でない。端部は丸く納め、外方へ開く。胎土は精良で、色調も他より濃い。(53)は杯の底部で、外面はミガキと思われ、丁寧な仕上げが行われている。

(54)はS P1821出土の土師器杯である。口径19.45cm、器高5.9cmの大型で、外面はヘラケヅリのちナデ整形している。内面は輪状となる暗文状のヘラミガキが施されている。口縁部は端部近くで外反している。

(55)はS H02に調接するS P1873出土の土師器杯である。外面はハケ整形で、粘土紐の継ぎ目が見られる。内面は縱方向のヘラミガキで仕上げている。体部は内済し、端部はつまみ出して細くしている。

(56)は須恵器甕で、S D04出土である。体部内面は同心円タタキが見られる。外面は平行タタキのちカキ目が施されている。口縁部は外反し、端部は内外に肥厚している。

(57)はS X01出土の大甕の土師器甕口縁部である。

S X02出土遺物は15点と多い。土師器に限られており、甕11点、杯1点、高杯1点、瓶2点である。甕はすべて「くの字」口縁のもので、(58)はマダコ甕と考えている。頭部下に強いナデにより段を有する特徴がある。その他は甕で、内面ヘラケヅリ、外面ハケ整形が主体である。(69)は内済する体部で口縁部が内傾し、端部は角張るという、他とは異なった器形をした杯である。表面磨滅しており、整形など不明である。(70)は高杯柱状部で、杯部・据部とともに一部だけ残っている。柱状部4cmと小さいものである。(71)(72)は瓶の把手である。色調異なるが、別個体との断定もできない。

(包含層出土土器)

繩文土器1点と土師器10点と須恵器11点を図化している。(76)は表面磨滅した残存状況の悪い底部である。胎土などから繩文時代の所産かと考えられる。(77)は甕口縁部ヨコナデ仕上げである。(78)～(83)は杯で各種出土している。丁寧な作りの(83)や当遺跡で多く出土している(81)(82)、浅いタイプの内面にヘラミガキが見られる(78)である。(79)は椀状で内面ハケ整形している。(80)は浅いが器肉の厚いものである。瓶把手は2点あるが、離れた地点から出土していることから、別個体と考えられる。(86)は製塙土器の脚台部であろうか。2次焼成を受けている。

須恵器は杯蓋を2点(87)(88)図化している。つまみ部の残った完形品で、今回調査資料の中では、つまみ部まで残っているのはこの2点だけである。(87)は平たいボタン状のつまみ部で、体部は内済している。反りは小さく、口縁端部より内側に位置している。反りが小さいことからも新しい時期が考えられる。色調は白っぽい。(88)は宝珠つまみで、天井部は平たくなっている。反りが1mm前後に入っているが、ほぼ口縁端部の位置と同じである。(89)は立ち上がりの残る杯身で、底部は平たく小さい。明瞭な稜線を持たず外方へ開く。受け部は水平に近く、立ち上がりも小さくやや内傾する。底部が小さいことから、器高が高い印象を受ける。(90)は内済する体部で口縁端部から1.5mm下に最大径を持つ杯身である。最大径のところで稜線となり、端部に向かって内傾する。(91)(93)は直線的に広がる杯身である。(92)は高台部である。貼り付けの輪高台で、端部は外側に肥厚している。台付長頸甕の底部かと思われる。(94)はミニチュアの甕である。底部に焼成後の穿孔かと思われる欠損があることと底部未調整であることから、子持ち甕の可能性も残されている。(96)は甕の体部である。外面に格子タタキが見られる。(95)(97)は甕体部である。(97)は最大径20.4cmとやや大きい。

3 中世の遺物

(建物跡・柱穴からの出土遺物)

柱穴 P 1097出土の遺物として、(98) を図示した。龍泉窯系青磁碗底部片である。体部を欠き、無文・蓮弁文の判別は出来ない。内面に印花を施し、底部外面は無釉であることから、時期は上田分類BもしくはE類、14世紀代と考えられる。

柱穴 P 1425出土の遺物として、(99) を図示した。東播系須恵器捏鉢口縁部である。口縁端部は肥厚・内湾する。時期は兵庫津遺跡・池田分類D類、14世紀後半から15世紀前半と考えられる。

S A09に伴う柱穴 P 1469出土の遺物として、(100) を図示した。須恵器捏鉢口縁部である。口縁端部は肥厚・内湾する。体部内面にはヨコ刷毛を施す。東播系須恵器の範疇では捉えられないが、口縁部の形状から14世紀代の製品と考えられる。

柱穴 P 1554出土の遺物として、(101) を図示した。土師器鍋である。外方へ開く鉄かぶと形の器形をもつ。体部には右上がりの平行叩きを施す。時期は兵庫津遺跡・長谷川分類 鉄かぶと形I類、15世紀代と考えられる。

S B20に伴う柱穴 P 1879出土の遺物として、(102) を図示した。丹波燒捏鉢である。外面に「十」字のヘラ記号を施す。三本峰南窯の製品と考えられる。時期は13世紀後半から14世紀前半である。

(103) ~ (113) は第2調査区に伴う柱穴より出土した遺物である。

柱穴 P 7出土の遺物として、(104) を図示した。龍泉窯系青磁細蓮弁文碗片である。蓮弁文は退化しており、剣頭と細線が一致していないことから時期は16世紀中頃から後半と考えられる。

(103) は第2調査区に事前に設定したトレンチ内柱穴から出土している遺物である。

また、S B20に伴う柱穴 P 21出土の遺物として、(105) ~ (113) を図示した。これらの遺物はロクロを使用しない非ロクロ成形の上部器皿である。いずれも指押さえによって成形し、口縁部はヨコナデ、底部内外面はナデ調整を行っている。

土師器皿の形態は、口縁部が大きく内湾して立ち上がる器壁の厚い個体が大半を占めており (103・105・107~112) 杯に近い深みをもった形となっている。各個体とも歪みが激しく、法量にはバラツキがあるが、口径10cm前後・高さ 3 cm前後に収まるものである。

(106) は器高が2.15cmと低く、口縁部が外方へ開く形となっている。器壁が薄く京都系土師器皿に近い個体である。

(113) は形態的には (103・105・107~112) と同じである。口径は 8 cm弱と小皿の範疇で捉えられるものである。

一群の土師器皿の時期は、比較的、京都系土師器皿に近い (106) が15世紀代と考えられ、その他の個体についても形態からは14世紀から15世紀代と捉え得るものである。

(105) ~ (113) は S B20廃施設の祭祀に伴い同時期に柱穴に埋納されたものであることから15世紀の範疇でとらえても大過ないと考えられる。

(土坑・落ち込みからの出土遺物)

土坑 S K30出土の遺物として、(114) を図示した。土師器鍋である。外方へ開く鉄かぶと形の器形をもつ。口縁端部は肥厚し内傾した面をもつ。体部には叩き調整を施す。時期は兵庫津遺跡・長谷川分類 鉄かぶと形I類、15世紀代と考えられる。

土坑 S K26出土の遺物として、(115)・(116) を図示した。

(115) は土師器鍋である。口縁部は内湾し口縁部下に短い鈎をもつ。口縁端部はやや肥厚し上部に面をもつ。体部には平行叩き調整を施す。時期は兵庫津遺跡 長谷川分類 撥磨型B型列I C類に類似しており15世紀前半代と考えられる。

(116) は土師器皿である。非ロクロ成形の土師器皿である。指押さえによって成形し、口縁部はヨコナデ、底部内外面はナデ調整を行っている。法量は(106)に近似し、器高が低い個体である。器壁が薄く京都系土師器皿に近い個体である。時期は15世紀代と考えられる。

落ち込みS X08出土の遺物として、(117)を図示した。瓦質鍋である。半球形の体部に肩曲して外方へ開く口縁部、口縁端部はやや内湾し上部に面をもつ。指押さえによって成形し、口縁端部はヨコナデを施す。体部外面には指押さえ痕が顕著である。形態は兵庫津遺跡 長谷川分類鉄鍋形III C類に類似しており時期は14世紀代と考えられる。

落ち込みS X07出土の遺物として、(118)を図示した。備前焼擂鉢である。口縁部外側に面をもち下方へ垂下する。開壁幅年備前焼IV期に属する。15世紀代と考えられる。

落ち込みS X13出土の遺物として、(119)を図示した。口縁部が「く」の字に屈曲する施釉陶器皿である。内面及び外面口縁部に緑色釉薬が掛かる。近世丹波焼灰釉陶器皿と考えられる。18世紀後半から19世紀前半の時期が考えられる。

(溝状遺構からの遺物)

溝S D14出土の遺物として、(120)を図示した。瀬戸美濃系灰釉皿である。口縁端部は緩やかに外反する。時期は15世紀代である。

溝S D01出土の遺物として、(121)～(129)を図示した。

(121) は土師器鍋である。外方直線的に聞く鉄かぶと形の器形をもつ。体部には平行叩き調整を施す。時期は兵庫津遺跡 長谷川分類 鉄かぶと形II類に類似しており15世紀代と考えられる。

(122)～(125) は瓦質擂鉢をあげた。瓦質擂鉢は越前焼擂鉢を模倣したものである。

(122) は瓦質擂鉢の体部下半から底部の破片である。外面は継ハケ調整、底部外側面にはナデ調整を施す。内面には6本1単位の摺り目を放射状につける。時期は16世紀中頃である。

(123) は瓦質擂鉢の体部下半までの破片である。体部は少し丸みを帯び、口縁部は外反する。口縁部内面はナデによって凹み、体部との境に沈線を施す。また、体部内面には6本1単位の摺り目を放射状につける。調整は、口縁部はヨコナデ、体部外面は継ハケの後指押さえによる成形を行い、指頭圧痕を数多く残す。口縁部との境にはヨコ刷毛調整を施す。時期は16世紀代中頃である。

(124) は瓦質擂鉢の体部上半までの破片である。口縁部は外反する。口縁部内面はナデによって凹み、体部との境に沈線を施す。また、体部内面には6本1単位の摺り目を放射状につける。調整は、口縁部はヨコナデ、体部外面は継ハケの後指押さえによる成形を行い、指頭圧痕を数多く残す。時期は16世紀代中頃である。

(125) は瓦質擂鉢の口縁部の破片である。口縁部は外反し、口縁部内面はナデによって凹み、体部との境に沈線を施す。また調整は、口縁部はヨコナデ、体部外面は指押さえによる成形を行い、指頭圧痕を数多く残す。時期は16世紀代中頃である。

(126) は東播系須恵器擂鉢である。口縁端部は肥厚・内湾する。体部はやや丸みをもち底部との境は強いヨコナデによって窪みをみせ、やや突出する。調整は口縁部はナデ、体部外面は指押さえによる成形を行い、指頭圧痕を数多く残す。底部は回転糸切り離しである。時期は兵庫津遺跡 池田分類D類、

14世紀後半から15世紀前半の時期と考えられる。

(127) は須恵器杯蓋である。天井部の回転ヘラ削りを顕著に行い、口縁部はL字に屈曲する。奈良時代のもので溝とは直接関連しない時期のものである。

(128) は龍泉窯系青磁碗底部片である。内面に印花を施す。底部外面の高台疊付きまで施釉されている。時期は上田分類E類、15世紀代と考えられる。

(129) は丹波焼壺である。口縁部は屈曲し短く水平に伸びる。端部はやや下方へたれる。16世紀後半代と考えられる。

(包含層出土の遺物)

以下、遺構に直接伴わない包含層出土の遺物をあげる。

(130) は第1調査区ⅠB区、灰褐色土より出土した。土師器皿である。全体に歪みの大きい個体である。ロクロを使用しない非ロクロ成形の土師器皿である。指押さえによって成形し、口縁部はヨコナデ、底部内外面はナデ調整を行っている。15世紀代と考えられる。

(131) は第1調査区ⅡB区、黒褐色土より出土した。土師器皿である。調整は摩減し定かではないが、非ロクロ成形の土師器皿と考えられる。14世紀から15世紀代と考えられる。

(132) は第1調査区ⅡB区、黒褐色土より出土した。土師器皿である。細片のため法量・調整ともに詳らかではないが、(131) と同形態のものである。14世紀から15世紀代と考えられる。

(133) は第1調査区ⅢB区、灰褐色土より出土した。鍋である。焼成は堅緻であり、陶器質であることから、丹波焼の可能性もある。短く立ち上がる口縁部、口縁端部は肥厚し上面が外傾する面を持つ。体部は肩部まで残存するが、丸みを帯び外面は平行叩き、内面は刷毛目調整の後ナデ調整を施す。形態は兵庫津遺跡 長谷川分類瓔形タイプI類に属し、時期は13世紀後半から14世紀前半代と考えられる。

(134) は鍋である。第1調査区VC区より出土した。(133) と同一の形態・焼成であるが、口径は一回り大きい。焼成は堅緻であり、陶器質であることから、丹波焼の可能性もある。短く立ち上がる口縁部、口縁端部は肥厚し上面が外傾する面を持つ。体部は肩部まで残存するが、丸みを帯び外面は平行叩き、内面にはナデ調整を施す。形態は兵庫津遺跡 長谷川分類瓔形タイプI類に属し、時期は13世紀後半から14世紀前半代と考えられる。

(135) は第1調査区VI C区より出土した。土師器鍋である。外方へ聞く鉄かぶと形の器形をもつ。口縁部は内湾し受け口状に立ち上がる。端部は肥厚し内傾した面をもつ。体部には叩き調整を施す。時期は兵庫津遺跡 長谷川分類 鉄かぶと形 I類15世紀代と考えられる。

(136) は第1調査区IV C区より出土した。東播系須恵器捏鉢である。口縁上端部は面を持ち、外傾する。外面は強いヨコナデによって下端が凸帯状となる。内面はヨコナデ、外面口縁部下には指押さえ痕が顕著である。体部はヨコナデである。時期は兵庫津遺跡 池田分類D類、14世紀後半から15世紀前半と考えられる。

(137) は第1調査区より出土した。東播系須恵器捏鉢口縁部である。口縁端部は肥厚・内湾する。時期は兵庫津遺跡 池田分類D類、14世紀後半と考えられる。

(138) は第1調査区III C区より出土した。東播系須恵器捏鉢である。口縁端部は肥厚・内湾する。時期は兵庫津遺跡 池田分類D類、14世紀後半と考えられる。

(139) は第1調査区IV B区、黒褐色土より出土した。瓦賀香炉である。器形から桶形の風炉と考えられる。破片外面下端に凸帯を貼付している。全体に摩減が激しく調整は不明であるが、内面はナデ調

整であろう。16世紀代と考えられる。

(140) は第1調査区Ⅳ A区より出土した。丹波焼鉢である。口縁端部は上部に面を持ち、強いヨコナデによって外方へ若干拡張している。調整は口縁部はヨコナデ、外面体部には指押さえ痕が残る。時期は14世紀代の可能性が考えられる。

(141) は第1調査区Ⅲ C区より出土した。丹波焼捏鉢である。体部は外方へ開く。口縁端部外側面には内傾する面をもつ。13世紀後半から14世紀前半の時期が考えられる。三本峠南窯製の可能性が高い。

(142) は第1調査区Ⅱ B区、灰褐色土より出土した。丹波焼捏鉢である。(141)と同じ形態を持つ。13世紀後半から14世紀前半の時期が考えられる。三本峠南窯製の可能性が高い。

(143) は第1調査区Ⅱ C区、灰褐色土より出土した。丹波焼盤である。体部は外方へ真直ぐ開き口縁部にいたる。口縁部は強いヨコナデによって外面は若干瘤みをみせる。16世紀代と考えられる。

(144) は第1調査区、淡茶褐色土より出土した。丹波焼捏鉢である。口縁部は端部を上方へ摘み上げ、外側面に面を持つ。内面には一本引きの掘り目を施す。16世紀代と考えられる。

(145) は第1調査区、淡茶褐色土より出土した。瀬戸美濃系天日茶碗である。口縁部は真直ぐ立ち上がり、端部は外反する。15世紀代と考えられる。

(146) は第1調査区 V C区造標面上より出土した。瀬戸灰釉卸皿である。体部は外方へ開き口縁部にいたる。口縁部は内湾し、端部上に面を持つ。内面に卸目が残る。15世紀代と考えられる。

(147) は第1調査区Ⅱ B区、灰褐色土より出土した。瀬戸灰釉丸碗底部である。削り出し高台の豊付きには回転糸切り痕跡が残る。15世紀代と考えられる。

(148) は第1調査区 V C区より出土した。龍泉窯系青磁細蓮弁文碗片である。蓮弁文は退化しており、刺頭と細線が一致していないことから時期は上田分類B - IV類、16世紀中頃から後半と考えられる。

(149) は第2調査区 S H 05より出土した。混入とみなすことが出来る。龍泉窯系青磁雷文帶碗片である。退化した雷文を施す。15世紀代と考えられる。

(150) は第1調査区Ⅰ B区より出土した。龍泉窯系青磁碗である。口縁部は小さく玉縁状を成し外反する。14世紀代と考えられる。

(151) は第1調査区Ⅱ C区より出土した。粗製の龍泉窯系青磁底部碗である。高台豊付き・高台裏は施釉していない。13世紀後半から14世紀代と考えられる。

(152) は第1調査区 V C区より出土した。須恵質の半瓦である。凹面はナデ、凸面は縦方向の削りの後ナデ調整を施す。

以上の中世遺物については、岡田章一氏の御教示を得た。

(参考文献)

● 兵庫県教育委員会『兵庫津遺跡Ⅱ』2004年

● 上田秀夫「14~16世紀の青磁碗の分類」「貿易陶磁研究No 2」日本貿易陶磁研究会 1982年

4 石器

石器は9点出土している。3点は弥生時代のもので、他の5点は中世の遺物で、1点は不明である。

S 1はサスカイト製の石匙である。豊穴住居跡S H05の貼り床から出土しているが、住居跡の時期よりも古くなるものと思われる。中央部には表裏ともに自然面を残している。つまみ部も大きく抉ってはない。

S 2は弥生時代の落ち込みであるS X03から出土している。S 4や弥生土器も同一の遺構から出土している唯一の弥生時代の遺構である。サスカイト製の平基式の石鏡である。裏面には自然面が多く残している。

S 3は小型の砥石かと思われる製品である。にぶい黄櫈からにぶい黄櫈を呈している鉄器用のものと考えている。時期は不明であるが、豊穴住居跡の時期かと考えられる。

S 4はオリーブ灰を呈した流紋岩かと思われる石材でつくられた石斧である。断面は隅円長方形となり、全面丁寧に磨かれて仕上げられている。長さ12.8cmとやや小振りの船刃石斧である。頭部で2.8cm、刃部で3.5cm、最大幅は刃から2cmから中位にあり4.25cmを測る。刃部は鋸く両側から磨いている。

S 5は滑石製の石鏡を転用した湿石である。第2調査区南西隅に近い掘立柱建物跡の柱にならないピット(P 1)から出土している。石鏡の口縁部を再利用しており、復原すると直径20cm前後になろうかと思われる。口縁部から4cmのところに径0.5cmの円孔を施している。図上の上下は磨り切っているが、鍋の下側となる図の右側は粗い削れ口のままである。

S 6～S 9は砥石である。S 6は磨り面が不明瞭な未製品である。石材が砂岩系なので砥石と考えた。にぶい黄櫈をしている。S D01出土である。

S 7は長側面をすべて磨り面に使用している。S P 1562出土で、灰黄櫈を呈している。主軸方向に平行と斜め方向の磨り目がみられる。

S 8は2面を使用している。上面は使用頻度が高く中央が窪んでいるほど使っている。この面は斜め方向の磨り目が多く、側面は平行の磨り目が主体である。やや硬質の暗灰黄の石材である。

S 9は全長33.25cmの大型の砥石である。直方体であるが、一部コーナーが取れて丸みを帯びている。長側面はすべて使用している。S D01出土で、煤が付着している。

5 金属器

鉄器5点、銭貨15点が出上している。銭貨のうちS P 1820から11枚が、S X 15から3枚がまとまって出土している。それ以外に上層から寛永通寶が1枚出土している。銭貨の残りは悪い。鉄器の遺構出土はS P 1018・S D01・S K 32だけで、他の2点は包含層出土である。

M 1はヤリガンナである。茎部分先端は欠失しているが完形に近い。関は僅かに作り出している。反対側は一部欠失していることから断定できないが、片側だけが顕著であり、逆側は明瞭な関は設けないようである。刃の長さ5.1cm、幅1.1cm、厚さ0.4cmである。先端から1cmのところから切先部は2mm反っている。柄に挿入するタイプで、柄まで鉄ではないものである。

M 2は刀子先端部である。長さ4.6cmで切先の鋭いものである。棟は面取りしているが、切先部のみ研いでおり稜線となっている。刃部は両面から作り出しているが、図上の下面の方が鋭くなっている。

M 3は茎で、何の茎部かは不明である。断面方形で、端部に近いと思われる。

M 4も棒状の製品で、折り曲げられた状態になっている。復原すると15.5cmになる。断面は方形で、

片側は古い段階の折れと思われる。折れたことによって、折り曲げて廃棄したものかと推測される。

M5は鎌である。完形で、長さは12.4cmで、刃の長さ18.5cm、幅4.0cmを測る。刃部は両側から作り出し、反りは2.5mmある。やや内湾する直刀鎌である。刃部の反りは8ミリ、柄との接合は釘によるものである。端部を輪状に細く曲げて接合部としている。鍛造で作り出している。

(S P1820出土銭貨)

11枚の銭貨の内訳は判読できたものはすべて北宋銭である。淳化元寶（初鑄年990年）、天聖元寶（1023年）、皇宋通寶（1038年）、熙寧元寶（1068年）、元豐通寶（1078年）、元祐通寶（1086年）、政和通寶（1111年）の7種9枚が確認されている。

(S X15出土銭貨)

□農□□が1枚あり、元豊通寶かと思われる。他の2枚は判読できない。3枚とも地金の色調が赤銅色を呈する。

M20は寛永通寶で、株除去時に出土している。表土もしくはそれに近い土層からの出土であろう。古寛永である。

第1表 土器観察表

No.	出土地・土層	種別	器種	径 (cm)	高 (cm)	底径 (cm)	形態的特徴	技法	施	備考
1	SH01 重井アゼ	土器器	壺	13.95	14.80		球形の全体前から八の字型に偏かに外反する口縁部が付く。外面は底最も付いたり、口縁部が付く。			
2	SH02 木闇上東端	弔生 壺		16.80	15.90		外面は底内面に窓形の内面付、窓形ヨコナリ、縫合目、内面は窓形の内面付、窓形ヨコナリ、縫合目。			窓形ない、縫合目ない。
3	SH02 SP1874	土器器	壺	11.00	4.25		内面は窓形の内面付、窓形ヨコナリ、縫合目。			内側する体部から外反する口縁部、窓形ない。
4	SH02 SP1874	土器器	マダコ壺	13.15	6.55		外側する体部から外反する口縁部、窓形ない。			窓形ない。
5	SH02	土器器	壺	15.60	5.30		外側する体部から外反する口縁部、窓形ない。			窓形ない。
6	SH02	土器器	壺	14.75	16.35		外側する体部、窓形ヨコナリ、口縁部が付く。			窓形内側に内側する各種から外反する口縁部、窓形丸い。
7	SH02 SP1874	土器器	杯	14.65	6.70		外側する体部、窓形ヨコナリ、口縁部が付く。			窓形内側から窓形外側する各種から外反する口縁部、窓形丸い。
8	SH02	土器器	杯	14.05	8.00		外側する体部、窓形ヨコナリ、口縁部が付く。			窓形内側から窓形外側する各種から外反する口縁部、窓形丸い。
9	SH02 底面上	土器器	杯	15.00	7.20	(5.75)	外側する体部、窓形ヨコナリ、口縁部が付く。			窓形内側から窓形外側する各種から外反する口縁部、窓形丸い。
10	SH02 SP1874	土器器	杯	10.55	3.75		外側する体部、窓形ヨコナリ、口縁部が付く。			窓形内側から窓形外側する各種から外反する口縁部、窓形丸い。
11	SH02 SP1874	土器器	杯	14.45	5.60		外側する体部、窓形ヨコナリ、口縁部が付く。			窓形内側から窓形外側する各種から外反する口縁部、窓形丸い。
12	SH02	須恵器	杯盤	10.00	3.70		外側する体部、窓形ヨコナリ、口縁部が付く。			窓形内側から窓形外側する各種から外反する口縁部、窓形丸い。
13	SH02 SP1874	須恵器	杯盤	11.80	3.90		外側する体部、窓形ヨコナリ、口縁部が付く。			窓形内側から窓形外側する各種から外反する口縁部、窓形丸い。
14	SH02 SP1873	須恵器	杯身	8.65	2.75		外側する体部、窓形ヨコナリ、口縁部が付く。			窓形内側から窓形外側する各種から外反する口縁部、窓形丸い。
15	SH02 SP1873	須恵器	杯身	9.75	3.20		外側する体部、窓形ヨコナリ、口縁部が付く。			窓形内側から窓形外側する各種から外反する口縁部、窓形丸い。
16	SH02	須恵器	杯身	10.15	3.70		外側する体部、窓形ヨコナリ、口縁部が付く。			窓形内側から窓形外側する各種から外反する口縁部、窓形丸い。
17	SH02 SP1873	須恵器	平腹(浅腹)	5.70	4.90		内側する体部から外反する口縁部、窓形丸い。			窓形内側から窓形外側する各種から外反する口縁部、窓形丸い。
18	SH03 SP1884	土器器	壺	28.40	12.05		外側の窓形、内面窓形、窓形ヨコナリ、口縁部が付く。			窓形内側から窓形外側する各種から外反する口縁部、窓形丸い。
19	SH02-03	土器器	壺	21.55	5.00		外側の窓形、内面窓形、窓形ヨコナリ、口縁部が付く。			窓形内側から窓形外側する各種から外反する口縁部、窓形丸い。
20	SH02-03	土器器	壺	31.60	4.45		外側の窓形、内面窓形、窓形ヨコナリ、口縁部が付く。			窓形内側から窓形外側する各種から外反する口縁部、窓形丸い。
21	SH02-03	土器器	杯	15.90	6.35		外側の窓形、内面窓形、窓形ヨコナリ、口縁部が付く。			窓形内側から窓形外側する各種から外反する口縁部、窓形丸い。
22	SH02-03	土器器	杯	12.80	3.25		外側の窓形、内面窓形、窓形ヨコナリ、口縁部が付く。			窓形内側から窓形外側する各種から外反する口縁部、窓形丸い。
23	SH06 東側あぜ1・2 G場	土器器	壺	15.25	3.65		内面窓形の内面付、窓形ヨコナリ、口縁部が付く。			窓形内側から窓形外側する各種から外反する口縁部、窓形丸い。
24	SH06 東側	土器器	壺	17.05	10.10		外側の窓形、内面窓形、窓形ヨコナリ、口縁部が付く。			窓形内側から窓形外側する各種から外反する口縁部、窓形丸い。
25	SH06 黒褐色土	土器器	瓶	19.80			外側の窓形、内面窓形、窓形ヨコナリ、口縁部が付く。			窓形内側から窓形外側する各種から外反する口縁部、窓形丸い。
26	SH06	土器器	瓶(把手)				北・東形			
27	SH06	土器器	瓶(把手)				北・東形			
28	SH06 西側あぜ2・4 G場	須恵器	杯身	10.20	4.50	7.30	内面窓形、窓形ヨコナリ、窓形ヨコナリ、口縁部が付く。			窓形内側から窓形外側する各種から外反する口縁部、窓形丸い。
29	SH06 底面	須恵器	杯身			(4.10)	内面窓形、窓形ヨコナリ、窓形ヨコナリ、口縁部が付く。			窓形内側から窓形外側する各種から外反する口縁部、窓形丸い。

No	出土地・土層	種別	基盤	口径 (cm)	器高 (cm)	技法	他	形態の特徴	備考
30 SH06 床面	須恵器 瓶	土師器	瓶	(33.6) (9.20)	9.50	印加法 ¹ 、瓶内部は多面鏡の仕上げ ²		内情する杯部から外反する脚部	
31 SH07 北側土坑	土師器 杯	土師器	杯	(19.65) (3.20)	9.20	外面部が彫影、内面部が丸の底 ³ 、口縁部凹切 ⁴	内情する杯部から外反する口縁部、彫影肥厚 ⁵ もしい	内情する杯部から外反する口縁部、彫影肥厚 ⁵ もしい	
32 SH07 北側土坑	土師器 杯	土師器	杯	(10.20)	3.45	外面部が彫影、内面部が丸の底 ³ 、口縁部凹切 ⁴	内情する杯部から外反する脚部	内情する杯部から上へ尖る	
33 SH07 南側土坑	土師器 杯	土師器	杯	(13.90) (2.65)	9.65	外面部が彫影、内面部が丸の底 ³ 、口縁部凹切 ⁴	内情する杯部から外反する脚部	内情する杯部から上へ尖る	
34 SH07 南側土坑	土師器 杯	土師器	杯	(13.05) (4.50)	9.80	外面部が彫影、内面部が丸の底 ³ 、口縁部凹切 ⁴	内情する杯部から外反する脚部	内情する杯部から上へ尖る	
35 SH07	土師器 杯	土師器	杯	(15.40) (3.60)	7.60	外面部が彫影、内面部が丸の底 ³ 、口縁部凹切 ⁴ 、その他の凹切 ⁵ 、	内情する杯部から外反する脚部	その他の凹切 ⁵	
36 SH07	土師器 杯	土師器	杯	(11.20) (1.70)	7.00	印加法 ¹	底部がつぶく、底部の内側がカット ⁶	底部がつぶく、底部の内側がカット ⁶	
37 SH07 北側土坑	須恵器 杯	須恵器	杯	(13.35) (1.75)	7.50	縦筋の少ない底 ⁷ 、残る突起、底部は直角的腰部 ⁸ もしい	縦筋の少ない底 ⁷ 、残る突起、底部は直角的腰部 ⁸ もしい		
38 SH07	須恵器 葵	須恵器	葵	(13.60) (1.60)	7.60	印加法 ¹ 、口縁部が斜め ⁹ 、底部が丸の底 ³	外反する杯部から外反する脚部	外反する杯部から外反する脚部	
39 SH07	須恵器 葵	須恵器	葵	(13.80) (2.80)	7.80	印加法 ¹ 、口縁部が斜め ⁹	外反する杯部から外反する脚部	外反する杯部から外反する脚部	
40 SH07	須恵器 介身	須恵器	介身	(11.30)	7.25	印加法 ¹ 、底部が丸の底 ³ 、	内情する杯部から外反する脚部	内情する杯部から外反する脚部	
41 SH08	須恵器 杯	須恵器	杯	(10.40)	3.15	印加法 ¹ 、底部が丸の底 ³ の後 ¹⁰ 、「直輪」 ¹¹ の付け ¹²	内情する杯部から外反する脚部	内情する杯部から外反する脚部	
42 SH08	須恵器 杯	須恵器	杯	(4.00) (6.25)	7.70	印加法 ¹ 、底部が丸の底 ³ の後 ¹⁰ 、「直輪」 ¹¹ の付け ¹²	内情する杯部から外反する脚部	内情する杯部から外反する脚部	
43 SH08	須恵器 葵底部	須恵器	葵底部	(14.20) (3.50)	7.50	印加法 ¹ 、口縁部が斜め ⁹ 、底部が丸の底 ³	内情する杯部から外反する脚部	内情する杯部から外反する脚部	
44 SK01	土師器 杯	土師器	杯	(11.70) (3.80)	7.80	印加法 ¹ 、底部が丸の底 ³	内情する杯部から外反する脚部	内情する杯部から外反する脚部	
45 SK01	土師器 杯	土師器	杯	(11.70) (4.80)	9.80	「横筋」 ¹³	内情する杯部から外反する脚部	内情する杯部から外反する脚部	
46 SK02	土師器 杯	土師器	杯	(12.10)	3.95	印加法 ¹ 、底部が丸の底 ³	内情する杯部から外反する脚部	内情する杯部から外反する脚部	
47 SK05	土師器 杯	土師器	杯	(20.80)	9.00	印加法 ¹ 、底部が丸の底 ³	内情する杯部から外反する脚部	内情する杯部から外反する脚部	
48 SK06	土師器 杯	土師器	杯	(22.40) (1.065)	10.65	外面部が彫影、内面部が丸の底 ³ から丸の底 ³ へ、口縁部凹切 ⁴	内情する杯部から外反する脚部	内情する杯部から外反する脚部	
49 SK06	土師器 杯	土師器	杯	(4.45)	7.80	外面部が彫影、内面部が丸の底 ³ から丸の底 ³ へ、口縁部凹切 ⁴	内情する杯部から外反する脚部	内情する杯部から外反する脚部	
50 SK06	土師器 杯	土師器	杯	(9.60) (3.45)	6.20	印加法 ¹ 、底部が丸の底 ³	内情する杯部から外反する脚部	内情する杯部から外反する脚部	
51 SK08	須恵器 杯	須恵器	杯	(10.75)	3.65	印加法 ¹ 、底部が丸の底 ³	内情する杯部から外反する脚部	内情する杯部から外反する脚部	
52 SK28	土師器 杯	土師器	杯	(2.05) (6.15)	6.15	印加法 ¹ 、底部が丸の底 ³	内情する杯部から外反する脚部	内情する杯部から外反する脚部	
53 SK28	土師器 杯	土師器	杯	(19.45) (5.90)	9.50	外面部が彫影、内面部が丸の底 ³ 、口縁部凹切 ⁴	内情する杯部から外反する脚部	内情する杯部から外反する脚部	
54 SP1821	土師器 杯	土師器	杯	(11.40)	3.95	外面部が彫影、内面部が丸の底 ³ 、内面磨文	内情する杯部から外反する脚部	内情する杯部から外反する脚部	
55 SP1873	土師器 杯	土師器	杯	(20.75) (5.35)	9.35	外面部が彫影、内面部が丸の底 ³ 、内面磨文	内情する杯部から外反する脚部	内情する杯部から外反する脚部	
56 SD04	土師器 葵	土師器	葵	(7.77)	7.00	「直輪」 ¹³ 、底部が丸の底 ³	内情する杯部から外反する脚部	内情する杯部から外反する脚部	
57 SK01	土師器 葵	土師器	葵	(12.10) (4.20)	7.10	「直輪」 ¹³ 、底部が丸の底 ³	内情する杯部から外反する脚部	内情する杯部から外反する脚部	
58 SK02	土師器 マダラ型	土師器	マダラ型	(13.40) (4.10)	7.50	「直輪」 ¹³ 、底部が丸の底 ³	内情する杯部から外反する脚部	内情する杯部から外反する脚部	
59 SK02	土師器 葵	土師器	葵	(13.40) (4.10)	7.50	「直輪」 ¹³ 、底部が丸の底 ³	内情する杯部から外反する脚部	内情する杯部から外反する脚部	

No.	出土地・土層	種別	番種	口径 (cm)	底径 (cm)	技法	備考	形態の特徴
90	黒褐色土層	須恵器	杯身	(9.80) 4.35	(6.20) (3.66)	凸凹手(内側)で内側を尖る 「カバハリ」の切妻口		凸凹手(内側)で内側を尖る 「カバハリ」の切妻口
91	現場立会探査	須恵器	杯身	(11.60) 7.50	(7.50) (3.95)	「カバハリ」の切妻口 「カバハリ」の切妻口 内凹(外へ)と内面多方向の上仕上げ		明瞭な輪郭を持たず、直線的に「カバハリ」の切妻口
92	黒褐色土層	須恵器	底部					平たい底盤で輪高も外方へ盛んなる 輪郭的で底部へかかる「内面直輪」
93	黒褐色土層	須恵器	杯身					輪郭玉(手)の体部で平底、底成多穿孔か?
94	トレンチA残土中	須恵器	ミニニアチャコ皿	(2.75) 4.20	(2.75) 4.20	「カバハリ」 「カバハリ」		
95	日-12トレンチ	須恵器	盤	(8.60) 6.30	(6.30) 6.30	内凹(外) 内凹(外)		骨が張る頭部に向かって内凹する 内凹する
96	灰褐色土層	須恵器	蓋					
97	機械削面	須恵器	蓋	(11.00) 2.46	(11.00) 5.4	内凹(外)から外面部、切妻口、「瓦面式」底形 内凹(外)付まで地盤、高台盤は露胎		輪郭玉(手)の体部で平底、底成多穿孔か?
98	SZ1097	青磁	碗底部					見込みに印文
99	SZ1425	須恵器	盤鉢	(3.9) 21.60	(3.9) 21.60	内凹(外)と内面斜削毛 内凹(外)と内面斜削毛		内凹(外)と内面斜削毛
100	SZ1469	須恵器	盤鉢	(4.00) 11.10	(4.00) (2.66)	内凹(外)と内面斜削毛 内凹(外)と内面斜削毛		内凹(外)と内面斜削毛
101	SZ1554	土師器	鍋					
102	SZ1879	無輪器	器鉢					
103	抵抗区ピット							
104	P7	青磁	碗	(12.40) 3.15	(12.40) 3.15	内凹(外) 内凹(外)		内凹(外)と内面斜削毛
105	P21	土師器	皿	10.85 6.10	10.65 6.10	内凹(外)と内面斜削毛 内凹(外)と内面斜削毛		内凹(外)と内面斜削毛
106	P21	土師器	皿	10.65 7.40	10.65 7.40	内凹(外)と内面斜削毛 内凹(外)と内面斜削毛		内凹(外)と内面斜削毛
107	P21	土師器	皿	(9.80) 2.50	(7.15) (2.66)	内凹(外)と底斜面はナメ、底部外周は指付内凹(外)と底斜面はナメ、底部外周は指付内凹(外)と底斜面はナメ		内凹(外)と底斜面はナメ
108	P21	土師器	皿	(10.20) 2.70	(7.10) 2.70	「峰城」ため輪帯と明 「峰城」ため輪帯と明		「峰城」ため輪帯と明
109	P21	土師器	皿	11.00 3.45	8.10 3.45	内凹(外)と内面斜削毛 内凹(外)と内面斜削毛		内凹(外)と内面斜削毛
110	P21	土師器	皿	10.40 2.95	8.15 2.95	内凹(外)と内面斜削毛 内凹(外)と内面斜削毛		内凹(外)と内面斜削毛
111	P21	土師器	皿	9.85 3.30	5.65 3.30	内凹(外)と内面斜削毛 内凹(外)と内面斜削毛		内凹(外)と内面斜削毛
112	P21	土師器	皿	9.90 2.90	6.50 2.90	内凹(外)と内面斜削毛 内凹(外)と内面斜削毛		内凹(外)と内面斜削毛
113	P21	土師器	小皿	7.75 2.10	5.40 2.10	内凹(外)と内面斜削毛 内凹(外)と内面斜削毛		内凹(外)と内面斜削毛
114	SK30	土師器	鍋	(6.40) 4.80	(6.40) 4.80	内凹(外)と内面斜削毛 内凹(外)と内面斜削毛		内凹(外)と内面斜削毛
115	SK26	土師器	鍋					
116	SK26	土師器	皿	(10.05) 2.30	(8.25) (5.90)	内凹(外)と内面斜削毛 内凹(外)と内面斜削毛		内凹(外)と内面斜削毛
117	SX08	瓦窯器	鍋	(20.70) 5.40	(20.70) (2.10)	内凹(外)と内面斜削毛 内凹(外)と内面斜削毛		内凹(外)と内面斜削毛
118	SX07	瓦窯器	盤鉢					
119	SX13	瓦窯器	皿					

No.	出土地・土層	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	技法	特徴	形態の特徴	参考
I20 SD14	鳥取県	三	直筒器	(9.60)	2.10	(3.95)	内面が外面口縁部に褐色、底部は黒褐色とちりばめ	体部は頭から立ち上がり、口縁部は丸みを欠く	横口夷焼	
I21 SD01	十勝器	鉢		(3.80)		(1.25)	内面が外側口縁部に褐色	外側全体部は平行なタキ	6単位の留目	
I22 SD01	瓦葺土器	焰鉢		(4.60)		(1.25)	口縁部が窪む	内面に深い凹部と底盤	6単位の留目	
I23 SD01	瓦葺土器	焰鉢		(30.70)	8.45	(6.45)	口縁部が窪む	内面に深い凹部と底盤	6単位の留目	
I24 SD01	瓦葺土器	焰鉢		(28.00)	(3.30)	(6.30)	口縁部が窪む	内面に深い凹部と底盤	6単位の留目	
I25 SD01	瓦葺土器	焰口縁深窓		(32.40)	(3.00)	(7.00)	口縁部が窪む	内面に深い凹部と底盤	丹波燒	
I26 SD01	須恵器	捏鉢		(24.50)	8.80	(1.40)	口縁部が窪む	内面が窪む	口縁部は外へ開き、内面に浅い凹部と底盤	
I27 SD01	須恵器	平窓		(16.70)	(2.10)	(4.50)	口縁部が窪む	内面が窪む	口縁部は外へ開き、内面に浅い凹部と底盤	
I28 SD01	青	碗							口縁部は外へ開き、内面に浅い凹部と底盤	
I29 SD01	無輪器	壺		(39.40)	(2.95)	(6.50)	高台基座輪	体部内面に指壓正方形	「壺は解説見、足外方へのびる」	丹波燒
I30 人力擺削	灰褐色土層	土師器	小皿	7.20	1.60	2.40	口面が底部内面に斜め	底部内面はナデ、底部外側はナデ、底部外側はナデ、底部内面はナデ、底部外側はナデ	底部外側はナデ、底部内面はナデ、底部外側はナデ、底部内面はナデ、底部外側はナデ	
I31 人力擺削	黑褐色土層	土師器	皿	(9.50)	(2.10)	(5.00)	口面が底部内面で窪む	口縁部は窪む	底部外側はナデ、底部内面はナデ	
I32 黑褐色土層	土師器	皿			(2.00)		口面が底部内面で窪む	口縁部は窪む	底部外側はナデ、底部内面はナデ	
I33 人力擺削	灰褐色土層	無輪器	湯舟	(16.20)	(6.60)	(6.60)	口縁部が窪む	外側は平行外側、内面は浅く窪む	底部外側はナデ、底部内面はナデ	底径(18.00)
I34 滲伏焼拂内		無輪器	湯舟	(23.70)	(4.30)	(4.30)	口縁部が窪む	外側は平行外側、内面は浅く窪む	口縁部は窪む	
I35 土師器	鉢			(33.60)	(4.10)	(4.10)	口縁部が窪む	外側は平行外側、内面は浅く窪む	口縁部は窪む	
I36 人力擺削	北西コーナー部	須恵器	捏鉢			(2.50)	口縁部が窪む	外側は平行外側、内面は浅く窪む	口縁部は窪む	
I37 滲伏焼拂		須恵器	捏鉢	(27.30)		(3.30)	口縁部が窪む	外側は平行外側、内面は浅く窪む	口縁部は窪む	
I38 人力擺削		須恵器	捏鉢	(24.80)		(3.80)	口縁部が窪む	外側は平行外側、内面は浅く窪む	口縁部は窪む	
I39 人力擺削	黑褐色土層	瓦葺土器	季炉	(7.10)			内面はナデ、外面は不明		内面はナデ、外面は不明	
I40 人力擺削		無輪器	鉢	(21.20)	(3.70)	(4.00)	口縁部は窪む	外側は平行外側、内面は浅く窪む	口縁部は窪む	
I41 人力擺削		無輪器	鉢	(28.30)	(8.00)	(8.00)	口縁部は窪む	外側は平行外側、内面は浅く窪む	口縁部は窪む	
I42 人力擺削	灰褐色土層	無輪器	鉢	(33.00)	(6.40)	(6.40)	口縁部は窪む	外側は平行外側、内面は浅く窪む	口縁部は窪む	
I43 人力擺削	灰褐色土層	無輪器	鉢	(16.70)	5.1	(8.60)	口縁部が窪む	外側は平行外側、内面は浅く窪む	口縁部は窪む	
I44 鹽軸形削	淡茶褐色土	無輪器	焰鉢			(3.40)	1枚筋の切り目を残す。		1枚筋の切り目を残す。	丹波燒
I45 機械削削	淡茶褐色土	無輪器	鉢	(12.00)			口縁部は窪む	外側は平行外側、内面は浅く窪む	口縁部は窪む	
I46 重複焼拂		無輪器	鉢	(11.80)	(2.90)	(4.00)	口縁部が窪む	外側は平行外側、内面は浅く窪む	口縁部は窪む	横口夷焼
I47 人力擺削	灰褐色土層	無輪器	鉢			(1.50)	(5.40)	内面が外側に窪む	内面が外側に窪む	横口夷焼
I48 滲伏焼拂		青	壺			(2.30)		内面が外側に窪む	内面が外側に窪む	經夏弁文鏡
I49 SH05		青	壺			(2.30)		内面が外側に窪む	内面が外側に窪む	常文等院

No	出土地・土釋	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	技法	他	形態の特徴	備考
150	人力掘削 切り株除去時	青磁	瓶口壺形	(240)	内外表面・基盤			口縁部は小さな上唇を有する	
151	人力掘削 切り株除去時	青磁	碗底部	(280)	(6.00)	内面・外台壺付口沿まで施釉、臺付・高台裏は露胎			
152	人力掘削	瓦	平瓦	長7.90	幅6.40	厚1.60	表面はナデ	表面は施釉方向の側面の後ナデ	

第2表 石器計測表

No	出土地・土層	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
S 1	SH05貼り床	石匙	4.5	6.2	0.8		サスカイト
S 2	SX03	石鏃	2.3	1.65	0.2	1.1	サスカイト
S 3	黒褐色土層	砥石?	4.35	3.2	2.75	49.4	
S 4	黒褐色土層	石斧	12.8	4.1	2.85	318.8	
S 5	P1	温石	10.25	5.9	1.5	160.6	石鎚転用
S 6	SD01	砥石	13.3	11.8	4.7	721.3	磨り面不明瞭
S 7	SP1562	砥石	10.45	4.15	3.5	213.7	
S 8	黒褐色土層	砥石	16.2	9.6	5.7	752.7	
S 9	SD01	砥石	33.25	7.6	6.8	1625	煤付着、磨り面4面

第3表 金属器計測表

No	出土地・土層	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
M 1	SP1018	ヤリガンナ	6.00	1.00	0.35	5.70	
M 2	包含層	刀子	4.50	1.25	0.35	4.40	刃先のみ
M 3	灰褐色土層	茎	7.30	0.60	0.60	8.40	
M 4	SD01	茎	19.50	0.55	0.45	20.00	折り曲げられている
M 5	SK32	錘	12.40	21.60	0.45	79.00	
M 6	SP1820	錢貨	2.55	2.55	0.15	0.90	
M 7	SP1820	錢貨・元豊通寶	2.55	2.55	0.15	1.70	
M 8	SP1820	錢貨・淳化元寶	2.55	2.55	0.15	1.40	
M 9	SP1820	錢貨・元豊通寶	2.45	2.45	0.15	1.00	
M10	SP1820	錢貨・天聖元寶	2.55	2.55	0.15	1.20	
M11	SP1820	錢貨・皇宋通寶	(2.10)	(2.10)	0.15		M12と銹着
M12	SP1820	錢貨・政和通寶	2.60	(2.45)	0.15		M11と銹着
M13	SP1820	錢貨・熙寧元寶	(2.40)	(2.35)	0.15	1.30	
M14	SP1820	錢貨・熙寧元寶	(2.10)	(1.85)	0.15	1.00	
M15	SP1820	錢貨・元祐通寶	(2.45)	2.55	0.10	1.90	
M16	SP1820	錢貨	2.40	2.45	0.10	1.60	
M17	SX15	錢貨	(2.10)	(1.60)	0.15	0.70	
M18	SX15	錢貨	(2.25)	(1.85)	0.10	1.00	
M19	SX15	錢貨	(2.30)	(1.85)	0.15	0.40	
M20	株除去時	錢貨・寛永通寶	2.30	2.25	0.10	1.60	

()は残存値

V 十ノ貝遺跡の立地と地形環境

青木 哲哉（立命館大学非常勤講師）

1はじめに

人間は、自然環境に影響され、またそれを利用しながら活動してきた。中でも地形は、人間の生活舞台であり、活動の場となってきただけに、地形環境と人間生活との間には密接な関係が存在する。地形環境は、第四紀に変化を続け、現在に至っている。そのため過去の人間生活を浮き彫りにするには、各時期の地形環境とその変化を明らかにすることが必要と考えられる。

人間生活の解明につながる地形環境は、数万年や數千年オーダーでの考察だけでなく、それより細かいオーダーで捉えなければならない。これには、考古遺跡の発掘調査区における地形・地質調査が有効な手段となる。調査区では、微地形の観察や堆積物の詳細な区分ができる、地形環境を細かいオーダーで復原できる。同時に人間活動の痕跡である遺構が検出されるため、過去の人間生活が知られる。考古遺跡の発掘調査区では、地形環境と人間生活の関わりについても考察できるのである。

本稿では、十ノ貝遺跡の地形環境を考察し、その立地について明らかにしたい。調査では、主に1万6000分の1空中写真の判読と現地踏査によって遺跡周辺の地形を区分し、また調査区内外における地質断面の観察から堆積物の検討を行った。こうして得られた調査結果に発掘調査の成果を加味して、地形環境と遺跡の立地を考察した。

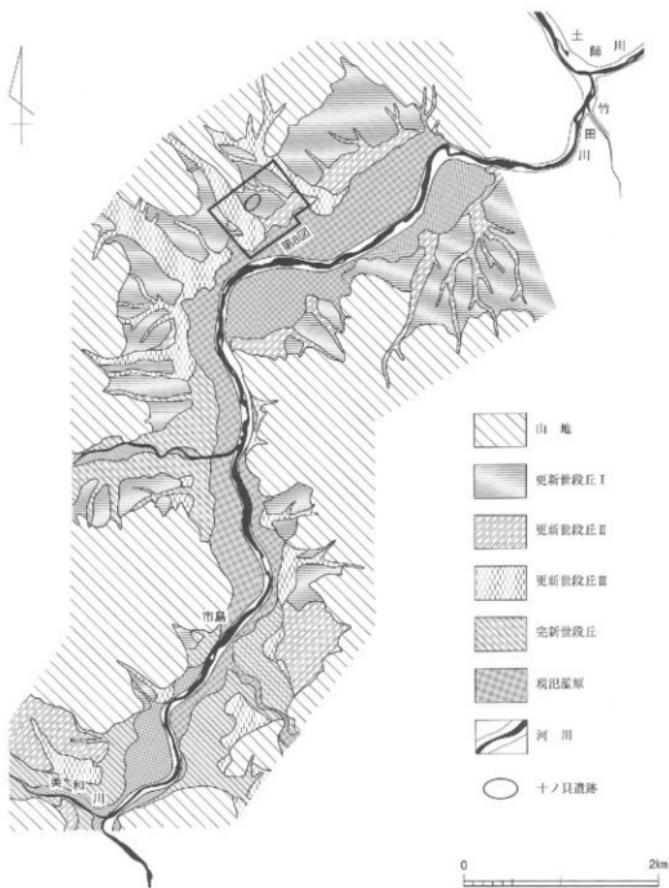
2竹田川中・下流部の地形面区分

竹田川は福知山盆地で山良川に注ぎ込む土師川の支流である。この川は、上流部で西へ流れ、その後ほぼ北流した後、下流部で北東に向きを変えて土師川に合流する。その間竹田川には、黒井川や美和川、前山川などの支流が多数流れ込む。3万年前以前には、由良川の大規模な流路変更があったと考えられている。それまでの由良川は、福知山盆地から土師川ならびに竹田川を今と逆に流下し、さらに黒井川沿いの平野を西へ流れ、標高およそ90mの谷中分水界を経て氷上盆地の南部で加古川に注いでいた。その後福知山盆地で河川争奪が起こり、現在の水系となったのである¹⁾。

竹田川の中・下流部では、河川に沿って狭長な平野がみられる。その周囲には、標高300~400m台の低い山地が連なり、丘陵は認められない。平野は更新世段丘と沖積低地に分けられ、更新世段丘はさらに3面に、また沖積低地は完新世段丘と現氾濫原に細分される（第7図）。本稿では、それらのうち更新世段丘を高位のものから順に更新世段丘Ⅰ~Ⅲと呼ぶことにする。

更新世段丘Ⅰ この段丘は、竹田川と美和川の合流点より下流側に認められ、竹田川の下流へ行くほど発達している。段丘面は竹田川の現河床から10~20m高く、そこには段丘化以降の侵食によってできた1m前後の緩やかな起伏がみられる。段丘面の多くは周囲の山地から竹田川に向かって傾斜しており、この段丘は主に支流のつくった扇状地が竹田川と支流の下刻によって段丘化したものと考えられる。

更新世段丘Ⅱ 福知山盆地以東の由良川水系からつながる長田野面²⁾に相当する。長田野面は、由良川の大規模な流路変更以前に形成されたもので、竹田川中・下流部ではきわめて緩やかに南方へ高度を減じる。十ノ貝遺跡はこのような竹田川下流部の更新世段丘Ⅱ上に位置する。



第7図 竹田川中・下流部の地形面区分図

更新世段丘Ⅱ これは竹田川中・下流部において特に断続的に分布している。この段丘にも支流のつくった扇状地を下刻してきたものがみられ、その多くは更新世段丘Ⅰを刻む小規模な谷中から発達する。段丘面は現河床より2~3m高く、更新世段丘Ⅲとは比高約1mの段丘崖で接している。更新世段丘Ⅱは由良川の流路変更後に形成されたもので、段丘面は下流に向かって高度を下げる。市島付近の竹田川東岸では、この段丘上に三ツ塚庵寺跡が立地する。

更新世段丘Ⅲ この段丘も断続的な分布を示し、更新世段丘ⅠやⅡと同様に多くの場合は竹田川の支流によって形成された扇状地が段丘化したものである。段丘面は、竹田川に向かって傾斜し、更新世段丘ⅠとⅡに刻まれた小規模な谷中に発達するものがみられる。それらは竹田川の現河床より1~2m高く、段丘崖の比高は約1mである。段丘面は竹田川の下流方向へ比較的急な傾斜で高度を低下させる。

完新世段丘 この段丘は主として竹田川の中流部以南に認められる。これは現氾濫原との比高が50~80cmの段丘崖をもつ。段丘面は下流に向かって高度を下げ、それにともなって段丘崖の比高が減じる。完新世段丘は、竹田川の本流と支流によってつくられた扇状地が段丘化したもので、支流性のものは主に美和川や前山川などの比較的大きい谷中にみられる。

段丘面には、そのほとんどで条里型土地割が認められる。また、竹田川と前山川の合流点付近には的場遺跡が、それよりおよそ7km上流には七日市遺跡の東部がこの段丘上に位置する。七日市遺跡の東部では、弥生時代後期に埋積された竹田川の旧河道が検出されている¹³⁾ことから、完新世段丘はその時期以降に段丘化したと考えられる。

現氾濫原 これは現在河川の氾濫がおよぶ最も低い地形面である。竹田川中・下流部では、本流ならびに比較的大きい支流に沿って連続的に認められる。特に現流路が北東流する竹田川の下流部では、その発達がよく、幅が最大で約800mに達する。現氾濫原のはほとんどでは、網状を呈する蛇行した旧河道によって土地割が乱されている。

3 調査区付近の地形と堆積物について

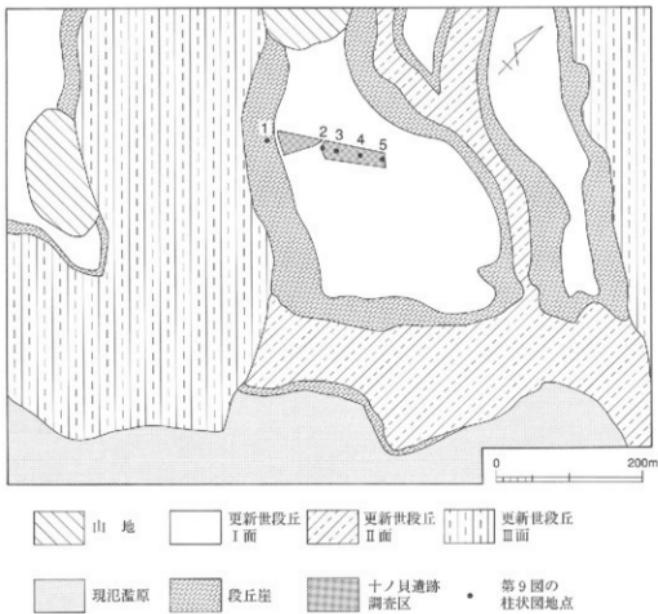
(1) 地形の分布

十ノ貝遺跡の調査区は竹田川下流部に発達する更新世段丘Ⅰの段丘面（以下、更新世段丘Ⅰ面とい）に位置する（第8図）。調査区の北西側には山地が存在し、北東側と南西側には更新世段丘Ⅰ面を刻む谷が認められる。調査区北東側の谷は幅およそ70mの小規模なもので、谷底は調査区の南東側に分布する更新世段丘Ⅱ面に連続する。この段丘面と更新世段丘Ⅰ面との間には、約10mの比高をもつ段丘崖がみられる。一方、調査区南西側の谷は比較的大きく、幅が約200mにおよぶ。この谷は北西へ約1km続き、谷奥では山地を開析している。谷中には更新世段丘Ⅲ面が広がり、更新世段丘Ⅰ面とは比高12~13mの段丘崖で境される。

調査区付近の更新世段丘Ⅰ面には、緩やかな傾斜がみられる。ひとつは北西から南東への傾斜である。これは竹田川の本流に対しては垂直方向のもので、段丘が竹田川の支流によって形成されたことを示す。他の一つは調査区中央付近から北東および南西への傾斜で、それは段丘崖の近くでやや急になる。この傾斜は更新世段丘Ⅰの段丘化後に雨水などによる面状の侵食（布状侵食）がなされたことに起因する。調査区はこのような更新世段丘Ⅰ面を横断するように延びる。

(2) 堆積物の層序と特徴

調査区の位置する更新世段丘Ⅰは下位から順に黄灰色の砂礫、赤褐色のシルト、明褐色の礫・砂混じ

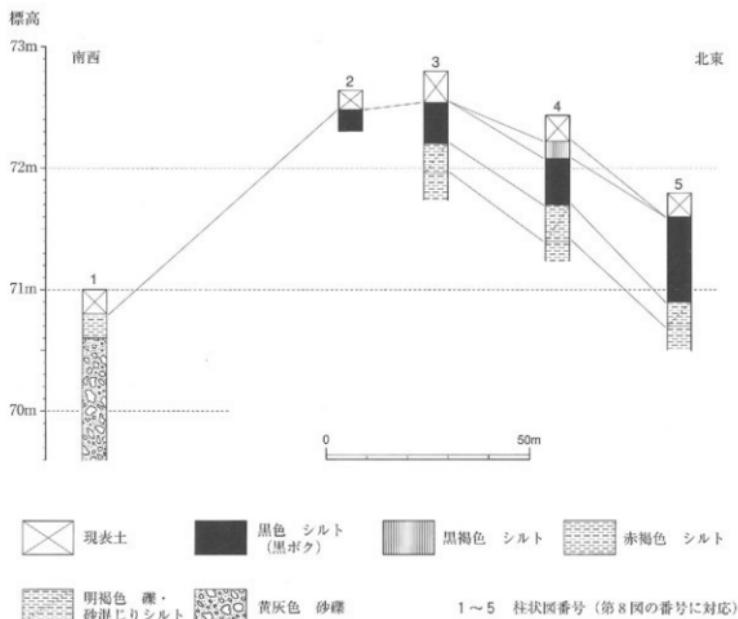


第8図 調査区付近の地形面

りシルト、黒色のシルト（黒ボク）、黒褐色のシルトおよび現表土からなる（第9図）。最下位に位置する黄灰色の砂礫は、その上部が調査区南西側の段丘崖で観察される。これは、扇状地を構成する堆積物で、ペブル～コブル大の礫を主体とする。やや風化を受けており、クサレ礫が若干含まれる。

その上位にみられる赤褐色のシルトと明褐色の礫・砂混じりシルトは、50cm以上の厚さで黄灰色の砂礫を被覆する。これらは、古い時期の洪水堆積物であり、非常によく締まっている。それらのうち明褐色の礫・砂混じりシルトは砂や径1cm以下の角・亜角礫が混入する淘汰のよくない旧表土であり、赤褐色シルトの上位に20～30cmの厚さで認められる。こうした細粒堆積物の上面は現地表と同様に北東および南西に向かって緩やかに傾斜する。これは、更新世段丘Ⅰが段丘化した後で、細粒堆積物の表層が布状侵食を受けた結果である。

黒ボクも調査区全域で認められる。厚さは30～40cmで、調査区北東部の谷に近いところでは70cmに達する。竹田川流域の更新世段丘上には、黒ボクがよくみられ、上流に位置する七日市遺跡の中央部でも、弥生時代中・後期以降の遺物を含む黒ボクが確認されている⁴⁾。十ノ貝遺跡の調査区でみられる黒ボクにも、弥生時代中期の遺物がわずかながら混入することから、それは七日市遺跡の黒ボクに対比される可能性がある。いずれにせよ黒ボクは弥生時代中期までに生成され、その生成期には調査区付近が荒地となっていたと考えられる。



第9図 調査区における堆積物

黒褐色のシルトは黒ボクの生成後にその上部がさらに土壤化した旧表土である。これには、7世紀代、13世紀後半～14世紀代、および14世紀後半～15世紀代の遺物が含まれる。このシルトは断続的に残存する。それは上位にみられる現表土の土壤化が部分的に深くまでなされたためと考えられる。現表土は暗褐色のシルトである。そこには15世紀後半～16世紀代の遺物が混入し、下面からは同時期の遺構が切り込まれている。これは15世紀後半から現在までの継続した表土である。

4 調査区付近における地形環境の変遷

以上まで述べた事柄から次のような地形環境の変遷が考察できる。

ステージ1 由良川の大規模な流路変更以前、調査区付近にはその北西側から竹田川の支流によって砂礫が供給された。それとともに扇状地がつくられた。このような扇状地の形成はこの時期に竹田川中・下流部の多くで発生した。

ステージ2 調査区付近に洪水がおよび、シルトが50cm以上の厚さで扇状地を覆った。その結果扇状地は埋没した。シルトの上部はこれ以降黒ボクの生成開始期までの長期間にわたって表土となり、そこに植物根による擾乱などのため細かい繊維や砂が混入していった。

ステージ3 占竹田川とその支流が下方侵食を行った。そのため、調査区付近の埋没扇状地は段丘化し、更新世段丘Ⅰがつくられた。調査区北東側の谷もこの頃の下刻によって形成された。調査区付近の更新世段丘Ⅰ面では、この時期以降地表が布状侵食を受け、北東および南西への緩やかな傾斜がみられるようになつた。

ステージ4 更新世段丘ⅡならびにⅢが次々と段丘化した。それらのうち更新世段丘Ⅱが段丘化した際には、調査区南西側の段丘崖が竹田川の支流によって形成された。なお、由良川の流路変更は遅くとも更新世段丘Ⅱ面の形成までに終了していた。

ステージ5 調査区の位置する更新世段丘Ⅰ面が荒地となり、そこで黒ボクが生成された。こうした景観は当時竹田川流域の比較的広い範囲でみられた可能性が高い。その後弥生時代中期には、調査区付近の黒ボク上で人間活動がなされた。

ステージ6 黒ボクの生成が終わった後その上部が土壤化され、黒褐色のシルトがつくられた。これは少なくとも7世紀から15世紀にかけてなされ、その間黒褐色のシルトは表土であり続けた。7世紀代、13世紀後半～14世紀代および14世紀後半～15世紀代には、人間がこの堆積物の上面を地表として調査区付近に居住した。

ステージ7 15世紀後半～16世紀代にも、調査区付近で人間生活がなされた。そこでは、黒ボクの生成が終わってから顕著な地形環境の変化がなく、現在まで安定した環境が続いた。

5 おわりに

十ノ貝遺跡の調査区は竹田川下流部の更新世段丘Ⅰ面に位置する。これは支流性扇状地が段丘化したものである。そこでの人間生活は更新世段丘Ⅰの形成から少なくとも数万年が経過した後に行われた。その間調査区付近の段丘上では、谷の形成、布状侵食による段丘面の形態変化、および荒地の現出にともなう黒ボクの生成がみられた。調査区付近では、それ以降地形環境が変化せず、人間は安定した環境下で生活したと考えられる。

更新世段丘Ⅰは最も高位の段丘である。そのため、調査区付近からは竹田川の下流部が眺望でき、また段丘面には洪水がおよばない。さらに調査区付近の更新世段丘Ⅰ面は排水の便がよい。これは段丘面が南東および北東・南西方向へ緩やかに傾斜しているからである。南東に向かう傾斜は更新世段丘Ⅰが竹田川の支流によって形成されたことに起因する。他方、北東ならびに南西への傾斜は段丘化以降に発生した布状侵食が原因である。調査区付近の更新世段丘Ⅰ面は、このような立地条件を備えていることからみて、人間の居住に適した空間といえよう。

参考文献

- 1) 岡田篤正・高橋龍一「山良川の大規模な流路変更」地学雑誌78-1、1969年
- 2) 前掲1)
- 3) 兵庫県教育委員会『七日市遺跡（I）－第2分冊－』1990年
- 4) 前掲3)

VI まとめ

1 古墳～奈良時代の十ノ貝遺跡

この時期の遺構は堅穴住居跡・土坑・落ち込みを検出しているが、性格が明らかな遺構は堅穴住居跡だけである。8棟の堅穴住居跡を調査している。すべて後世の削平などによって、遺構の残存率是非常に悪い。かろうじて平面で検出された程度である。時期は7世紀中葉を中心とする時期である。

これらに遡る時期の遺構も調査している。第1次本調査区のS X03がそうである。3点の土器を同化している。大型の土坑からの一括出土で弥生時代中期の遺構である。壺・鉢の口縁端部には刻み目が施され、壺体部にヘラ書き沈線が5条認められる。壺・鉢は新しい要素を持ちつつも弥生前期のものであるが、壺にはクシ書きの波状文が罐面に施されている。壺の存在から中期初頭の遺構である。それ以降、古墳時代末まで遺構は検出されていない。

8棟の堅穴住居跡は各調査区で各々4棟確認されている。切り合い関係のあるのは、SH02とSH03だけである。平面プランはすべて方形である。規模は小型の住居跡が多く、最大がSH03の5.8mである。付属施設は、壁溝がSH02と03の2棟に、焼土を伴う竈状の高まりがSH02で確認されている。焼土の広がりは、北東部にあるSH05・06、南東部にあるSH01、中央にあるSH08に分かれる。床面に土坑を伴うのが、SH05・07・08の3棟である。主柱穴が4本柱のものを4棟確認している。①堅穴住居跡の際に接して築かれているSH01と②僅かに内側に築かれているSH05・06と③中央に位置するSH03に分類される。形態的には中央から周囲に移動したと考えるのが一般的である。出土遺物から明確に変化を抽出することは出来ないが、住居跡の形態からは③から①への変化が指摘できよう。SH01のようなタイプは特徴的なもので、時期的には新しくなるものと思われる。通常の形態の③のみに壁溝が存在するのとも有機的な関係があろうかと思われる。しかし、保有する遺物は地方色の濃い土器である。外面ケズリを施した土師器杯がそれで、一見精製されているようで、技法をみると粗雑である。壺は長脚になる段々口縁と球形体部の両者がある。SH06は北東部に竈を持ついわゆる青野型の堅穴住居跡である。兵庫県下の同種の遺構は地山の掘り残しがないが、市島町内の梶原遺跡例とともに掘り残した典型的な青野型住居跡である。遺物にも球形体部の壺がなく青野型壺だけという丹波色の強い住居跡である。距離的な近さが当然あるが、竹田川沿いの関係を想起させる。

堅穴住居跡一覧

No	平面プラン	面積(m ²)	+柱穴	施設	出土遺物	時期	備考
SH01	方形	3.5×2.9	4本		土師器壺	7世紀前半	
SH02	方形	4.7×4.5		壁溝・竈	土師器壺・杯、須恵器杯・平瓶	7世紀前半	
SH03	方形	4.6×5.8	4本?	壁溝	土師器壺	7世紀前半	
SH04	方形	2.9×3.4				7世紀前半	
SH05	方形	5.0×5.2	4本?			7世紀前半	青野型
SH06	方形	4.2×4.0	4本		土師器壺・瓶、須恵器杯・高杯	7世紀前半	青野型
SH07	方形	(2.5)×(1.8)			土師器壺・杯、須恵器杯	7世紀中葉	
SH08	方形	(1.1)×4.3			須恵器杯・壺	7世紀中葉	

南北×東西（ ）は残存値

2 中世十ノ貝遺跡の位置づけ

(1) 出土した中世の遺物について

十ノ貝遺跡からは少量ではあるが、13世紀後半から16世紀代の土師器皿・鍋、瓦質擂鉢・香炉、丹波

焼壺・鉢・擂鉢・盤、瀬戸美濃系丸挽・天目挽・丸皿・鉢皿、龍泉窯系青磁碗など多様な土器・陶磁器が出土している。

これらの遺物の時期は大きく13世紀後半から14世紀代、14世紀後半から15世紀代、15世紀後半から16世紀代の3時期に区分することができる。

13世紀後半から14世紀代では土製煮炊具は、長谷川分類鉄鑄形Ⅲ類・甕形Ⅰ類などが認められる。また、鉢類には丹波焼捏鉢がある。貿易陶磁では龍泉窯系青磁碗などが見受けられる。この時期の出土遺物は比較的少ない。

14世紀後半から15世紀代には遺物量が急増し、土製煮炊具では、長谷川分類播磨型B型列Ⅰ類・鉄かぶと形Ⅰ類などが認められる。鉢類では東播系鉢D類・備前焼Ⅳ期播鉢などがあり、丹波焼は見られなくなる。

施釉陶器には瀬戸天目挽・灰釉丸挽・丸皿・鉢皿などがみられる。

貿易陶磁では龍泉窯系青磁雷文帶碗などが見受けられる。

柱穴P21を中心に出した土師器皿はすべて非ロクロ成形で作られている。一様に器高が比較的高く、全体に器壁が薄い等の特徴をもっており、京都系土師器に比較的類似している。京都系土師器が拡散し始める時期の所産と考えて大過ないものと考えられる。

15世紀後半から16世紀代になると前代に比べ、出土量は急減している。溝S D01出土の瓦質擂鉢、丹波焼壺・擂鉢、龍泉窯系青磁經蓮弁文碗などが僅かに認められる程度である。

以上の点から、遺物からみる限り、十ノ貝遺跡の時期は大きく13世紀後半から14世紀代、14世紀後半から15世紀代、15世紀後半から16世紀代の3時期に分けることができ、その盛行期は14世紀後半から15世紀に亘る時期と捉えることができる。

また、土器組成の変遷の面からは、丹波地域の北縦ながらも京都に比較的近く、瀬戸内側・日本海側を結ぶルート上の位置を占める十ノ貝遺跡の独自性を窺うことができる。

土師器皿は京都系土師器が拡散し始める時に合わせ非ロクロ成形の土師器が登場しており、京都系土師器皿に近い技法・形態によって作られている。

土製煮炊具は中世前半では畿内系の鉄鑄形Ⅲ類及び甕形Ⅰ類の使用が、中世後半では播磨型あるいは鉄かぶと形へと移行しており、これは、瀬戸内沿岸の中世遺跡のあり方とほぼ一致している。

一方、鉢類では瀬戸内沿岸の中世遺跡では東播系鉢類から備前焼擂鉢へと移行するのに対して、十ノ貝遺跡では、13世紀後半から14世紀前半に早くも丹波焼捏鉢が出現し、14世紀後半から15世紀前半には東播系鉢類が、15世紀代には僅かに備前焼擂鉢が認められるものの、16世紀代には越前焼を模倣した瓦質擂鉢が出現している。

このような鉢類の変遷は丹波焼の生産地内にあって、更に但馬・丹後と言った越前焼の分布圏に隣接する十ノ貝遺跡の位置的特徴を如実に示すもので、瀬戸内側とは異なる内陸部の生産と流通を考える上で、貴重な資料を提供するものといえよう。

(2) 中世の遺構群の変遷と性格について

中世の遺構は、掘立柱建物跡・柵列・土坑・溝より構成されている。掘立柱建物跡は47棟復元でき、更に復元に使われなかった柱穴が多数残っていることから、50棟を超える建物が調査区内に存在したことは間違いない。これらの遺構群は東西両地区にまたがっている。間に小谷が入ることから、当初より2グループに分かれていたと捉えることができる。これは、東地区のS D01の西端が鏡形にクランクし、

建物群を区切る形状である点からも肯首出来よう。

中世に伴うと考えられる遺構の時期は遺構・包含層の遺物の時期から13世紀後半から16世紀前半に渉るものと捉えることができる。また、掘立柱建物の重複状態からは建物群が数時期に分かれることがわかる。ここでは、掘立柱建物柱穴や欄列、建物に伴うと考えられる溝の遺物の時期に加え、遺構の切りあい、掘立柱建物の方位を援用し、時期区分を行っておきたい。

掘立柱建物群・欄列・溝は、軸方位から以下に分類することができる。

a群—軸方位をN35°W前後にとるもの SB02・SB07・SB16・SB18・SB19・SB22・SB23

b群—軸方位をN45°W前後にとるもの SB04・SB06・SB08・SB12・SB15・SB17・(SB19)・SB20・SB21・SB39・SB45・SB46・SA01・SA03・SA10・SD05

c群—軸方位をN10°～15°W前後にとるもの SB01・SB05・SB31・SB32・(SB47)・SA04

d群—軸方位をN20°E (N70°W) 前後にとるもの SB14・SB24・SB26・SB29・SB33・SA06・SA07
・SA08・SA09・SD04・SD12

e群—軸方位をN55°W前後にとるもの SB03・SB09・SB10・SB27・SB30・SB35・SB38・SB40
SB41・SB42・SB43・SB44・SA02・(SD01)・SD02・SD08

f群—軸方位をN63°W前後にとるもの SB11・SB13・SB28・SB34・SB37・SD01・(SA02)・SD03

6群に分けることができる。このうち、a群とb群、e群とf群は同一地点での建て替えや、重複するものが多く、建物のゆがみなどを勘案するならば、方位についても大きな差が出ないものが多い、時間差はあまりないものと推測される。以上の点を踏まえ、建物群を、I群 大きくは北北西、調査区に対して平行もしくは直角に向きをもつa・b群。II群 東西南北方向に近く調査区に対しては大きく斜行するc群。III群 西北西、調査区に対しては西へ振るd群、IV群 北西、調査区に対しては西へ振るe・f群のI～IVの4群に大別、a～fの6群に細別しておく。

次に各群の先後関係を遺構の切りあい関係から検討する。

a群は第1調査区の西半に主に集中して建物が検出されており、第2調査区にも散漫に建物が、検出されている。

a群の建物SB16はb群のSB17と切りあい先行する。また、SB18は、d群のSB14と切りあい先行する。また、b群のSD05と切りあい先行する。SB22はd群のSB26と切りあい先行する。

b群は調査区全域に比較的密に建物が広がっている。SB15はSB20及びd群のSB29と切りあい先行する。SB20はf群のSB13と切りあい先行する。SB17はa群のSB16と切りあい後出する。またSB19とも切りあい後出する。

SD05はb群の建物と平行しており建物群の東を限る溝として共に存在したと考えられる。

SB20に伴う柱穴P1879からは丹波焼押鉢の比較的大きな破片が出土しており、13世紀後半から14世紀前半の時期が与えられている。

b群の存続時期は柱穴P1879出土遺物の時期から大きく離れるものではないと考えておく。

c群の建物は東西南北方向に比較的近い向きをとる建物群である。先後関係を持つ建物は乏しい。散漫に調査区全域に散らばっている。

SB31はb群のSD05と切りあい新しい。また、d群のSB25・SB26と切りあい先行する。

d群の建物は第1調査区の西半に主に集中して建物が検出されている。東西面を中心に複数の欄列・溝によって区切られている。

d群のSB14はa群のSB18と切りあい新しく、SB24・SB26は共にa群のSB22と切りあい新しい。SB29はb群のSB15と切りあい新しい。また、SB25はc群のSB31と切りあい新しいことがわかる。

また、SD12はe・f群に属するSD01（14世紀から16世紀代の土器をもつ）と同時期もしくは先行するSX07に切られている。SX07からは15世紀代の備前焼鉢片が出土している。

SA07・SA08はSB14、SA06はSB26、SA05はSB25もしくはSB26に伴うものと考えられる。d群に属する構S A09の柱穴P1469からは14世紀代の須恵器捏鉢片が出土している。また、柱穴P1471からは14世紀から15世紀代と考えられる土器片が出土している。またSB24に属する柱穴からも14世紀もしくはそれ以前の土器片が出土している。

d群の時期は各柱穴の出土物から14世紀から15世紀代にかけてと考えておく。

e群は調査区全城に建物が広がっており、溝・構によって区切られている。重複する建物は多いが、切りあいが判明した建物跡はない。

SB09の柱穴には多量の土器皿が埋納されている。丹波地域の土器皿の編年は未だ明確ではないが、14世紀から15世紀代の時期が考えられる。更にいくつかの個体の法量が浅く、外方へ聞く形態のものを含むことから15世紀代に力点をおいて考えるべきものと考えられる。

S B36からは15世紀代の可能性のある土器小皿片が出土している。また、SB35の柱穴は14世紀代の瓦質鍋片が出土するSX07を切り新しい。

建物群の西を限る溝としてSD01・SD02が存在する。両溝ともにe・f群の建物とは走行を同じくしており、同時に存在したと推測される。また、SD02はSB35に沿ってクランクしており、同時に存在したと推測される。SD02はSD01と重複し先行していることから、e群がf群に先行すると考えておく。

SD01からは15世紀前半から16世紀代の土器が出土しており、特に16世紀代前半の瓦質鉢片が多く出土している。

f群は第1調査区の西半に主に建物が検出されており、第2調査区にも建物・構が希薄であるが検出されている。SB13はb群のSB15・SB20と切りあい新しい。

SB34に伴う柱穴からは14世紀から15世紀にかけての土器片が出土している。

e・f群の存続時期は、e群SB09の土器皿群、SD01の須恵器捏鉢・青磁碗片等15世紀代の遺物の存在から15世紀を中心に、瓦質鉢片の存在から16世紀前半までと考えておきたい。

以上の点から、建物群の変遷は遺構の切りあいから、a群→b群・a群→d群・b群→c群・b群→d群・b群→f群・c群→d群・d群→e・f群の先後関係が導きだせる。

以上の点からI a群→b群⇒II c群⇒III d群⇒IV e群→f群の順に遺跡が変遷して行くと考えられる。

さて、十ノ貝遺跡における遺構にともなう遺物の出土は乏しく、各建物群の存続時期を確定することは困難であるが、あえて推し量るならば、中世の遺構群が形成され始めるI群の時期を13世紀後半から14世紀、II群・III群の時期を14世紀から15世紀にかけて、IV e群を15世紀、IV f群を中世の遺構が終息する16世紀前半と捉えることができよう。

十ノ貝遺跡の中世遺跡はどの様な性格の遺跡と考えるべきであろうか。遺跡の時期からは、13世紀に開村し、16世紀において終息した集落、ほぼ中世全般に涉って存続した中世集落遺跡と捉えることができる。その性格については、多くを語ることは難しいが、特徴として、以下の4点があげられる。

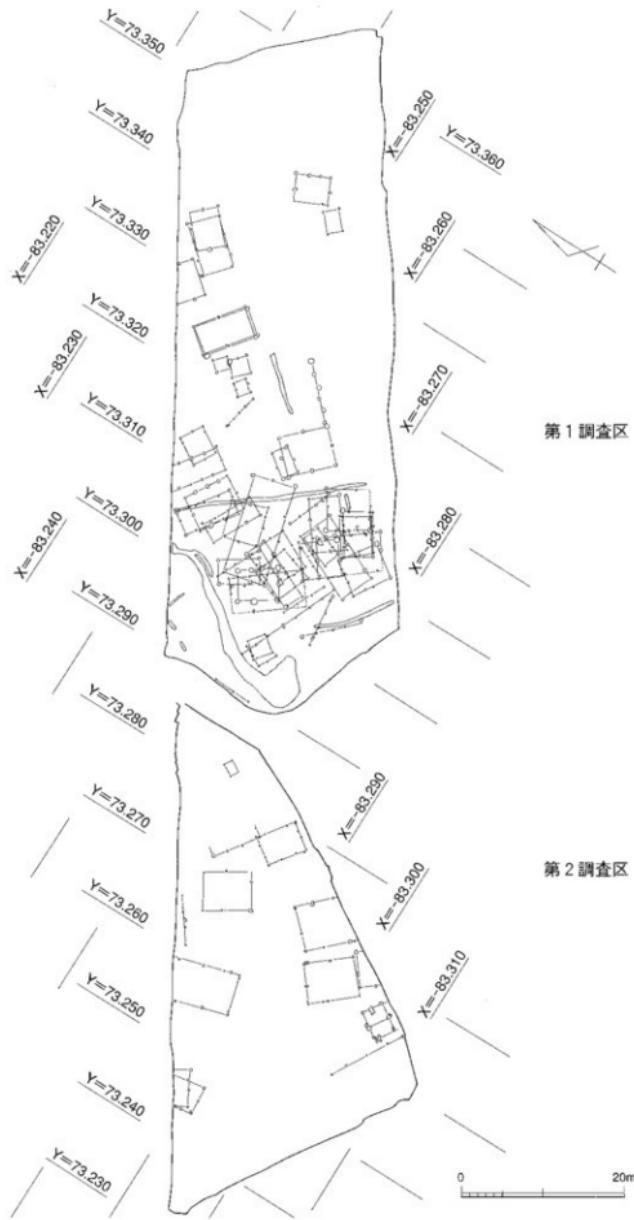
①最も古いI群の建物は基本的には2間×3間の規模で構成されており、古代の一般集落の系譜上にあると捉えられること。

- ②全時期を通じて、倉庫と考えられるものを除き、縦柱建物がほとんどないこと。
- ③全時期を通じて基本的には床面積が50m²以下の小規模な建物から構成されていること。
- ④全時期を通じて在地の土器の割合が高く、輸入陶器の割合がごく少ないとこと。

この4点から推して、有力農民層ではなく、きわめて一般的な農民によって構成された集落と考えることができよう。

建物跡・柵跡規模一覧表

遺構名	建物形式	規 横行×縦行(周)		床面積(m ²)	輪方位	グループ
		横行	縦行			
SB01	無柱建物	2以上×2	4.1×3.6	14.8	N10°W	H c群
SB02	側柱建物	2×1以上	4.6×2.0	9.2	N60°E	I a群
SB03	側柱建物	2×1以上	3.7×3.4	12.6	N34°E	H' e群
SB04	側柱建物	2×2以上	6.5×5.6	36.4	N45°W	I b群
SB05	側柱建物	3×1以上	8.3×5.0	41.5	N19°W	H c群
SB06	側柱建物	2×1以上	4.9×2.6	12.7	N47°E	I b群
SB07	側柱建物	2×2	5.8×4.8	27.8	N31°W	I a群
SB08	側柱建物	2×2	6.3×4.9	30.9	N42°W	I b群
SB09	不明	全長3	6.2		N55°W	N e群
SB10	側柱建物	3×3	5.1×3.8	19.4	N53°W	N' c群
SB11	側柱建物	1×1以上	1.6×1.1	1.8	N27°E	N' f群
SB12	側柱建物	2×2	6.0×4.8	28.8	N45°W	I b群
SB13	側柱建物	2×3	5.2×4.6	23.9	N60°W	H' f群
SB14	側柱建物	5以上×2以上	9.3×4.5	41.9	N24°E	H d群
SB15	側柱建物	6×2	9.3×4.6	42.8	N38°W	I b群
SB16	側柱建物	3以上×3	5.6×3.6	20.2	N57°E	I a群
SB17	側柱建物	2×2	4.7~5.2×4.0	20.8	N58°E	I b群
SB18	側柱建物	5×3	5.4×5.1	27.5	N33°W	I a群
SB19	側柱建物	3×2	6.7×3.8~4.2	28.1	N54°E	I a~I b群
SB20	側柱建物	2×2	4.7×4.6	21.6	N38°W	I b群
SB21	側柱建物	4×2	9.2×4.5	41.4	N39°W	I b群
SB22	側柱建物	3×2	5.0×3.8	19	N34°W	I a群
SB23	側柱建物	3×1	5.0×3.8	19	N31°W	I a群
SB24	側柱建物	3×2	5.2×3.6	18.7	N28°E	H d群
SB25	側柱建物	5×1	8.3×2.5	20.8	N23°E	(H d群)
SB26	側柱建物	3×3	4.6×4.5	20.7	N20°E	H d群
SB27	側柱建物	2×1	2.4×2.4	5.8	N40°E	H' e群
SB28	側柱建物	2×2	2.8×2.6	7.3	N28°E	N' f群
SB29	側柱建物	3×1	4.2×2.1	8.8	N19°E	H d群
SB30	側柱建物	2×1	3.4×2.1	7.1	N36°E	N e群
SB31	側柱建物	6×2	12.5×5.3	66.3	N75°E	H c群
SB32	側柱建物	3×2	4.8×4.5	21.6	N74°E	H c群
SB33	側柱建物	4×2	6.7×2.6	17.4	N63°W	H d群
SB34	側柱建物	4×2	6.0×4.5	27	N60°W	H' f群
SB35	側柱建物	5×2	7.1×3.0	21.3	N55°W	N e群
SB36	側柱建物	4×2	6.4×2.9	18.6	N55°W	N e群
SB37	側柱建物	3×2	3.6×3.1	11.2	N32°E	N f群
SB38	側柱建物	2×1	1.7×1.6	2.7	N39°E	N e群
SB39	側柱建物	2×1	2.3×2.2	5.1	N46°W	I b群
SB40	側柱建物	1×1	2.2×1.5	3.3	N49°W	N e群
SB41	側柱建物	2×1	7.1×3.7	26.3	N52°W	H' e群
SB42	側柱建物	2×1	6.6×3.7	24.4	N54°W	N e群
SB43	側柱建物	2以上×2	3.7×4.6	17	N38°E	H' e群
SB44	側柱建物	3×1	6.5×3.9	25.4	N40°E	N e群
SB45	側柱建物	2×2	4.8×3.65	17.5	N45°E	I b群
SB46	側柱建物	1×1	2.8×2.0	5.6	N47°E	I b群
SB47	側柱建物	3×2	4.3×3.4	14.6	N25°W	(H c群)
SA01	柵 列	全長4	全長 6.4		N54°E	I b群
SA02	柵 列	全長4	全長 9.3		N62°W	H' e群
SA03	柵 列	全長4	全長 7.5		N46°W	I b群
SA04	柵 列	全長5	全長 6.7		N82°E	H c群
SA05	柵 列	全長7	全長14.0		N68°W	H d群
SA06	柵 列	全長3	全長 6.0		N65°W	H d群
SA07	柵 列	全長3	全長 4.2		N24°E	H d群
SA08	柵 列	全長5	全長 6.2		N70°W	H d群
SA09	柵 列	全長5	全長 6.2		N63°W	H d群
SA10	柵 列	全長5	全長 7.5		N45°E	I b群
SA11	柵 列	全長5	全長 4.7		N79°W	
SA12	柵 列	全長2	全長 4.9		N 3°E	



第10図 中世の遺構

VII おわりに

平成4年度の分布調査からはじまって、2回の確認調査・本発掘調査を経て、2年度にまたがった整理調査を行って、十ノ貝遺跡の調査は2005年3月に終了した。この間、多くの方々の協力・支援によつて遂行することができた。関係各位に感謝するものである。

これから、十ノ貝遺跡の調査成果から活用されることを願うものである。十分な報告を行えなかつたかもしれないが、多くの事実を与えていただき、それらが反映されれば幸いである。市島町は昨年11月に氷上郡の6町が合併して丹波市として新たなスタートを切ったが、それと同じように新たな活用がなされればと思っている。

十ノ貝遺跡からは縄文時代から近世に至る遺物が出土している。遺構は古墳時代末から奈良時代と鎌倉・室町時代の2時期に大別される。縄文～弥生時代には狩猟の場として使用されていた可能性が高い。落ち込みから弥生時代中期の土器が出土しているが、少数で定住したとするには資料として弱いと思われる。

古墳時代末に小集落を営むようになるが、丹波一帯での一般的な規模の集落ではなかったかと想像される。4～6棟くらいの規模を考えている。堅穴住居跡のタイプや出土土器の特徴から氷上郡のなかでは、京都丹波（船井郡など）との強い関係が想定される。青野型住居跡は丹波全域で確認されるようになつたとはいっても、市島町では量的に・比率的に多いことが指摘できる。北側との親縁性が考えられる。

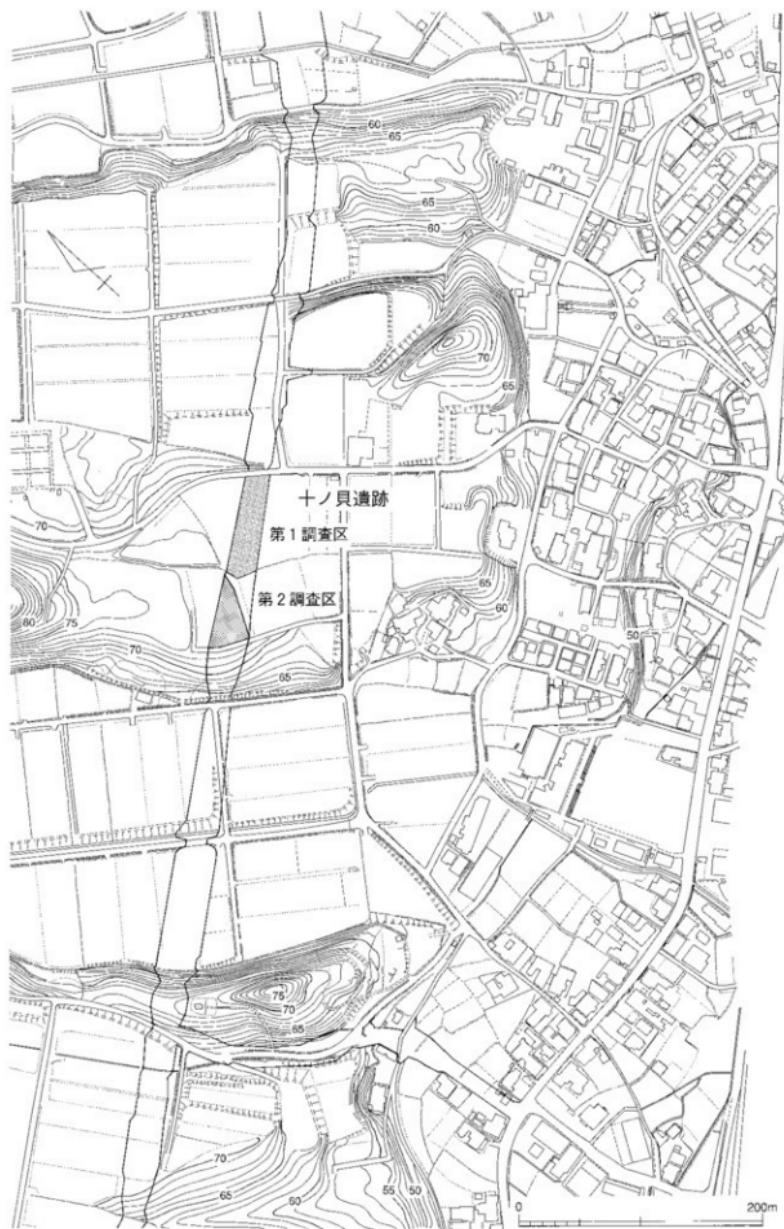
中世になると47棟以上の掘立柱建物跡が検出されている。集落の継続年代にもよるが、調査例としては多くの掘立柱建物跡を確認した遺跡といえる。切り合い関係もあり、主軸方位もまちまちであるが、量的に多いことは歴然としている。特殊な遺物が出土していないことからも、一般的な集落といえよう。福知山・綾部方面や播磨・揖津方面への道を望む丘陵上に立地した通有の集落であろうか。落合重信氏が『兵庫県小字辞典』で記されている当遺跡（大字）の読み方を「とのがい」とするのは妥当な意見のような気がする。その読みが遺跡の性格を我々に伝えてくれているのではないかと思われる。

分布調査が実施されたのは、阪神淡路大震災の後であった。当時、阪神間の交通は遮断され、加古川線を通って大阪へ行く迂回路也非常時には必要と喧伝されたものである。国道175号線も改良・整備が続けられ、年々便利になっている。報告書刊行後には本遺跡にも竹田バイパスが開通し、さらに快適になつていていることであろう。担当者としてその快適さを甘受するには、遺跡の活用を図らなければならぬと思う。さらなる活用ができるよう努力したいと思うとともに、多くの方々に本報告が利用されることを願うものである。

写 真 図 版



図版1



十ノ貝遺跡の位置



空中写真（国土地理院撮影）





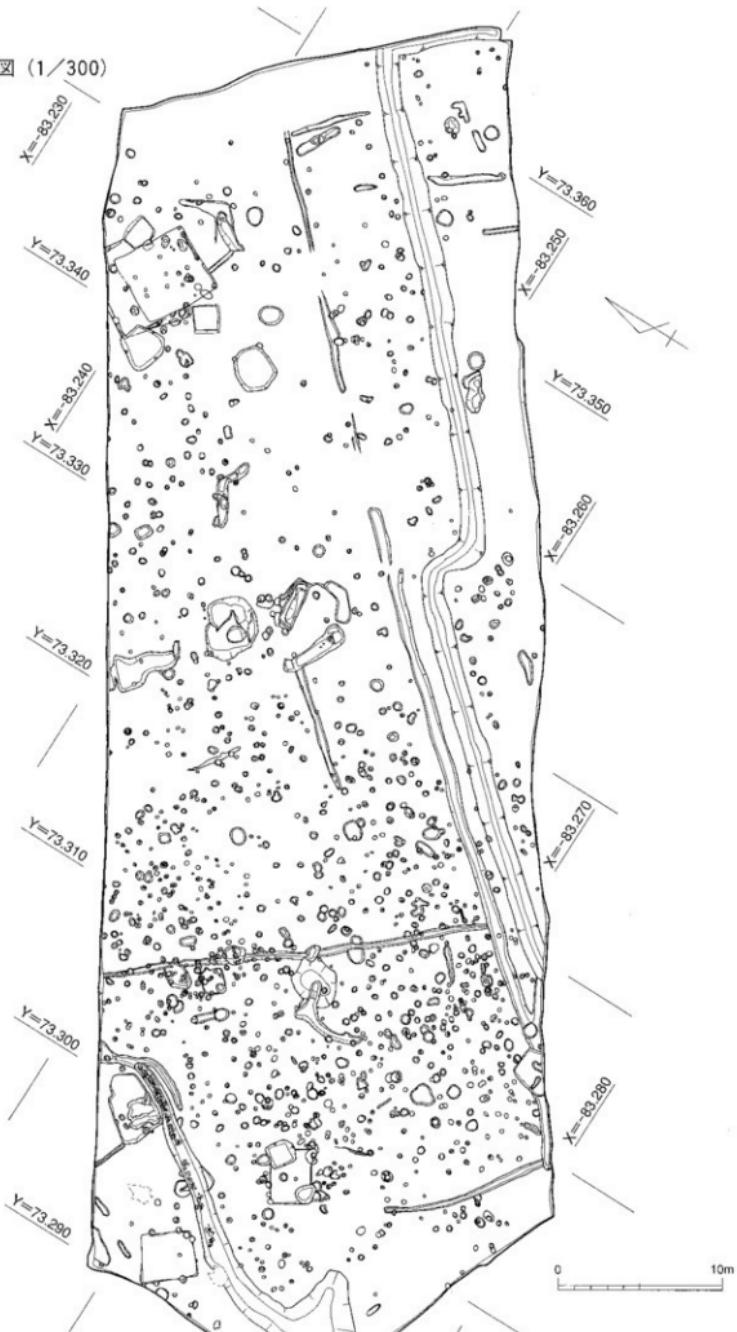
空中写真（東から）



十ノ貝遺跡遠景（石像寺磐座から）

図版5

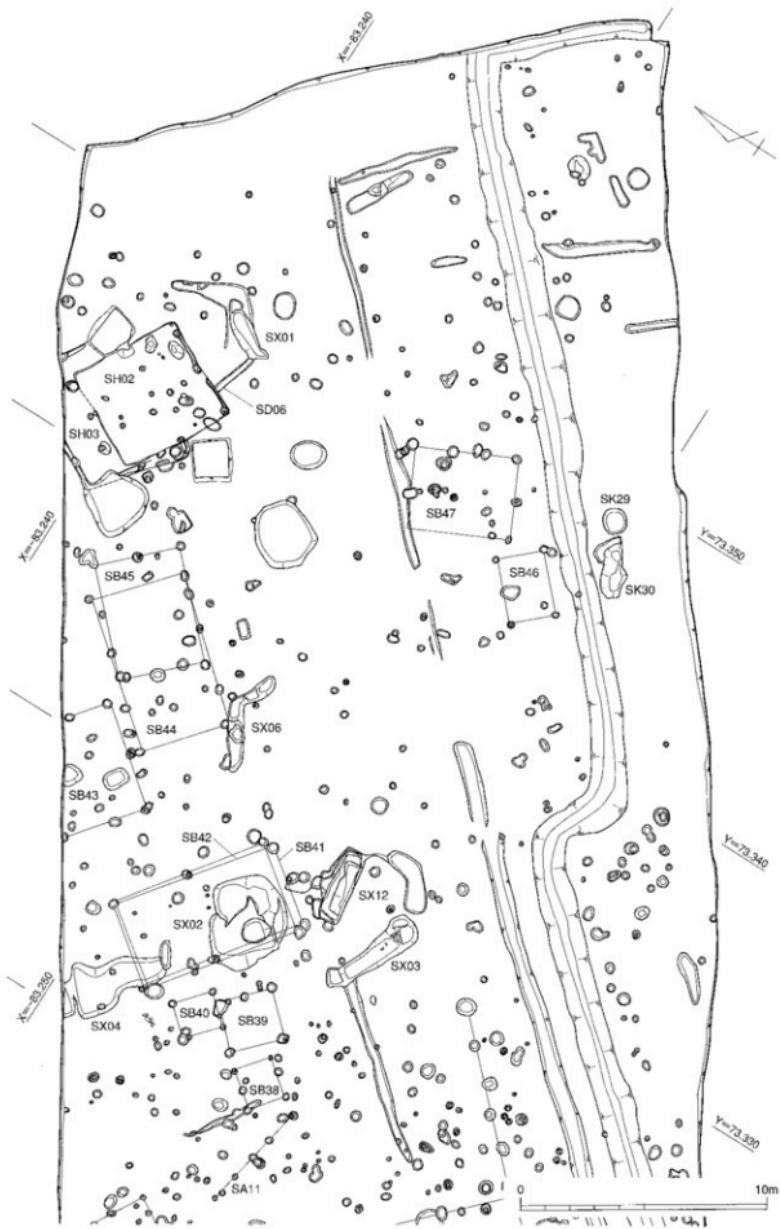
第1調査区平面図 (1/300)



第1調査区平面図 (1/300)



第1調査区空中写真



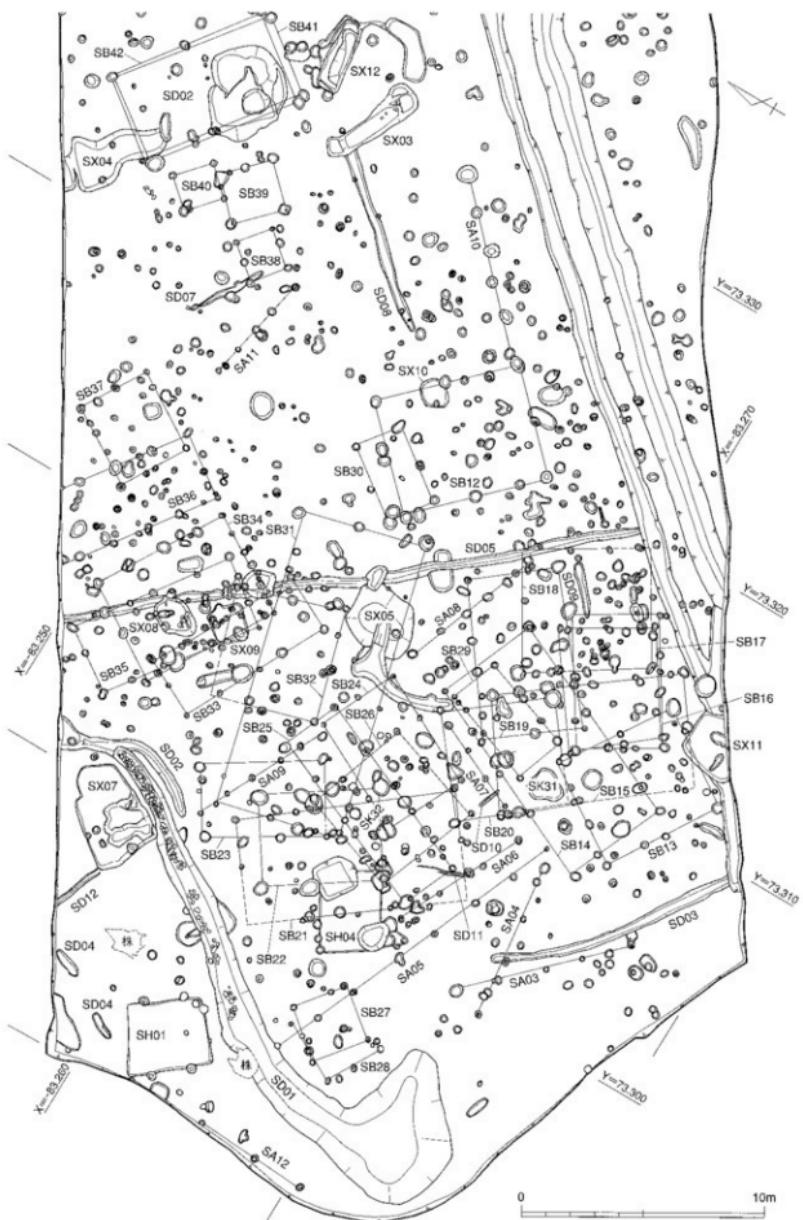
第1調査区遺構平面詳細図 I (1/200)



第1調査区全景（南西から）



第1調査区南西部（南東から）



第1調査区造構平面詳細図 II (1/200)



第1調査区全景
(南西から)

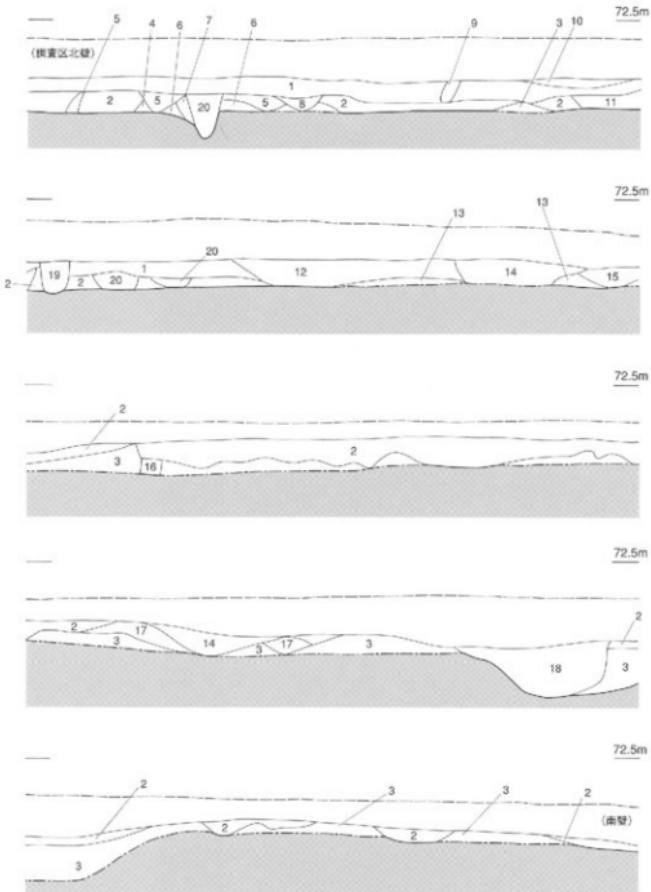


第1調査区全景
(西から)



第1調査区東側柱穴群
(西から)

図版11



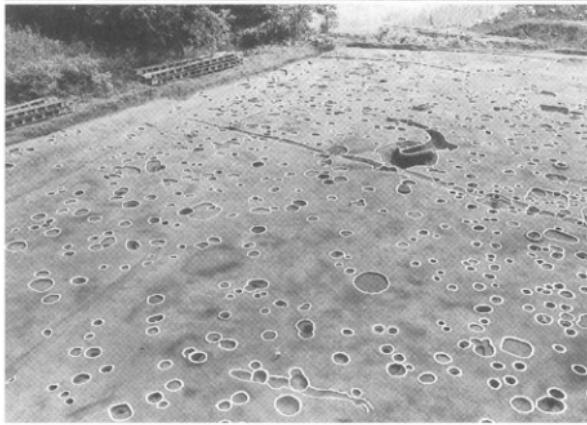
1. 黒褐色 (7SYR3/1) シルト質板細砂 $\phi 0.5\sim 3\text{cm}$ の塊少含む
上層含む 灰褐色土ブロック含む
2. 黒色 (7SYR2/1) シルト質板細砂 $\phi 0.2\sim 6\text{cm}$ の塊少含む
3. 灰褐色 (7SYR6/1) 硫酸根・硫酸根
4. 黑褐色 (7SYR3/1) シルト質板細砂 3層ブロック含む
5. 黑褐色 (7SYR3/1) シルト質板細砂 3層ブロック含む 4層より明るい
6. 黑褐色 (7SYR3/2) シルト質板細砂 1層より明るい
7. 黑褐色 (7SYR2/2) シルト質板細砂 $\phi 0.1\sim 0.2\text{cm}$ の塊含む
3層ブロック含む
8. 黑褐色 (7SYR) シルト
9. 1層に7SYR4/2層褐色土ブロックを含む
10. 黑褐色 (5YR3/1) シルト質板細砂
11. 黒色 (7SYR2/1) シルト $\phi 1\text{cm}$ 塊含む
12. 黑褐色 (7SYR2/1) シルト質板細砂 (複乱土)
13. 2層 + 3層
14. 黑褐色 (7SYR2/2) 板細砂・中砂
15. 黑褐色 (5YR2/1) シルト質板細砂・板細砂
16. 黑褐色 (5YR2/1) シルト質板細砂 $\phi 0.1\sim 0.2\text{cm}$ の塊少含む
17. 黑褐色 (7SYR2/1) シルト質板細砂 7SYR2/2堆積土+ブロック含む
18. 黑褐色 (7SYR2/2) シルト質板細砂・中砂 (田川水路堆土)
19. 黑色 (7SYR2/1) 硫酸根・硫酸根 $\phi 0.1\sim 1\text{cm}$ の塊含む (柱穴堆土)
20. 黑褐色 (10YR3/2) 粗砂混じり板細砂 $\phi 0.1\sim 1\text{cm}$ の塊含む (柱穴堆土)



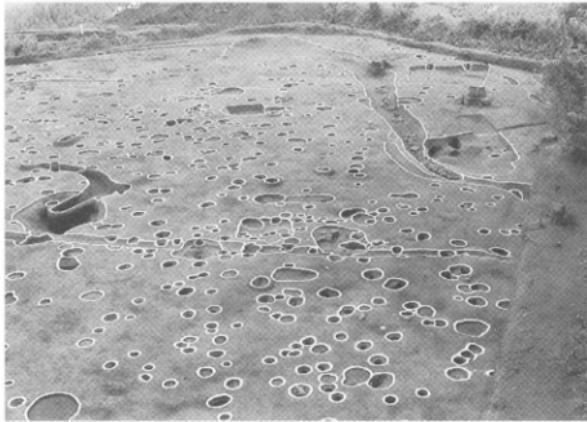
第1調査区土層断面図



第1調査区中央から西半部
(東から)

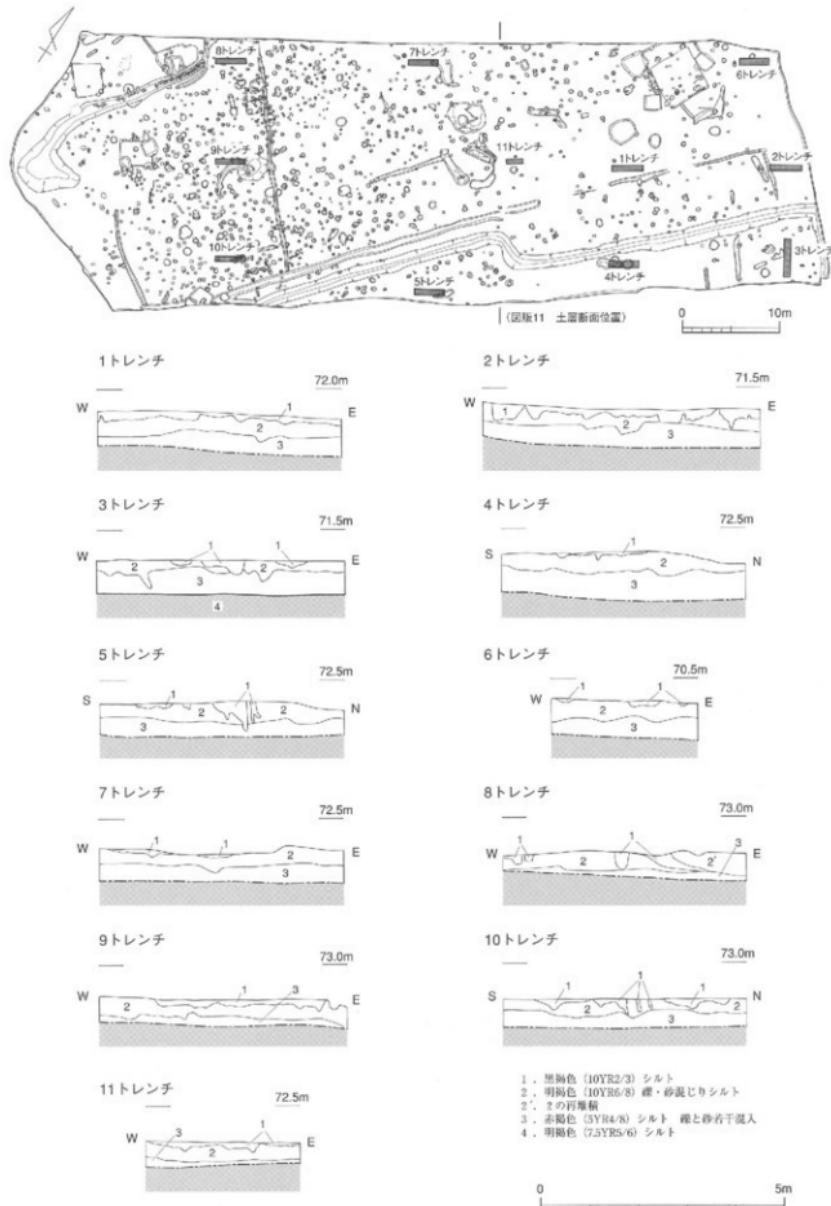


第1調査区中央から西南部分
(東から)



第1調査区西端部
(東から)

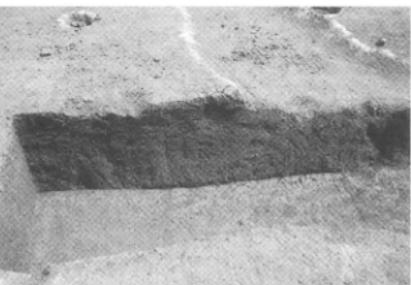
図版13



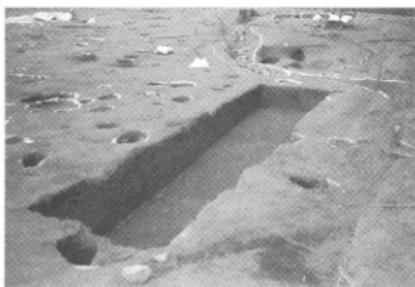
第1調査区下層確認トレンチ土層断面図



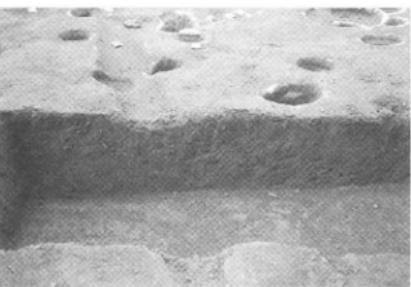
下層トレンチ7（北西から）



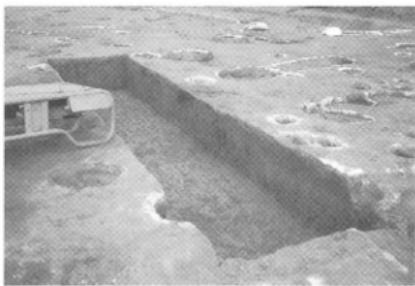
下層トレンチ7（東断面）



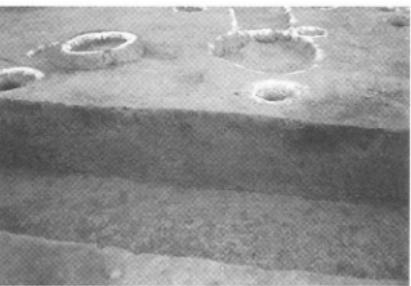
下層トレンチ8（北から）



下層トレンチ8（東断面）



下層トレンチ9（北東から）



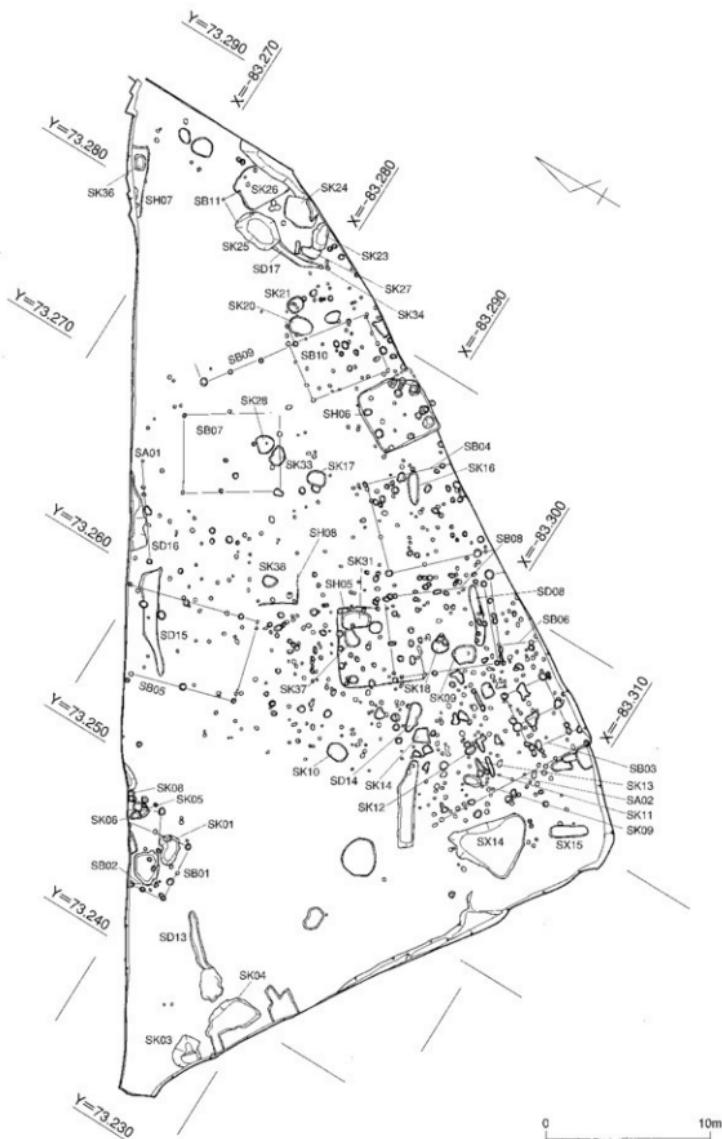
下層トレンチ9（南断面）



下層トレンチ10（北西から）



下層トレンチ10（東断面）



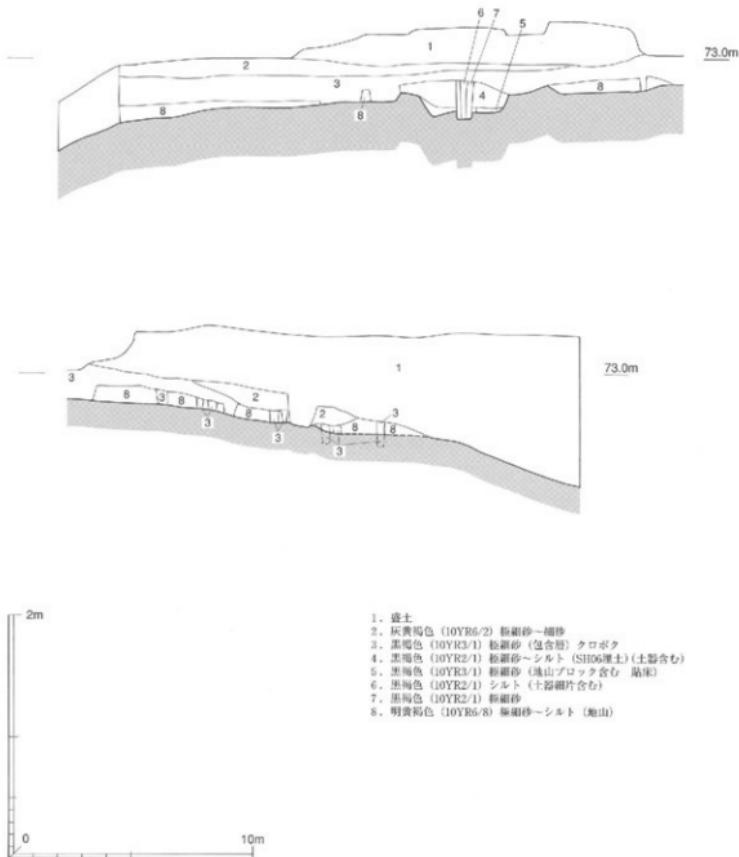
第2調査区平面図 (1/300)



第2調査区全景（北東から）



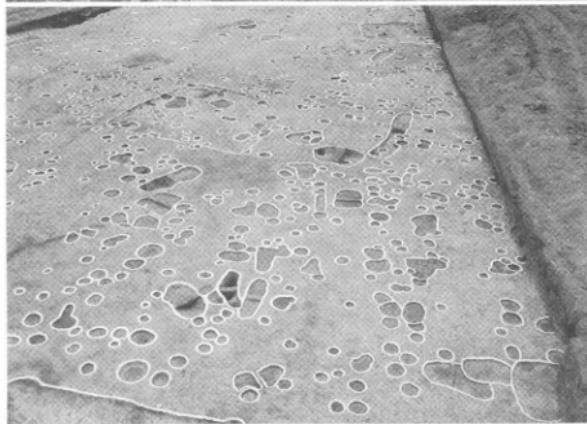
第2調査区全景（南西から）



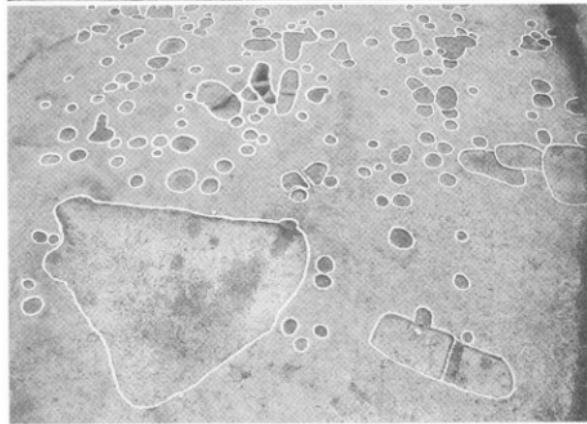
第2調査区土層断面図



第2調査区全景
(東から)

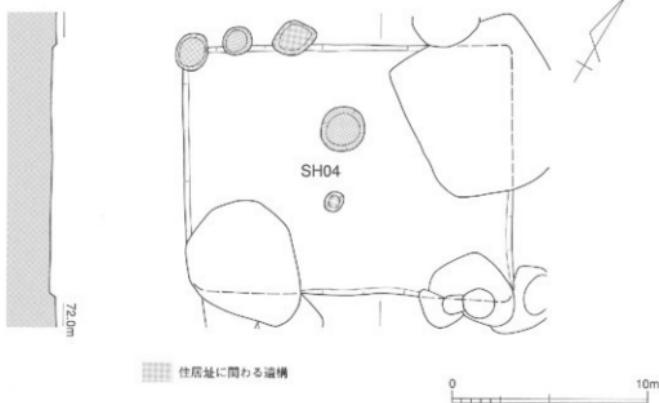
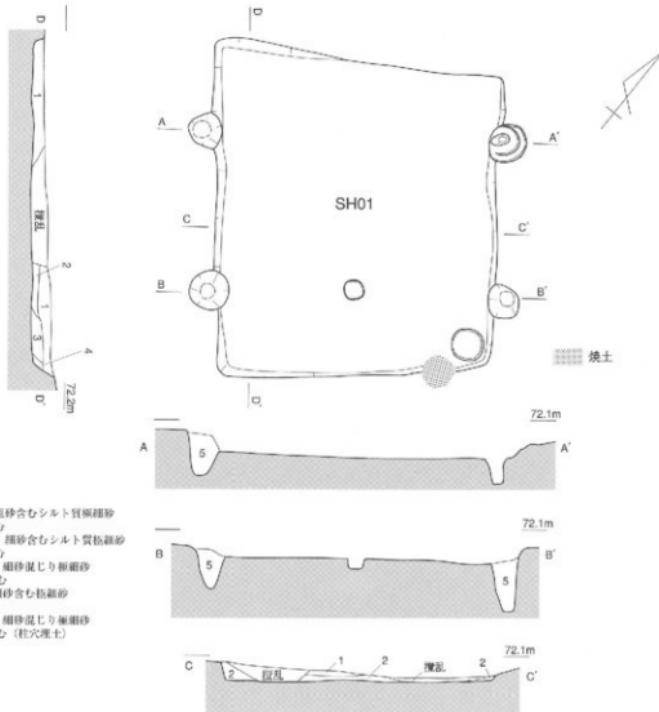


第2調査区全景
(西から)

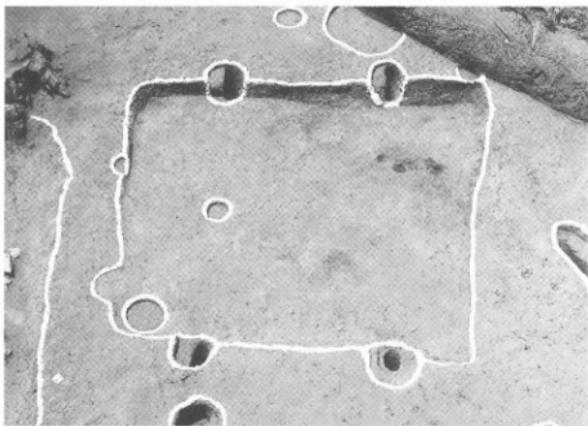


第2調査区南側全景
(東から)

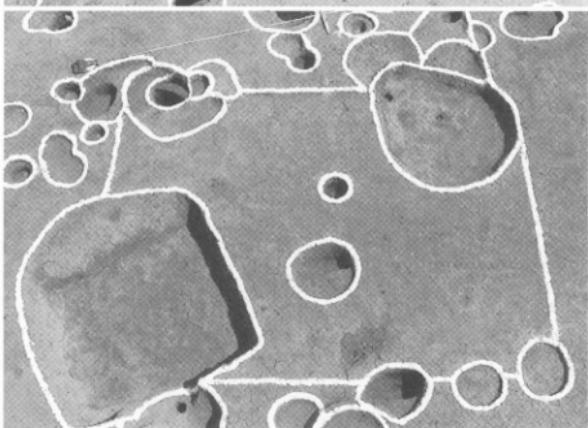
図版19



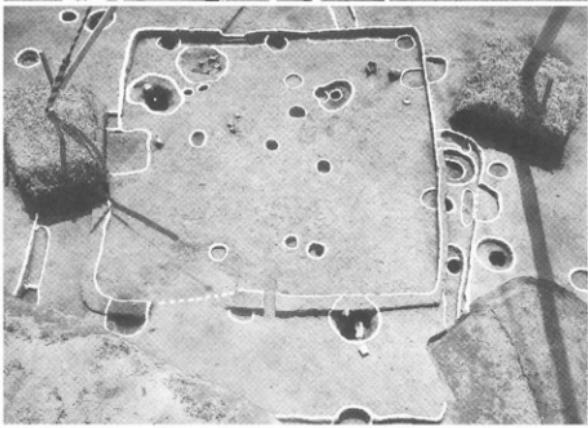
SH01-04実測図 (1/50)



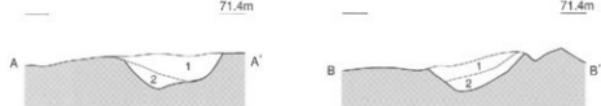
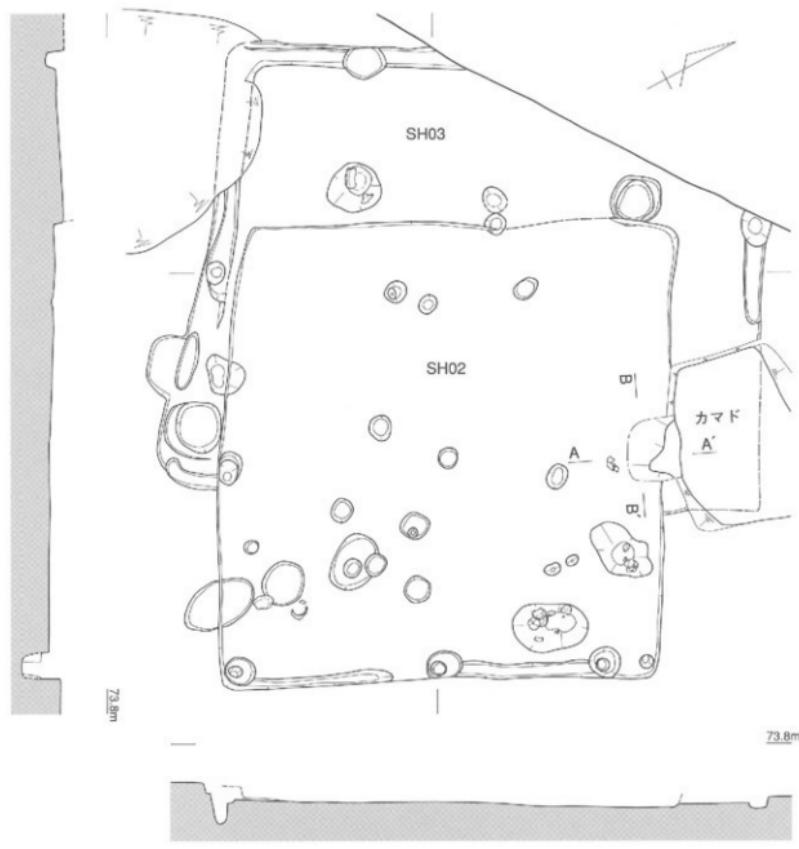
SH01 (北東から)



SH04 (北から)



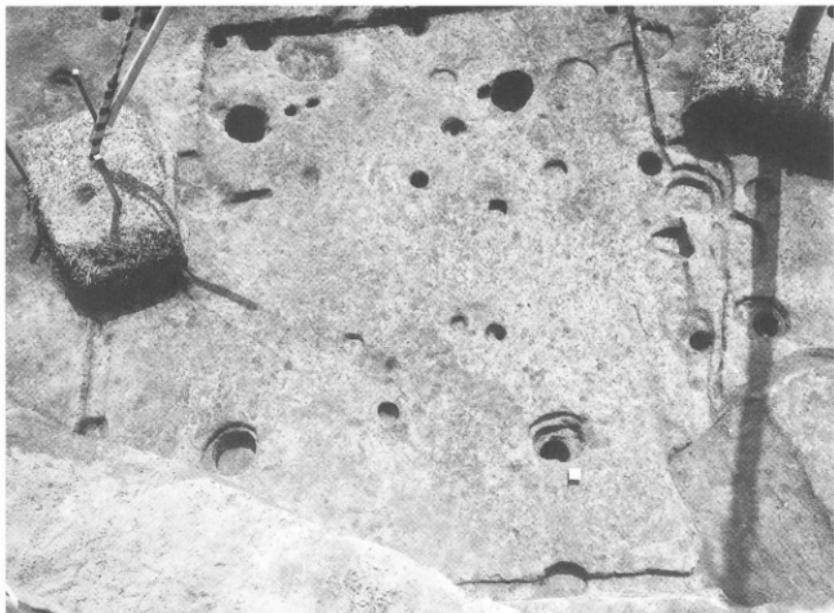
SH02-03 (西から)



1. 明赤褐色 (25YR5/8) 極上 (よく焼けている)
2. 暗赤褐色 (5YE3/6) 細砂面じり粗面 (焼土)



SH02-03実測図 (1/50)



SH02-03（西から）



SH02-03（南西から）



SH02内土器出土状態（南から）

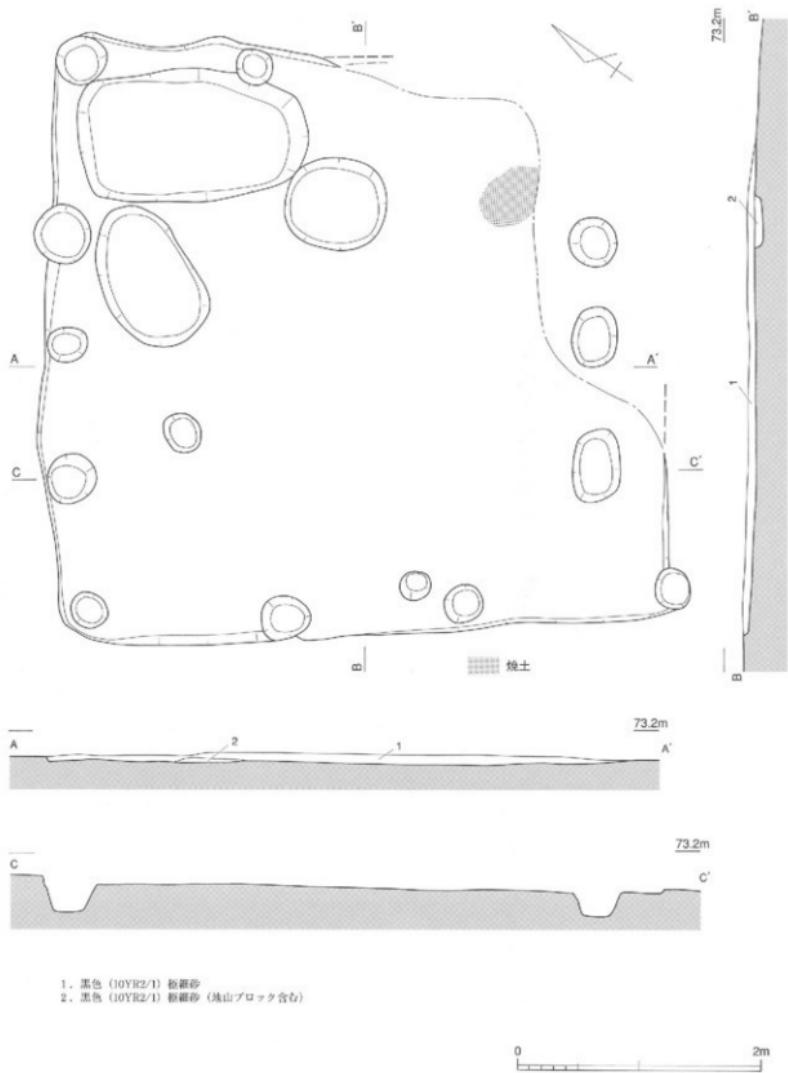


SH02内土器出土状態（東から）



SH02内土器出土状態（西から）

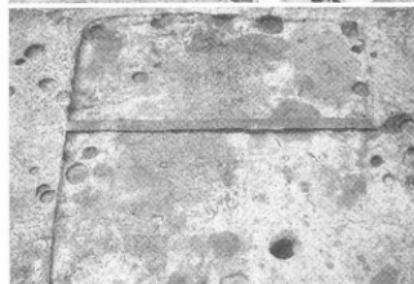
図版23



SH05実測図

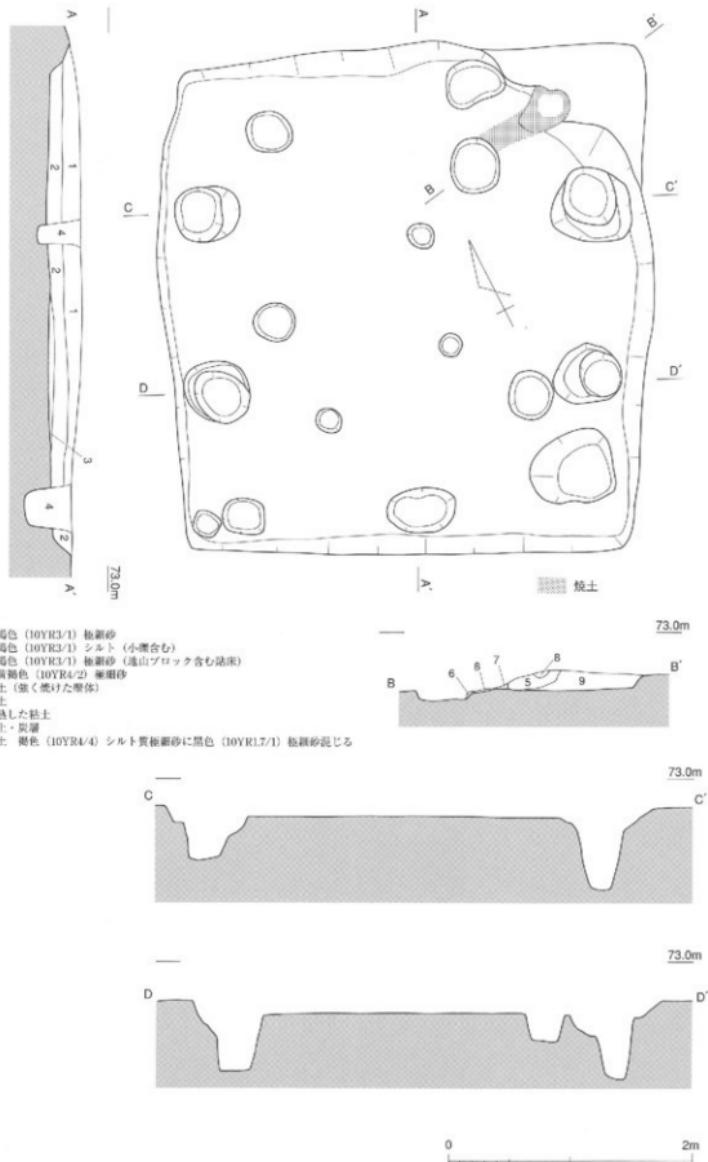


SH05全景（南東から）



SH05堆積状況

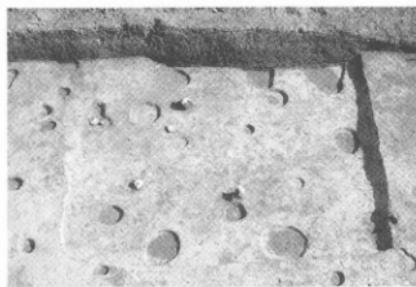
図版25



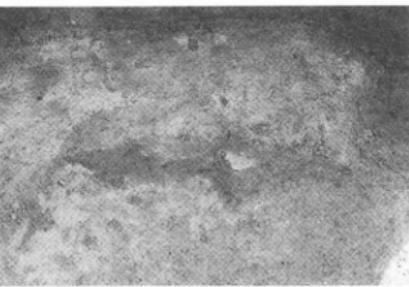
SH06実測図



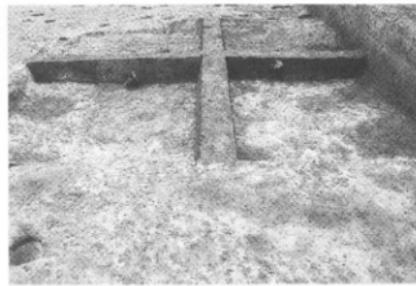
SH06全景（西から）



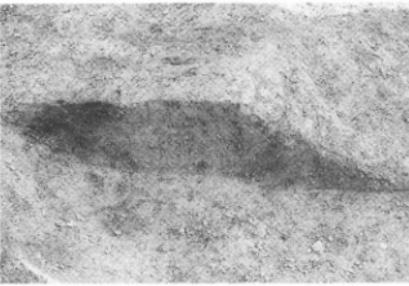
SH06堆積状況



竪断面（西から）

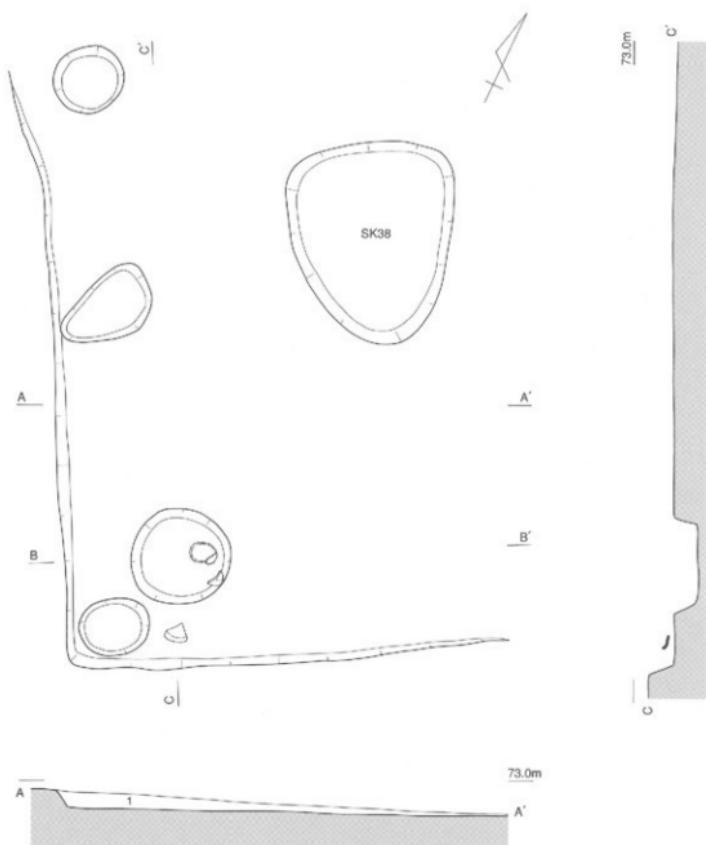


SH06堆積状況

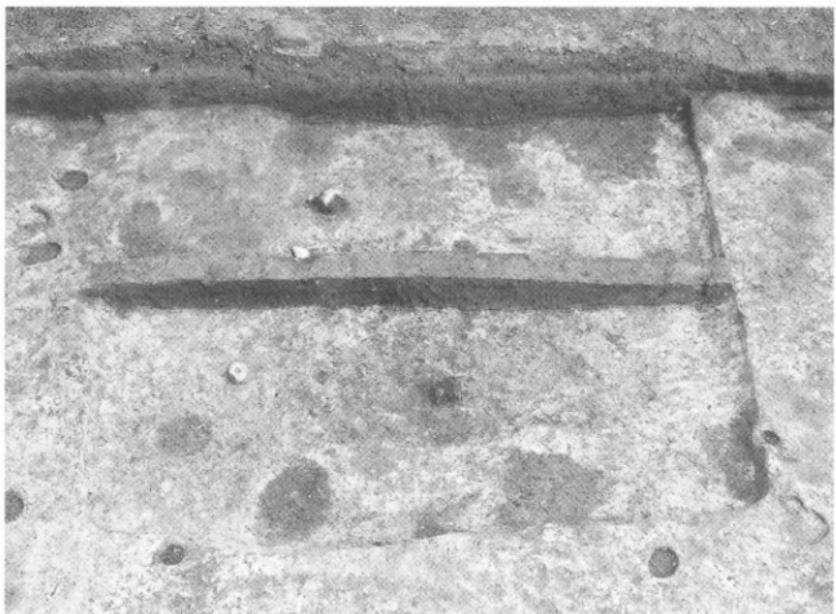


竪（北から）

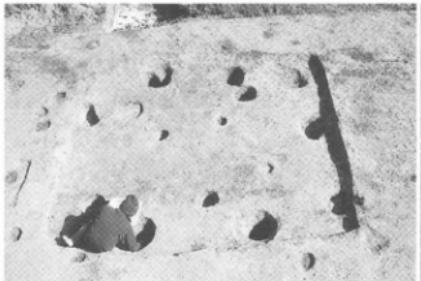
図版27



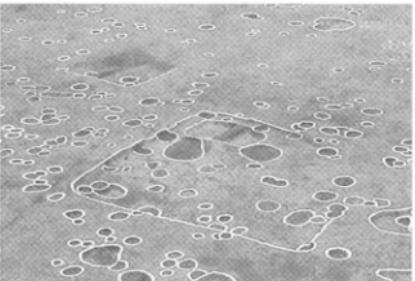
SH08実測図



SH06全景（西から）



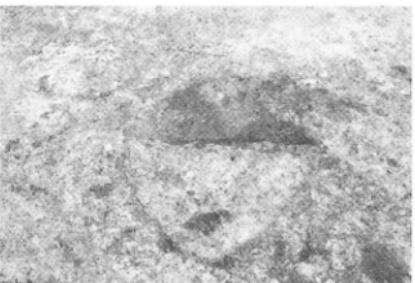
SH06調査風景



SH05・08（南東から）

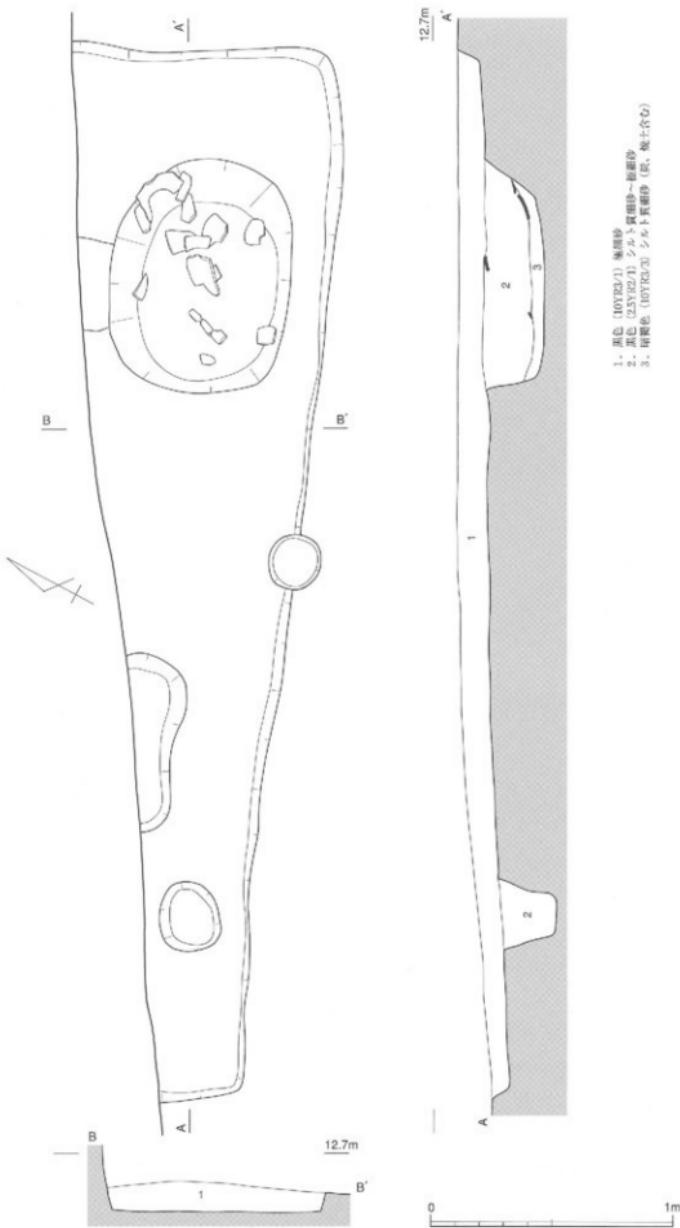


SH06調査風景

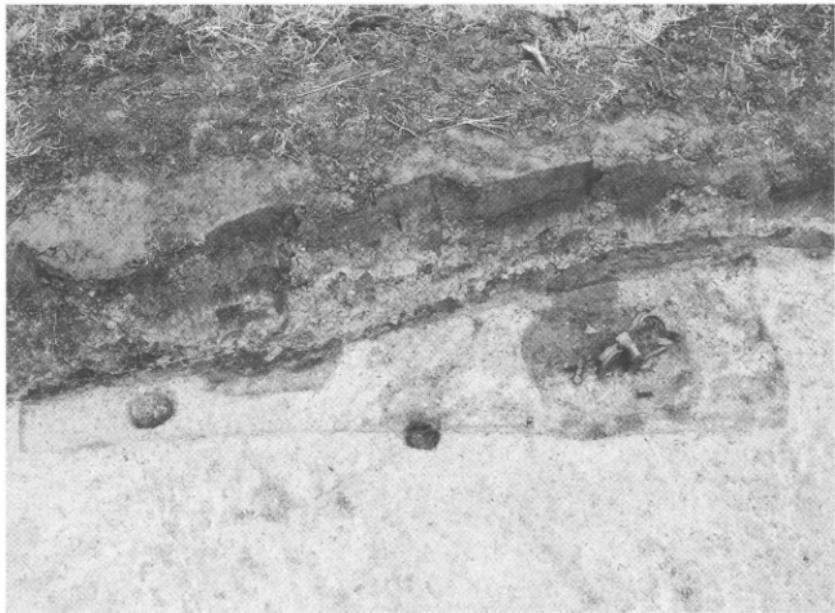


SH08土坑断面

図版29



SH07実測図



SH07全景（南東から）



SH07堆積状況

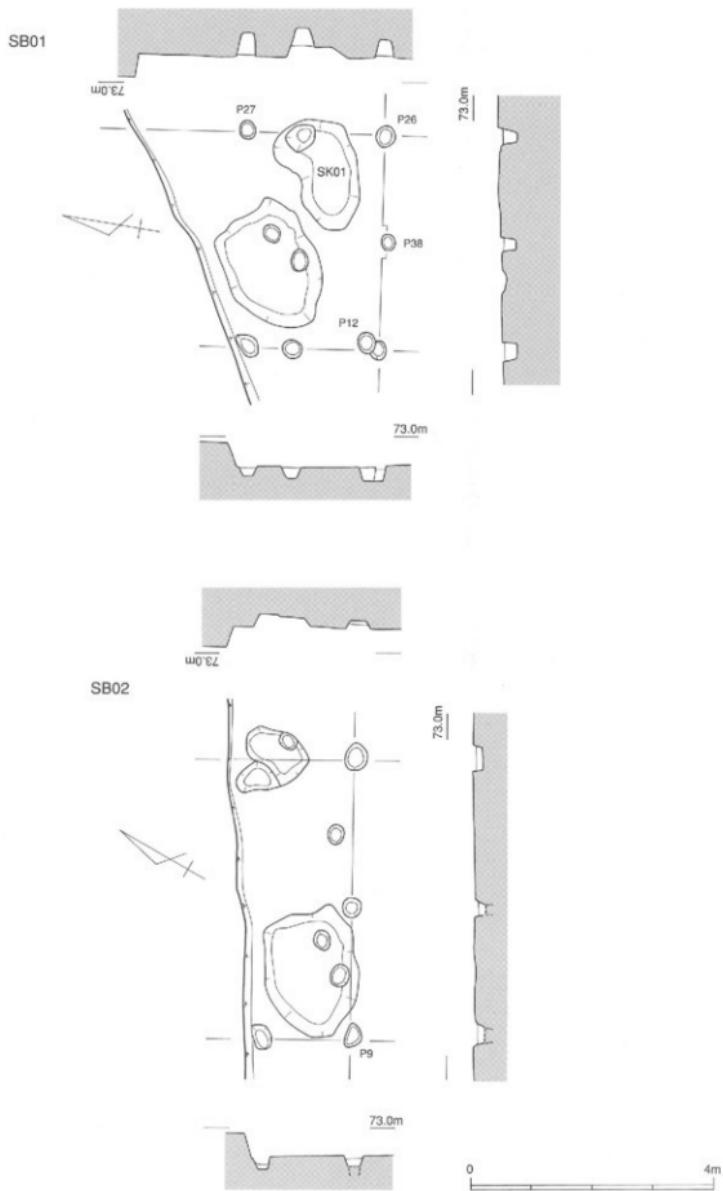


SH07土坑土器出土状況（南東から）



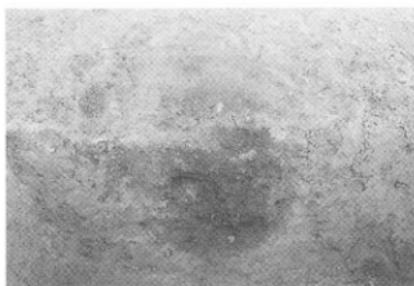
SH07土坑堆積状況

図版31

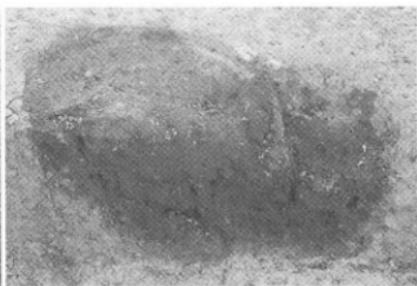




SB01・02 (南から)



SB01 P28断ち割り



SB02 P3断ち割り

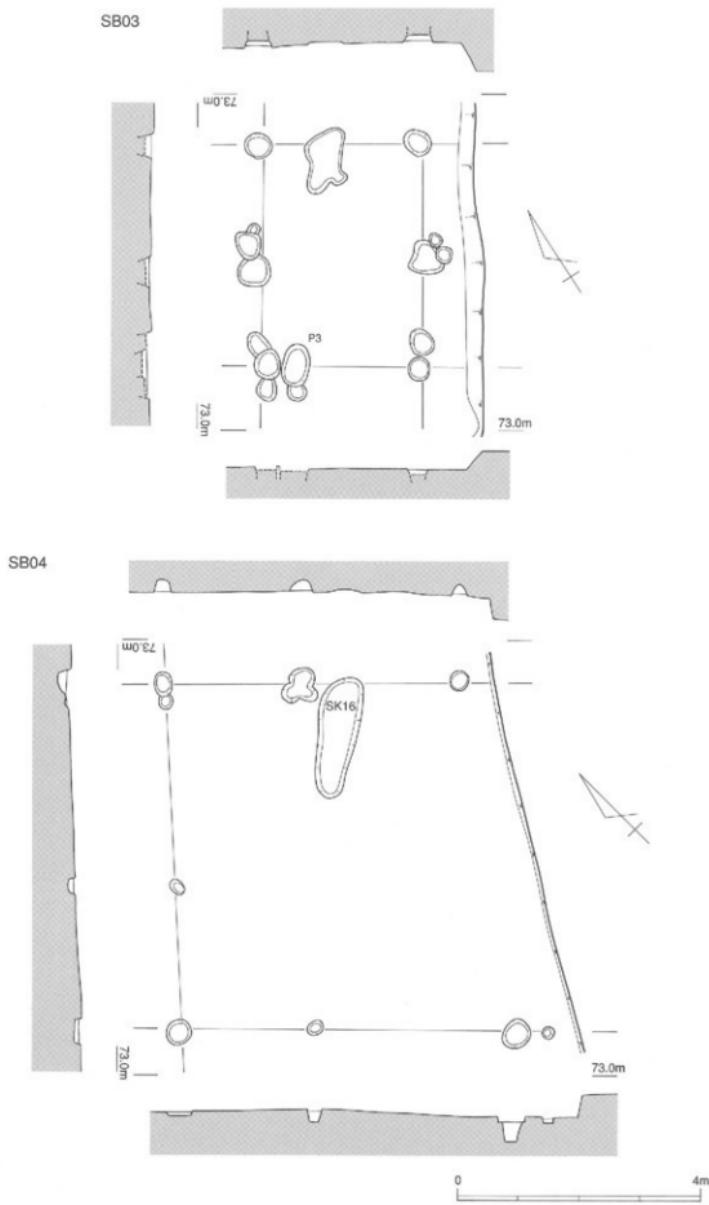


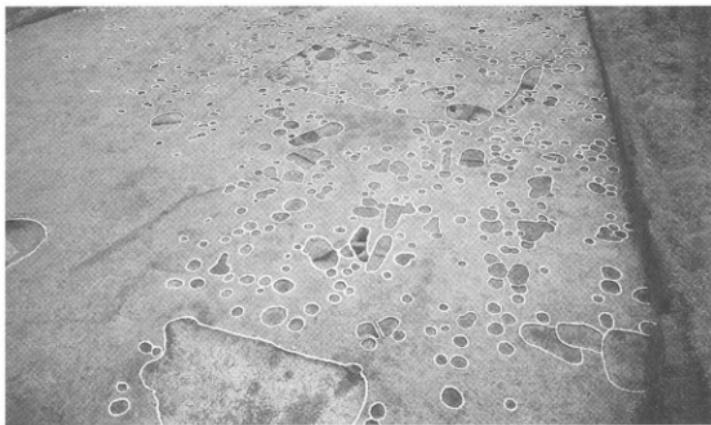
SB05 P17断ち割り



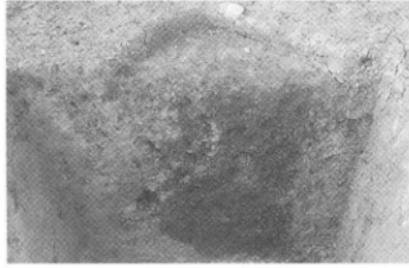
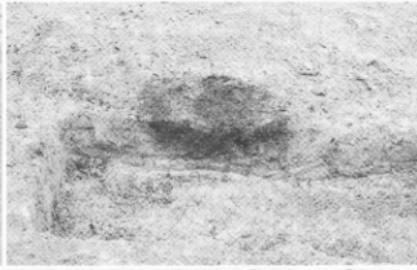
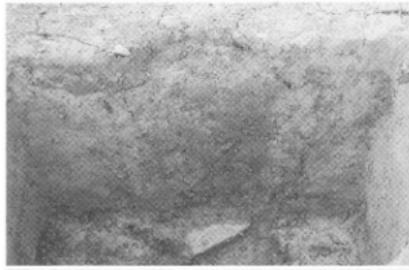
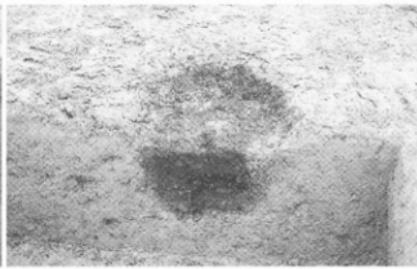
SB05 P18断ち割り

図版33

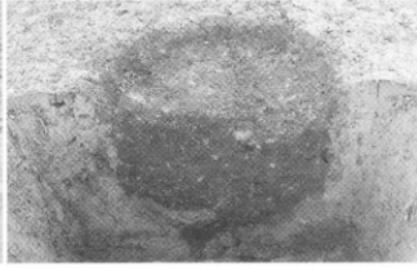




SB03・08（南から）

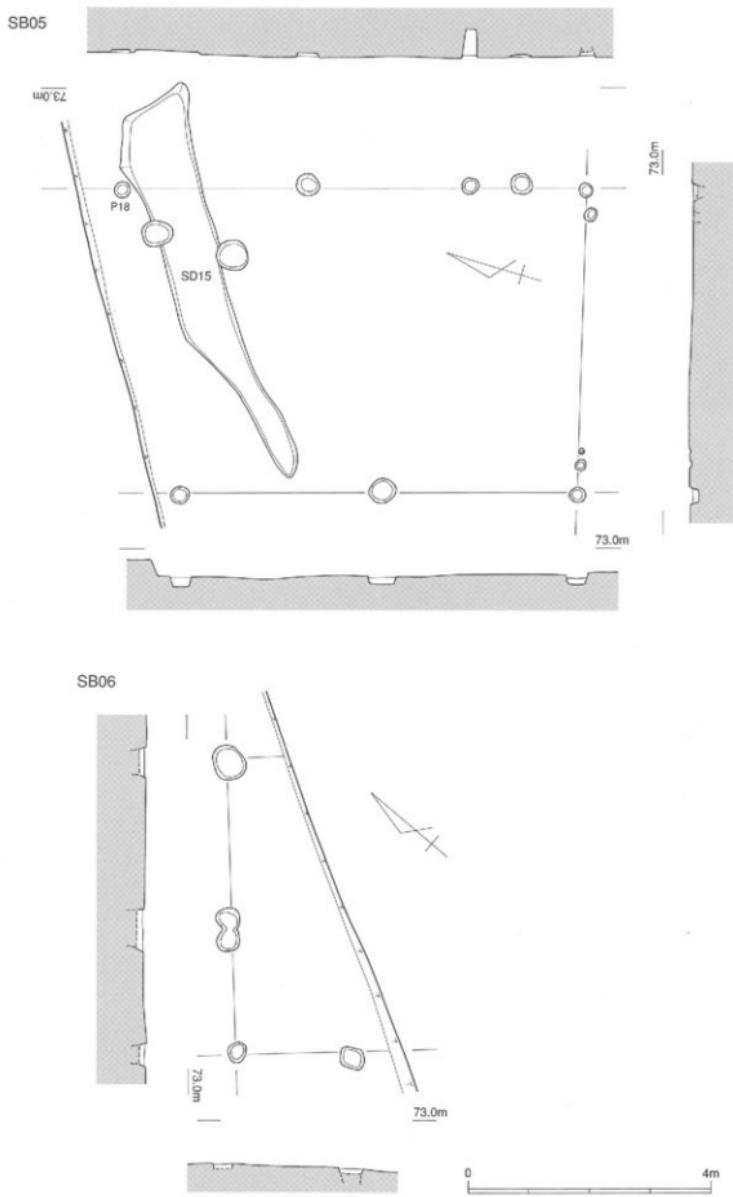


SB03 ピット断ち割り（上からP24、P25、P26）

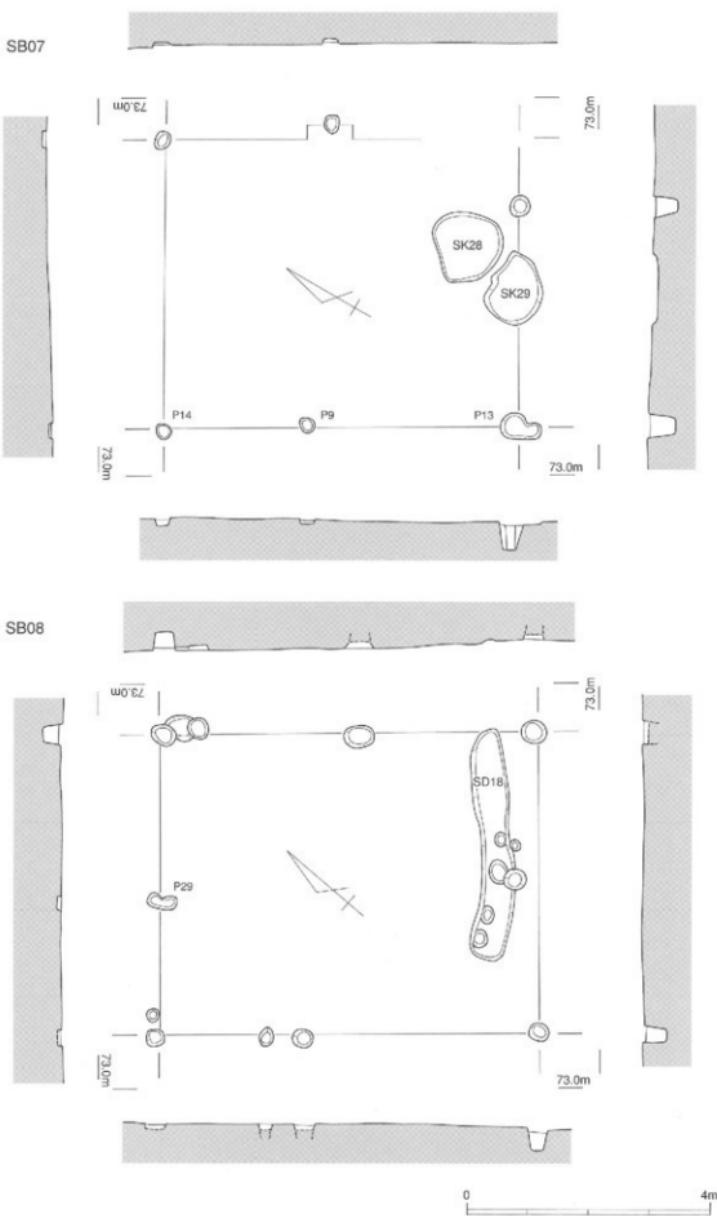


SB08 ピット断ち割り（上からP12、P13、P29）

図版35

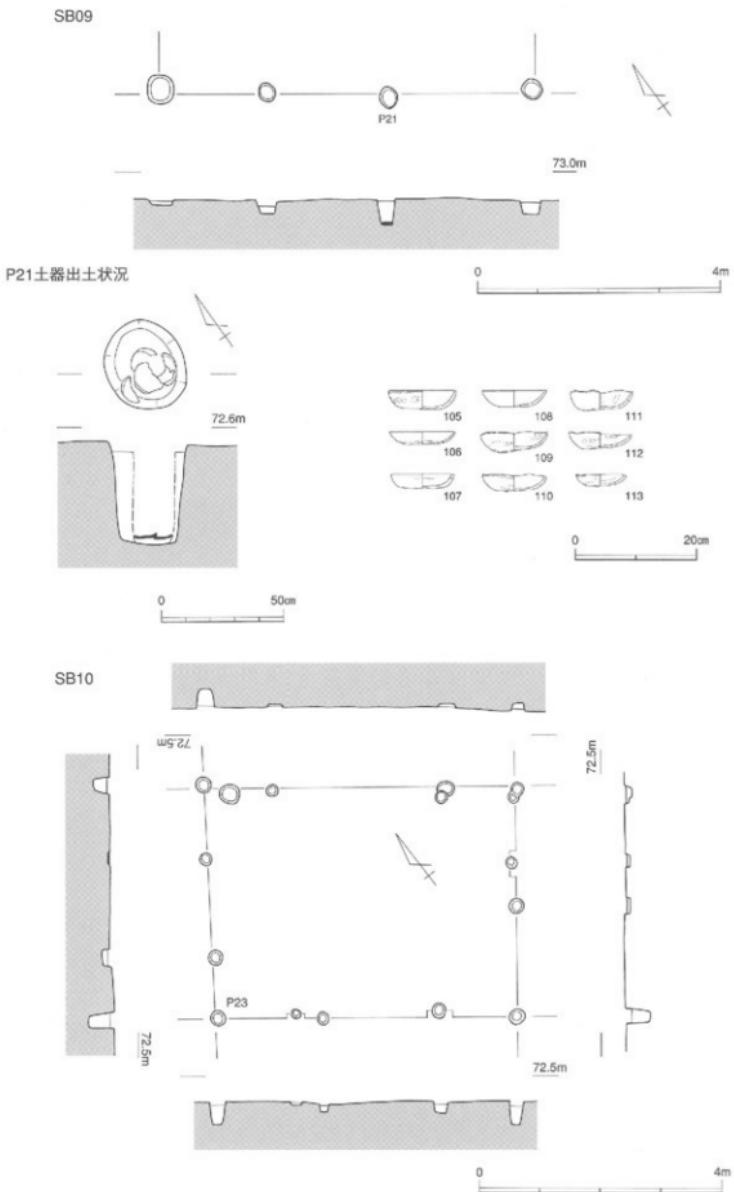


SB05・06実測図 (1/80)



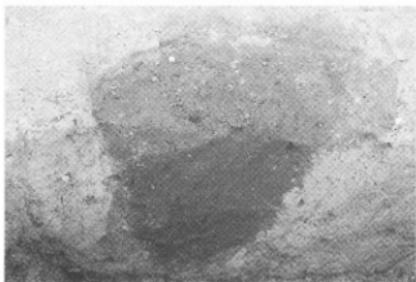
SB07・08実測図 (1/80)

図版37



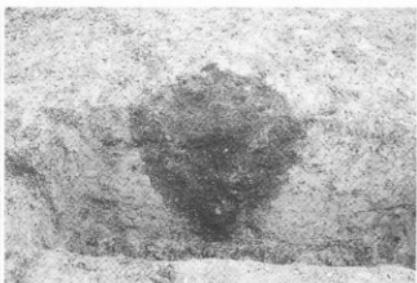


中央掘立柱建物跡群（南東から）



P32 断ち割り

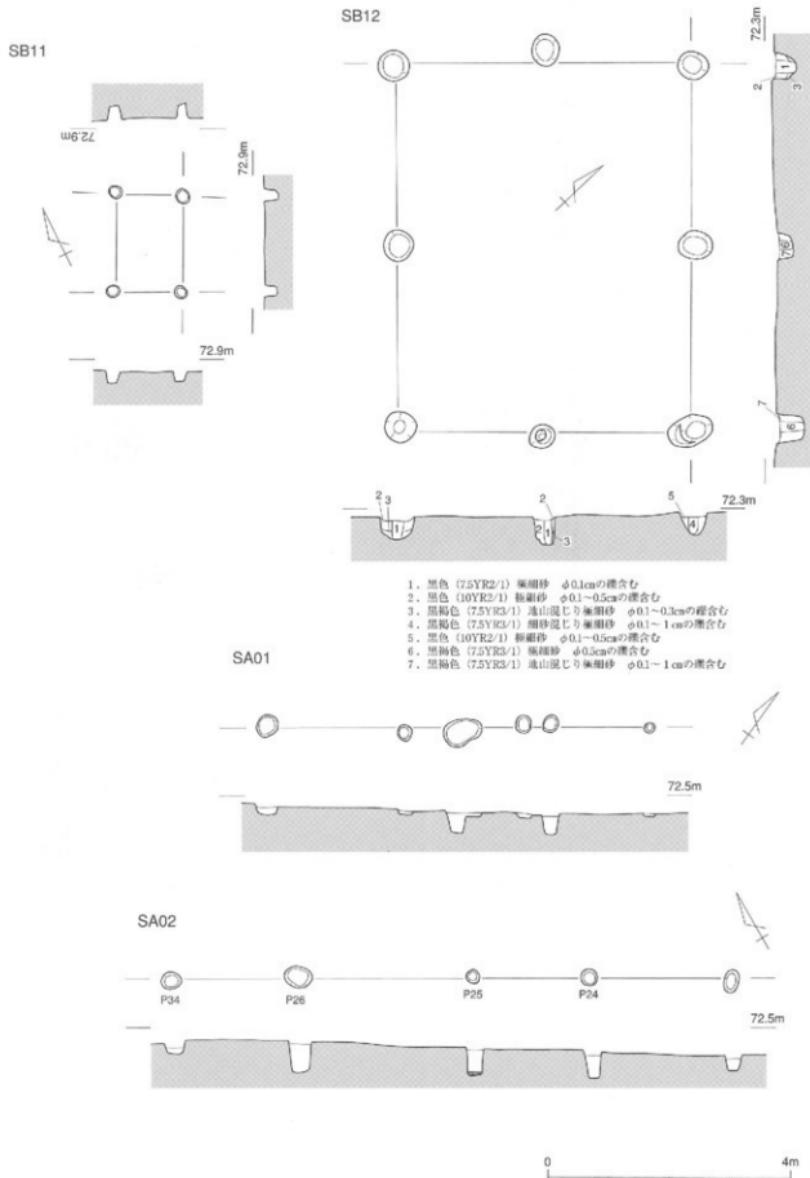
P23 断ち割り



P22 断ち割り

P13 断ち割り

図版39



SB11・12 SA01・02実測図 (1/80)



SB11 (南東から)

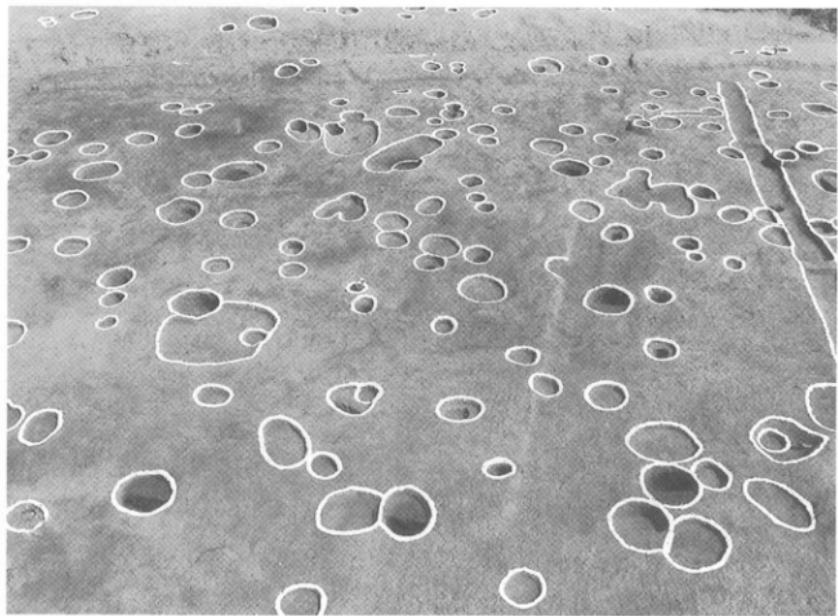


SB09 P21 土器出土状態

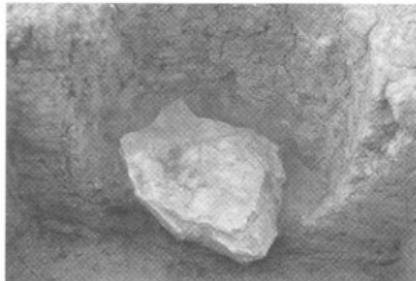


SB09 P21 出土土器

写真図版41



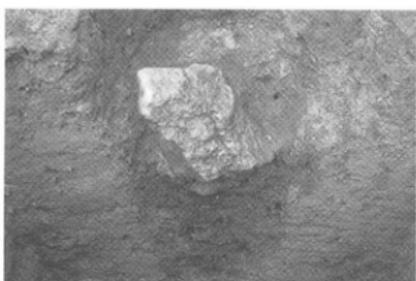
SB12 (南東から)



SB26 P1843 断ち割り



SB36 P1620 断ち割り



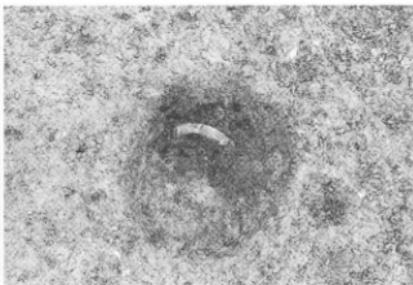
SA09 P1472 断ち割り



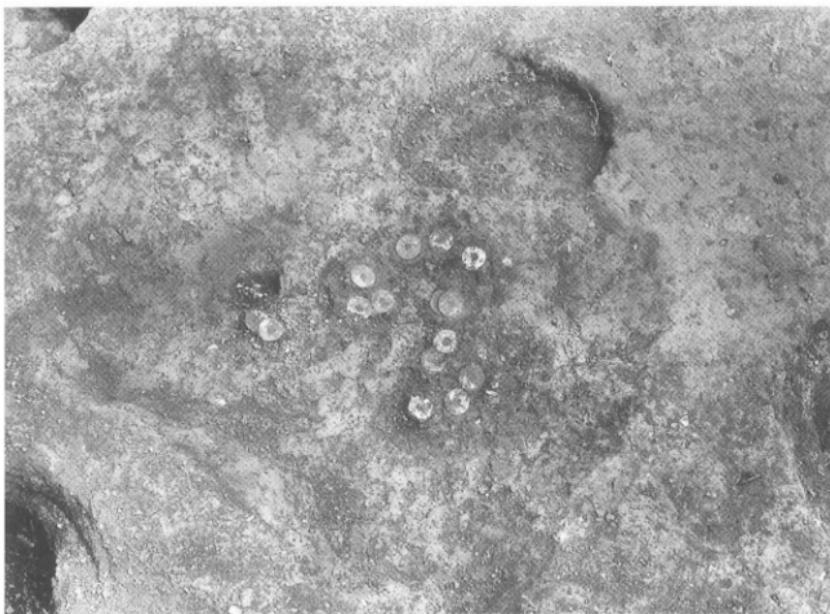
SB40 P1674 断ち割り



P30 断ち割り



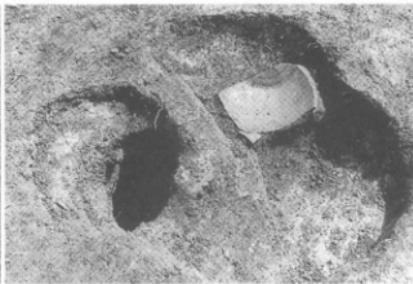
P1 遺物（温石）出土状態



P1820 銭貨出土状態

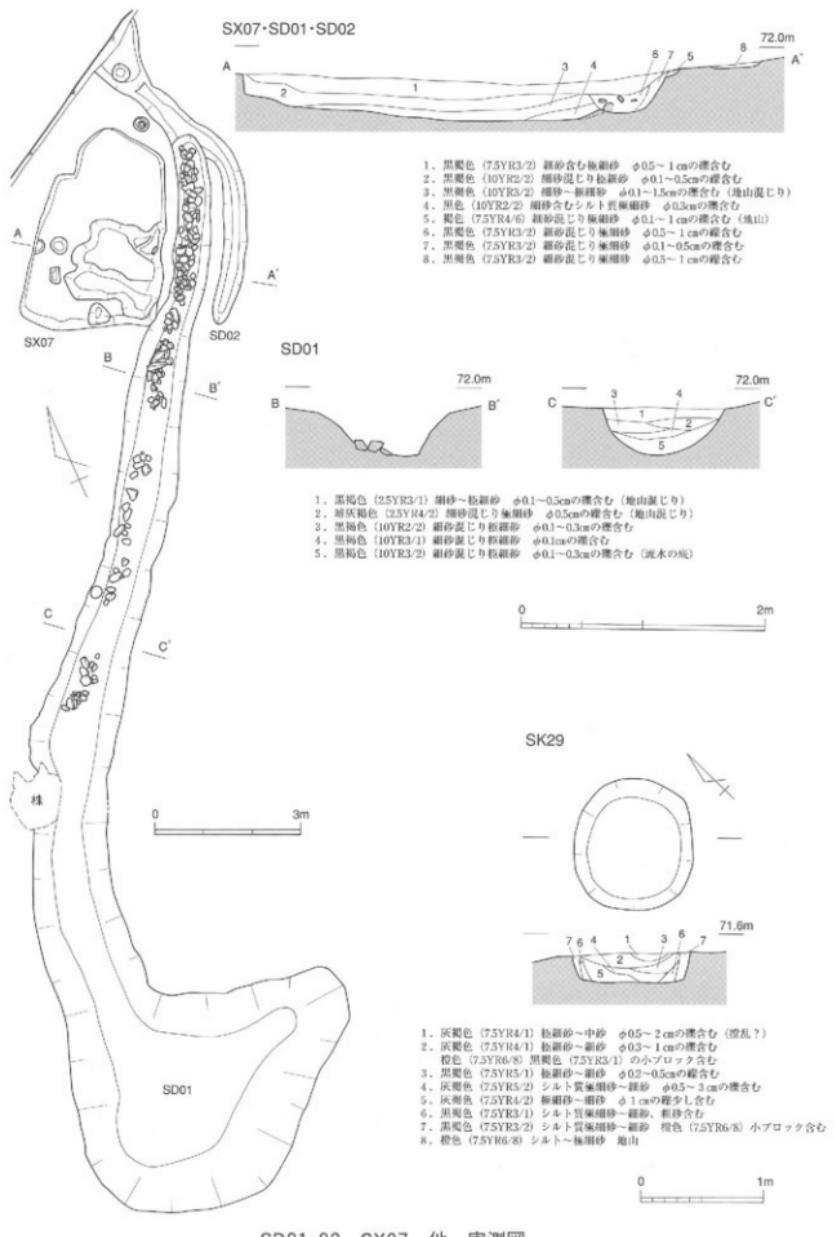


SK32 鉄錐出土状態



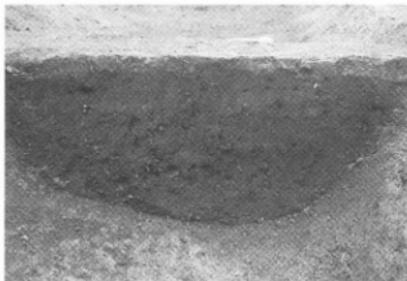
P1879 土器出土状態

図版43





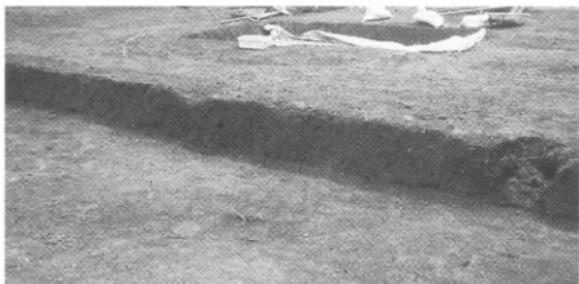
SD01 (北から)



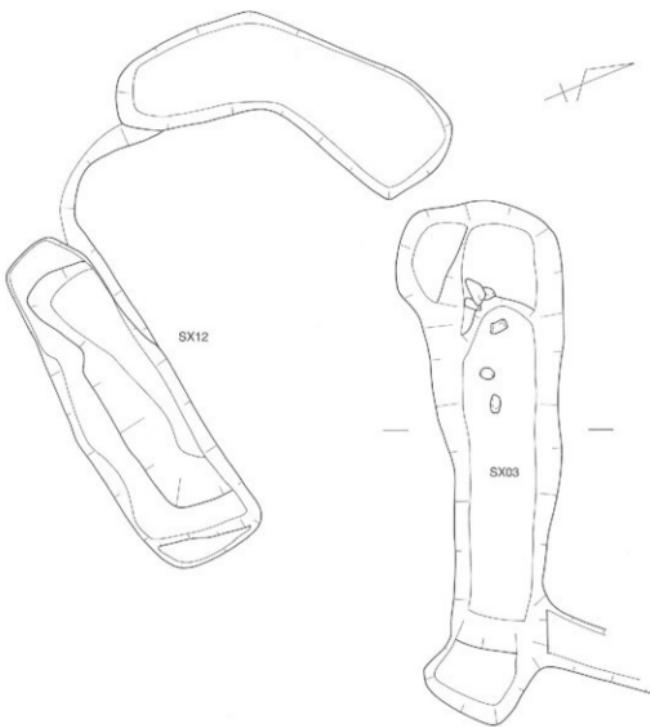
SD01 土層堆積状況 (北から)



SD01-SX07 土層堆積状況 (南から)



第1調査区土層断面 (西から)

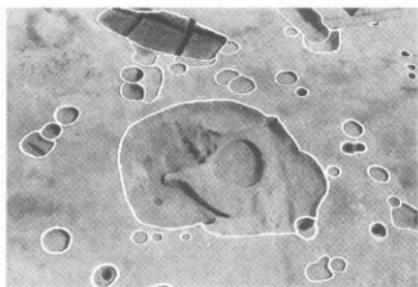


1. 黒色 (7.5YR17/1) 細砂混じり粘縫砂 $\phi 0.5\sim 1\text{ cm}$ の礫含む
2. 黒色 (7.5YR2/1) 細砂含む粘縫砂 $\phi 0.1\sim 0.3\text{cm}$ の礫含む
3. 黒褐色 (7.5YR3/1) 細砂含む粘縫砂 $\phi 0.1\sim 0.5\text{cm}$ の礫含む
4. 黑褐色 (7.5YR3/2) 細砂含む粘縫砂 $\phi 0.1\sim 0.5\text{cm}$ の礫含む (地山含む)
5. 黑褐色 (7.5YR3/1) 細砂含む粘縫砂 $\phi 0.1\sim 0.5\text{cm}$ の礫含む



0 2m

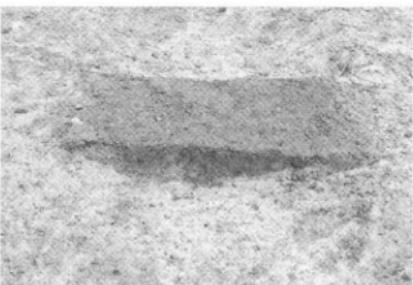
SX03 実測図



SX02 (北から)



SD15 (南から)



SD14 (東から)

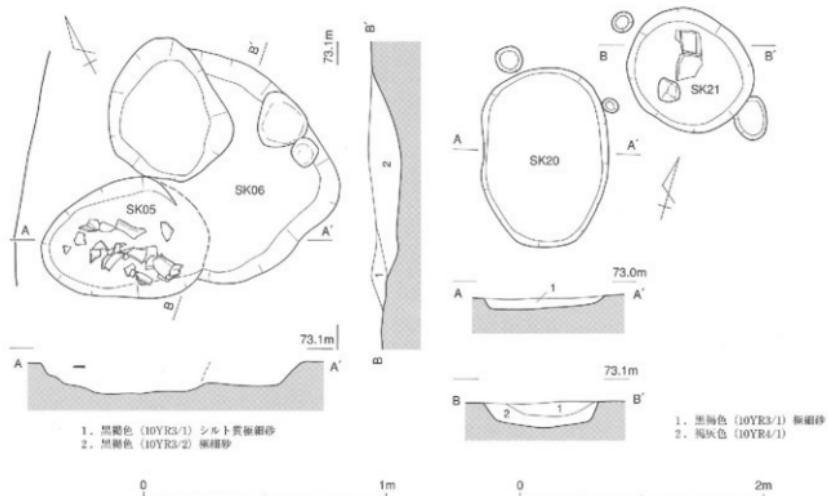
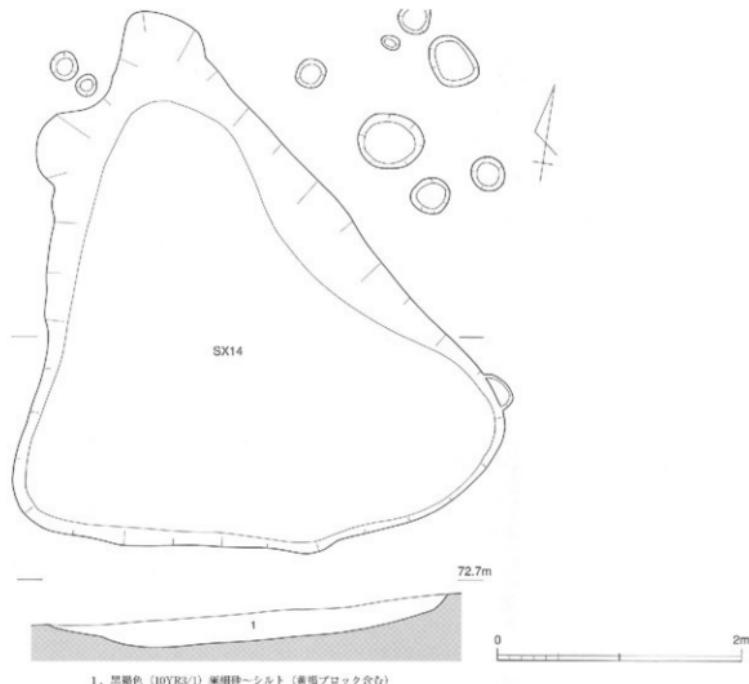


SD15 (南から)

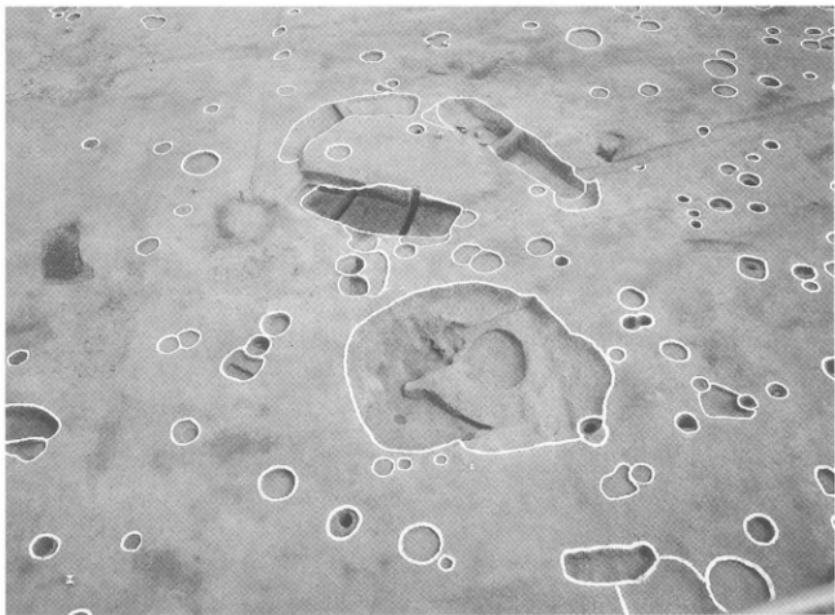


SD18 (南から)

図版47



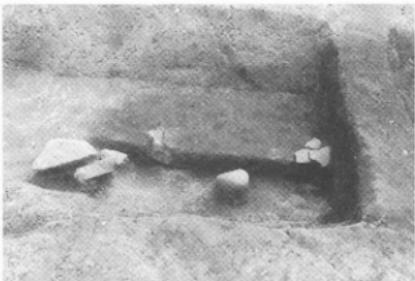
SX14・土坑(1)実測図



SX02・03周辺の状況（北西から）



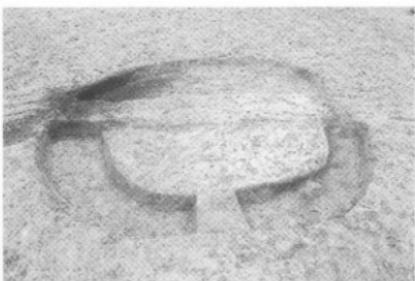
SX03（北西から）



SX03堆積状況

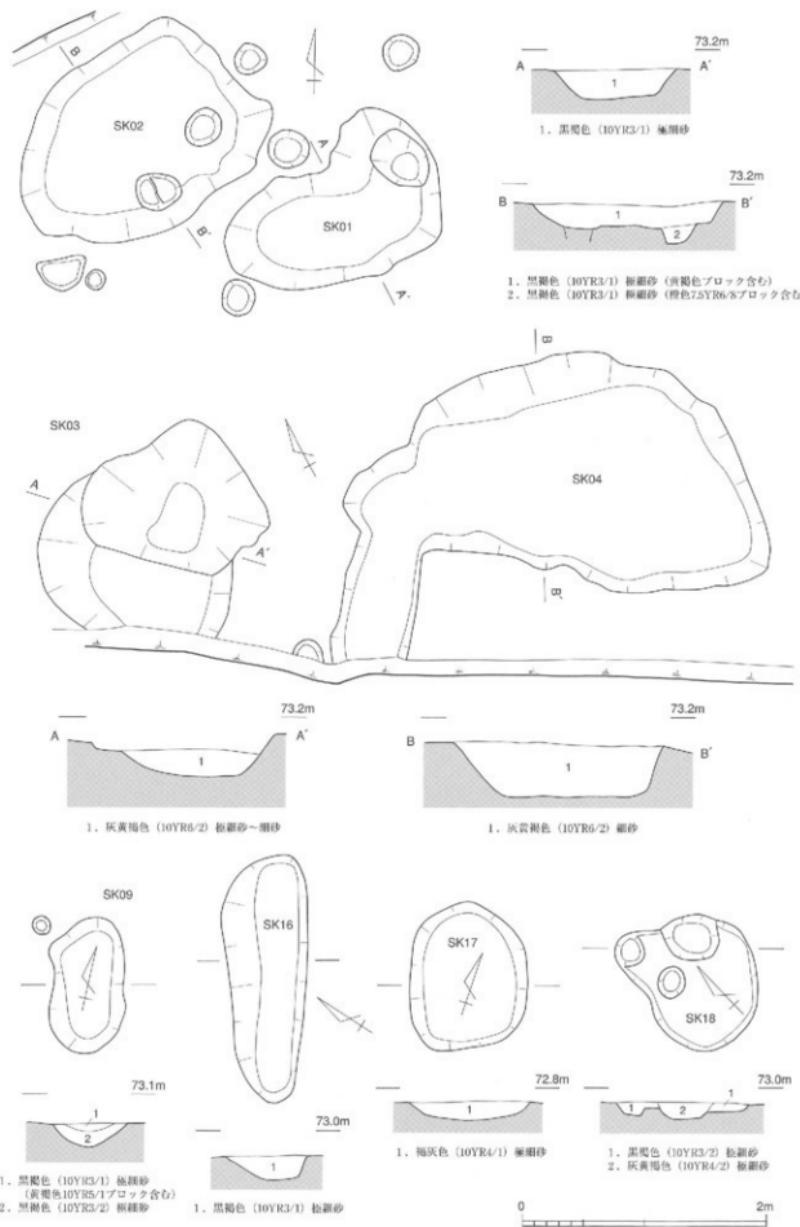


SX14（南東から）

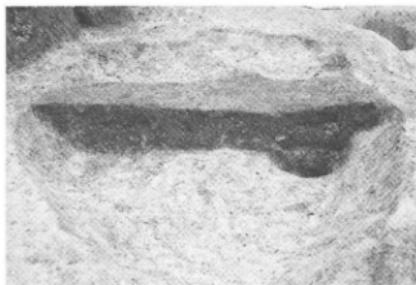


風倒木

図版49



土坑(2)実測図



SK02 (東から)



SK10 (北西から)



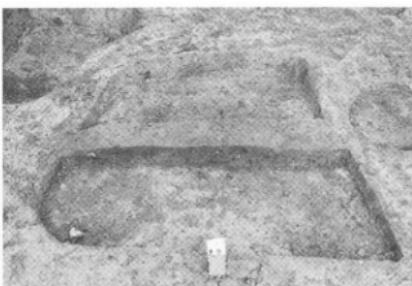
SK03 (北から)



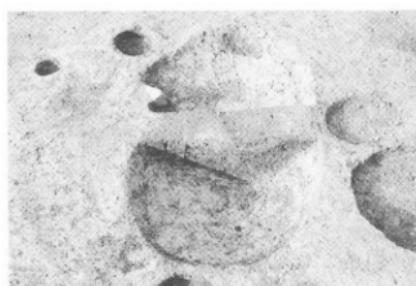
SK11 (南から)



SK05・06 (東から)



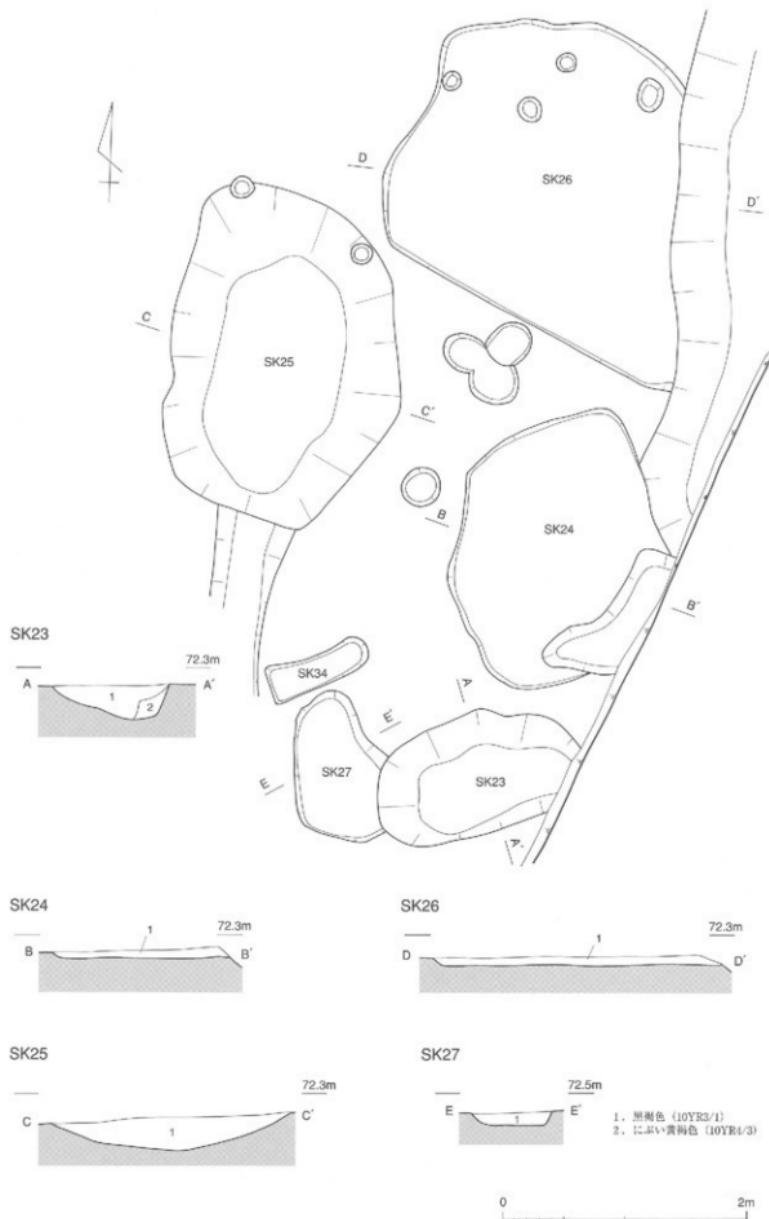
SK12 (南から)



SK09 (南東から)



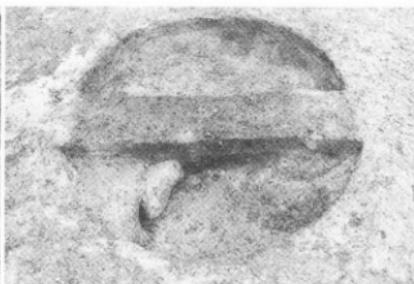
SK13 (南から)



土坑(3)実測図



SK16 (南西から)



SK21 (西から)



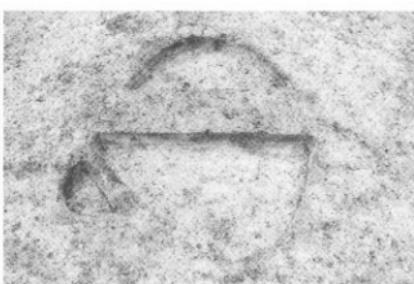
SK17 (南西から)



SK21 (西から)



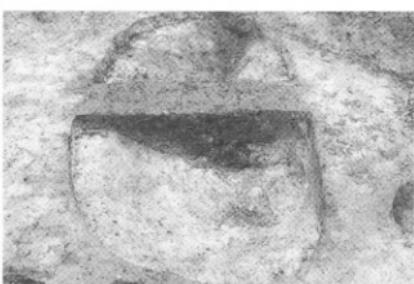
SK19 (東から)



SK22 (東から)

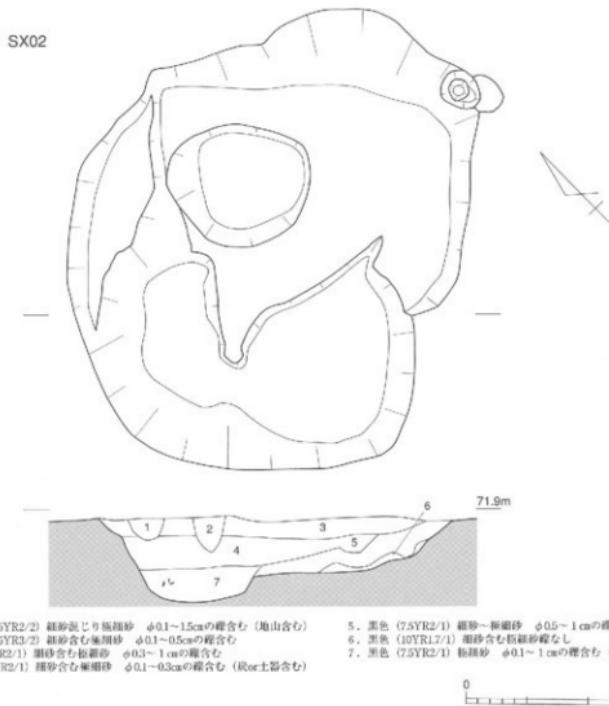


SK20 (東から)

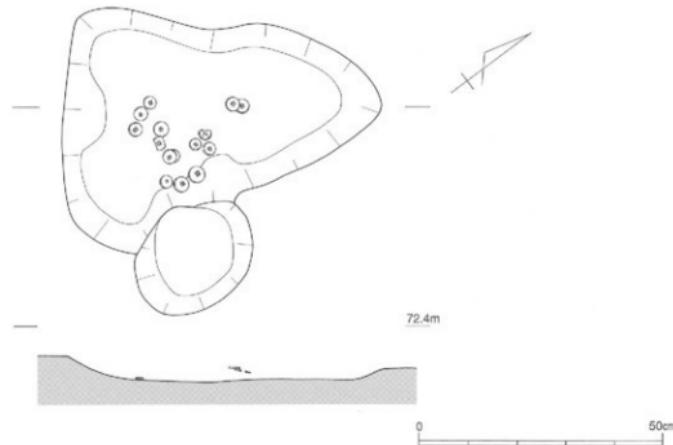


SK23 (南から)

図版53



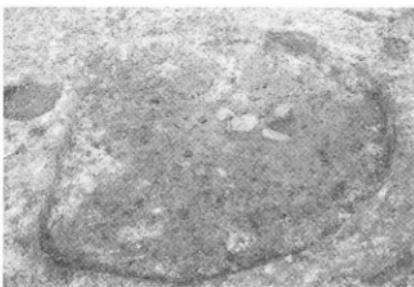
P1820 銭貨出土状態



SX02・P1820実測図



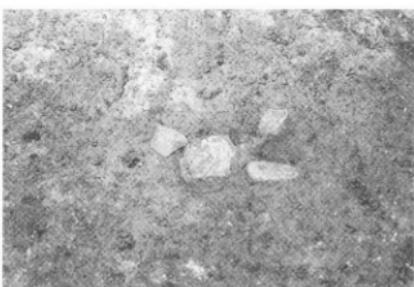
SK24 (東から)



SK28 (南から)



SK25 (南から)



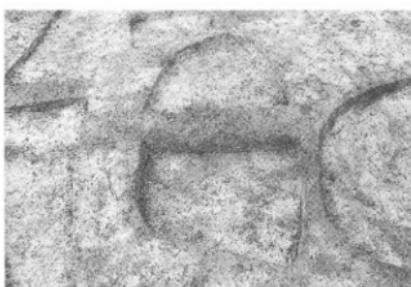
SK28 土器出土状態



SK26 (南から)



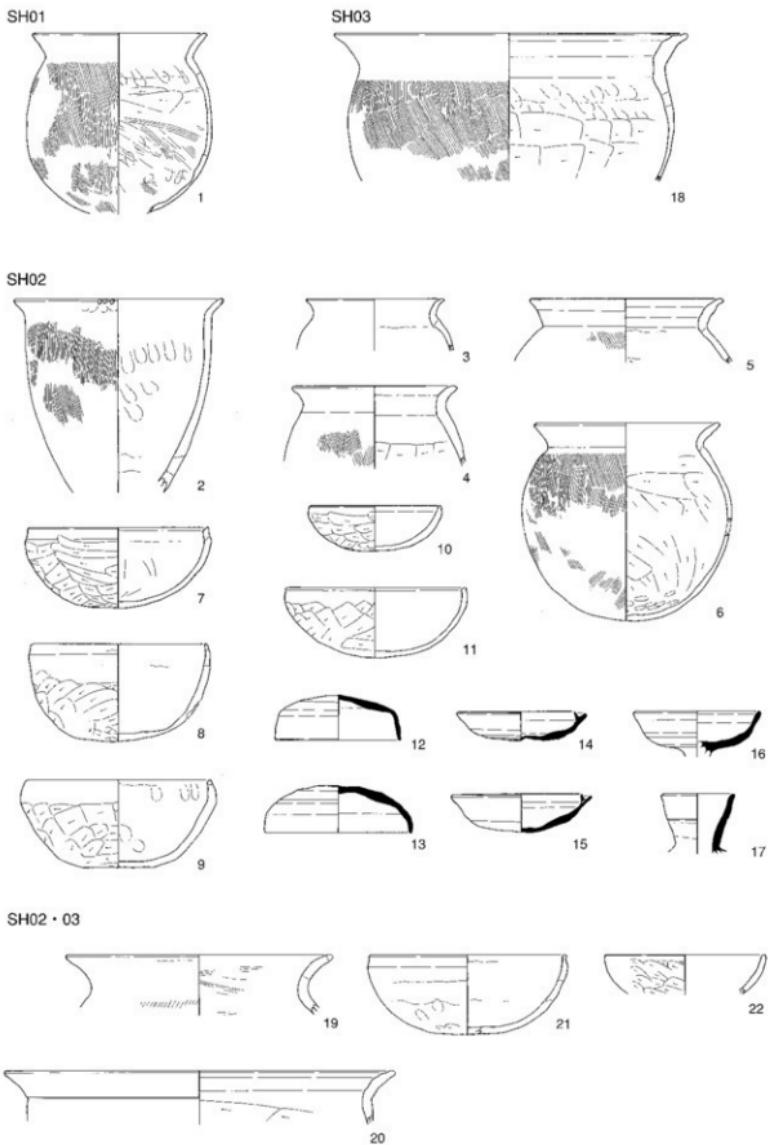
SK29 (東から)



SK27 (南から)



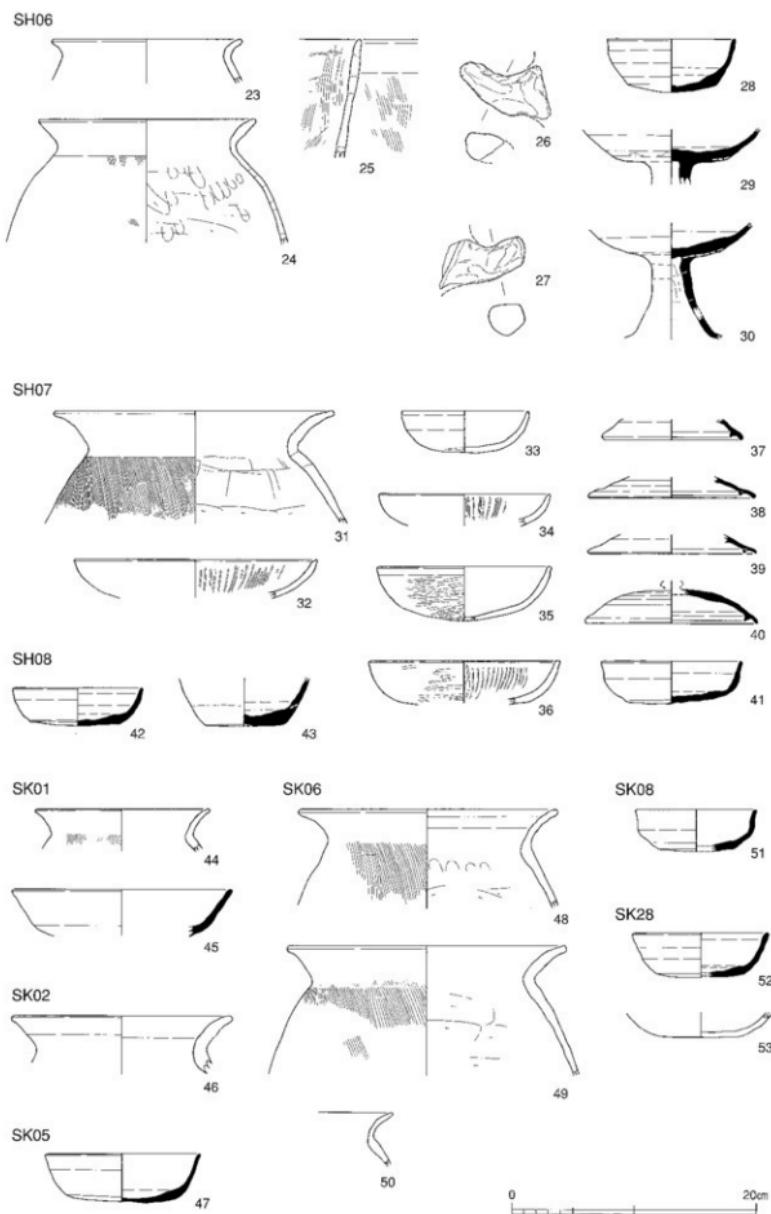
SX05 (北西から)



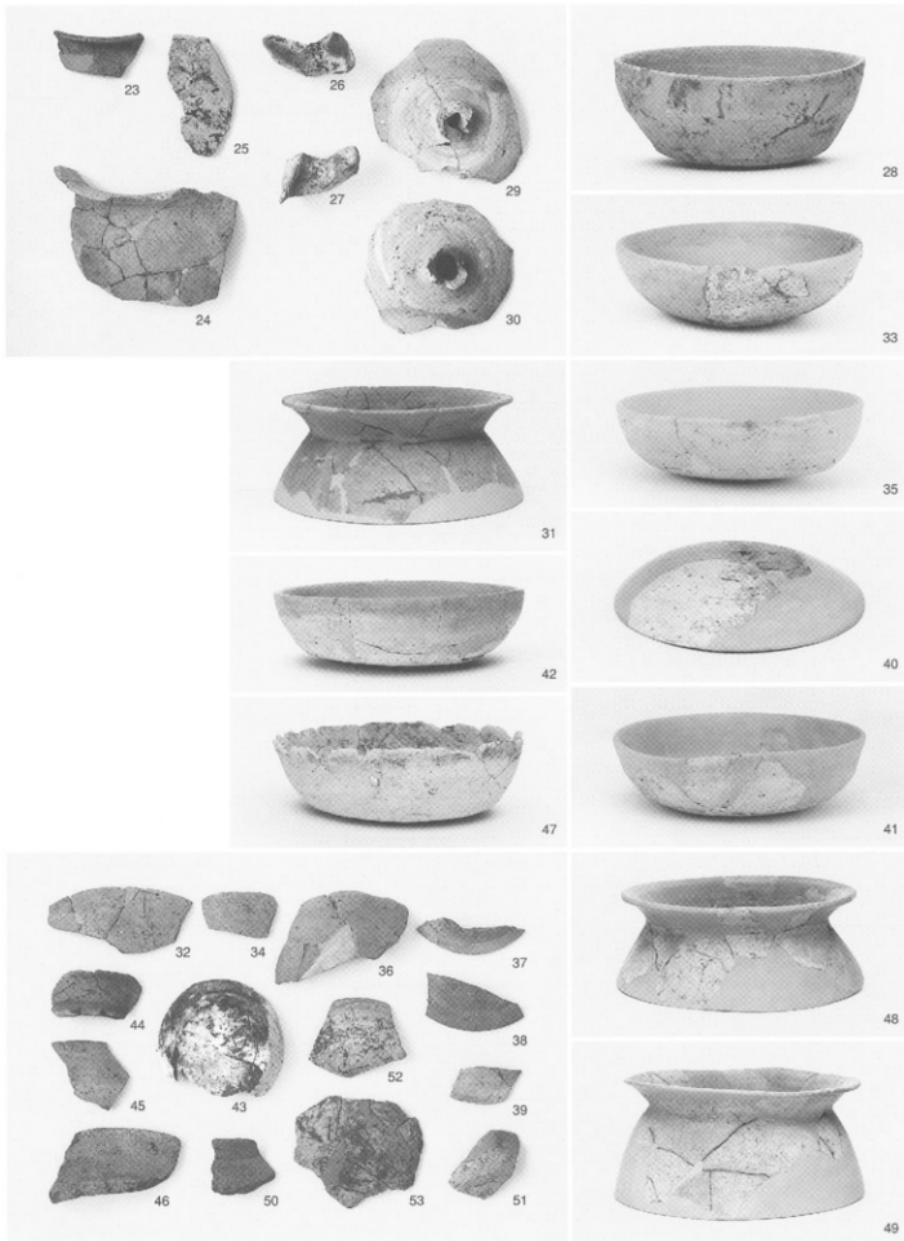
出土遺物実測図(1) (竪穴住居跡)



出土遺物(1)

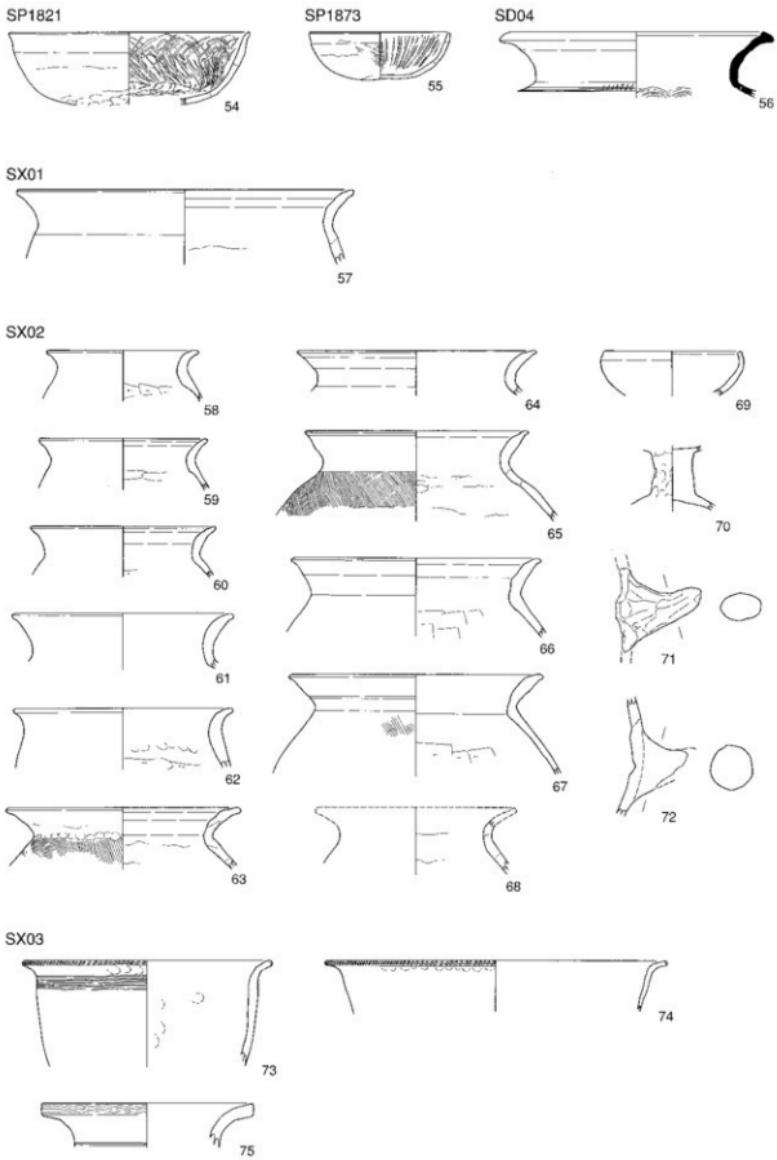


出土遺物実測図(2) (竪穴住居跡・土坑)



出土遺物(2)

図版59



0 20cm

出土遺物実測図(3) (ピット・落ち込み)



55



53

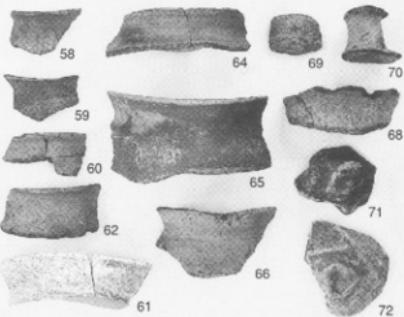
54



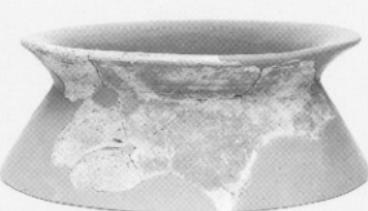
56



57

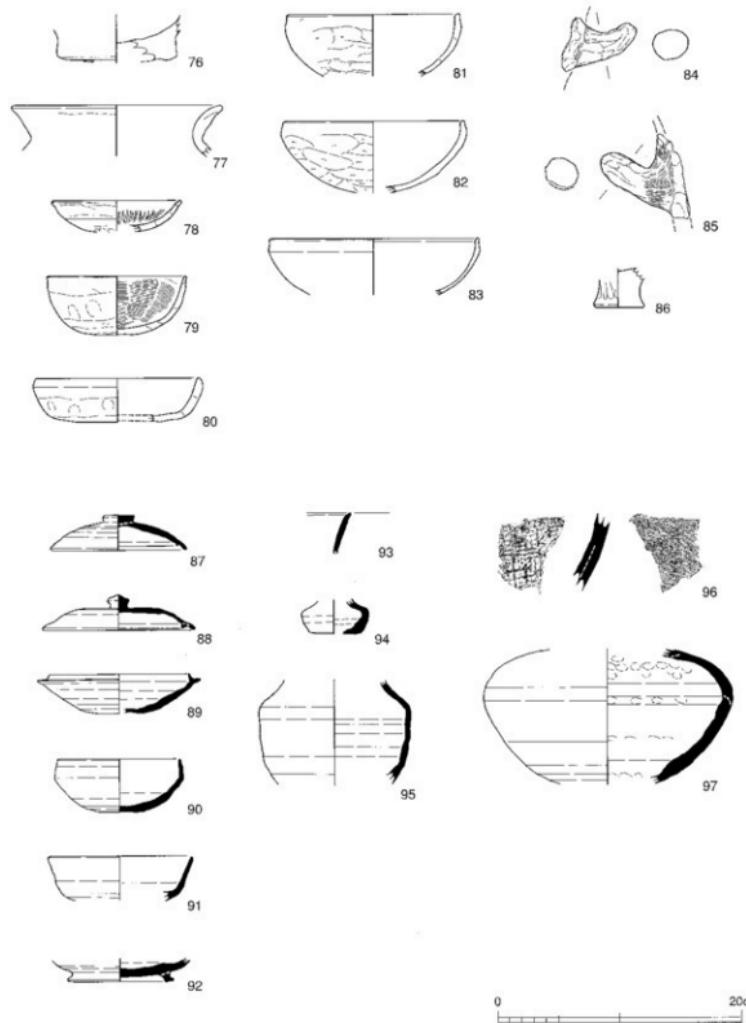


74



67

図版61



出土遺物実測図(4)（古墳包含層）



76



81



77



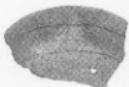
83



78



84



80



85



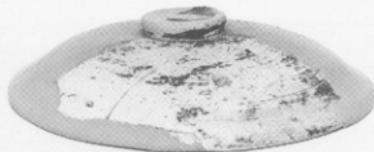
79



82



86



87



94



89



93



95

96



91



97

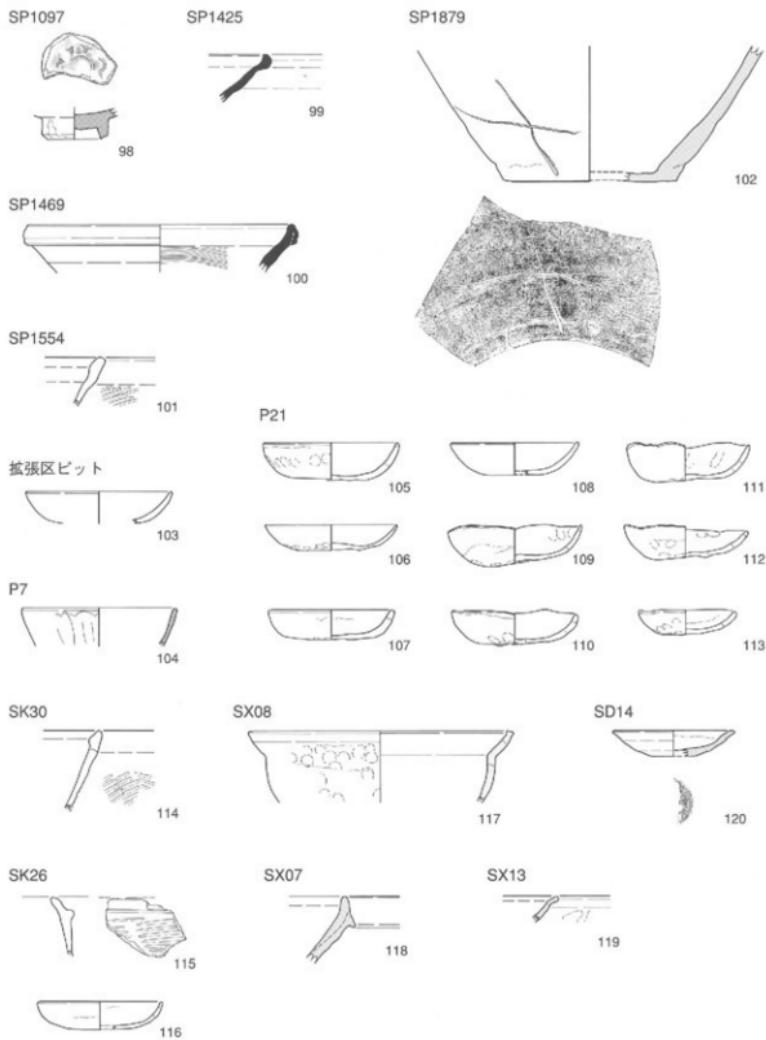


88

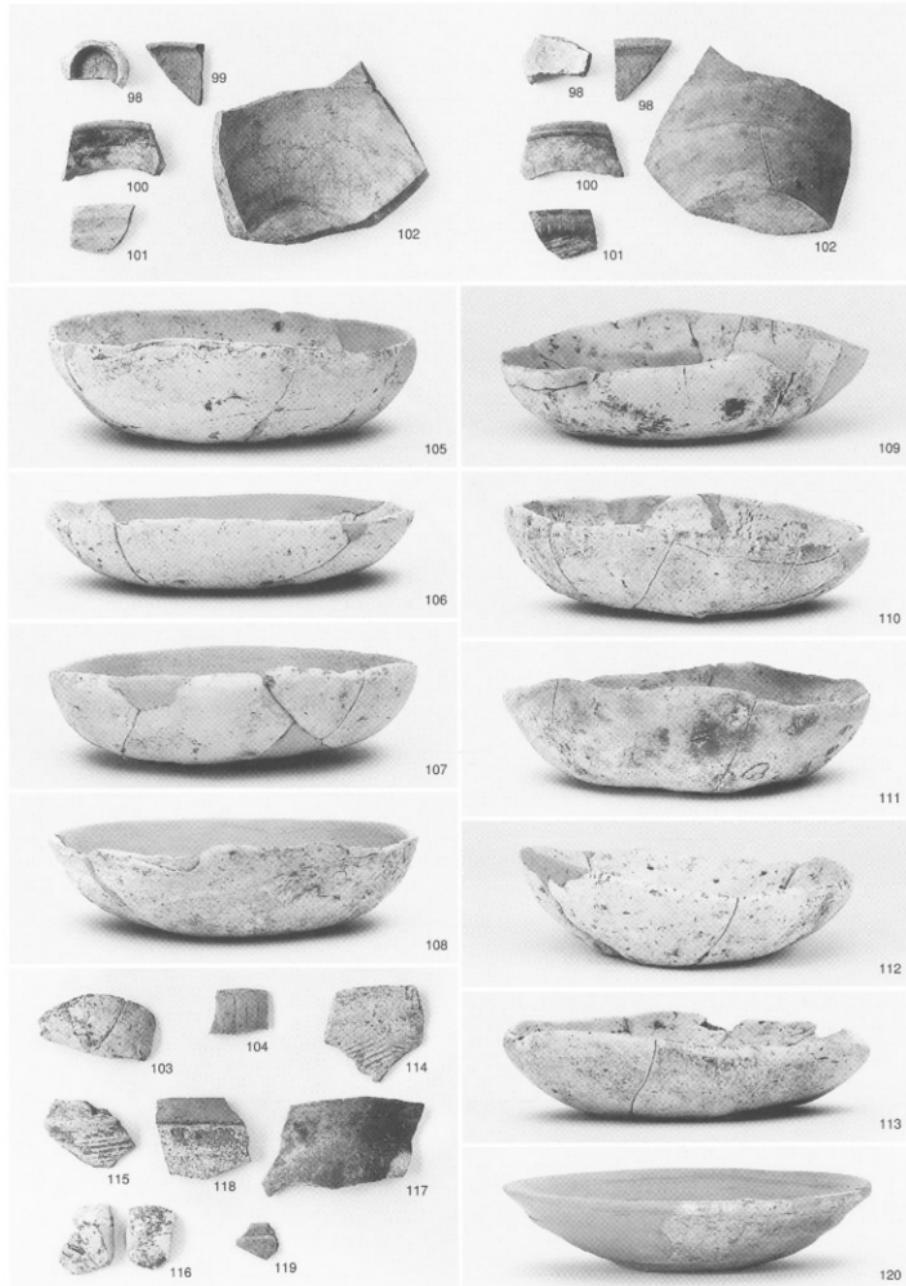


90

出土遺物(4)



出土遺物実測図(5) (ピット・土坑・落ち込み)



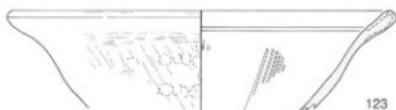
出土遺物(5)

図版65

SD01



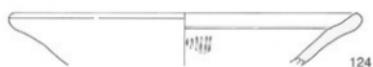
121



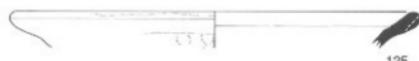
123



122



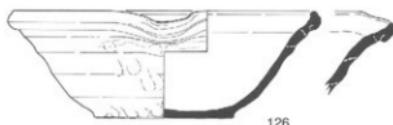
124



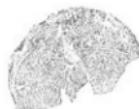
125



127



126



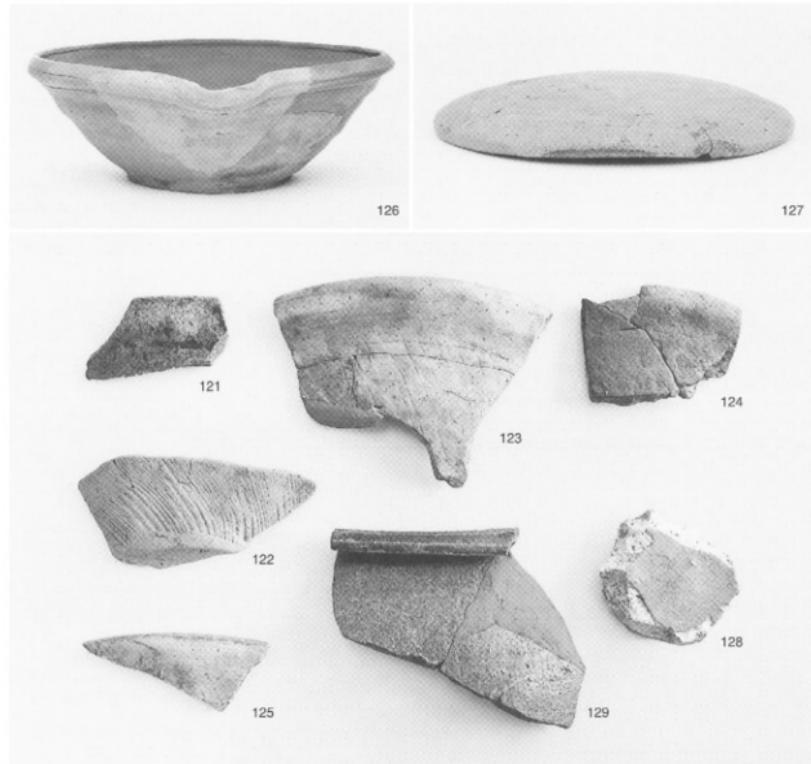
128



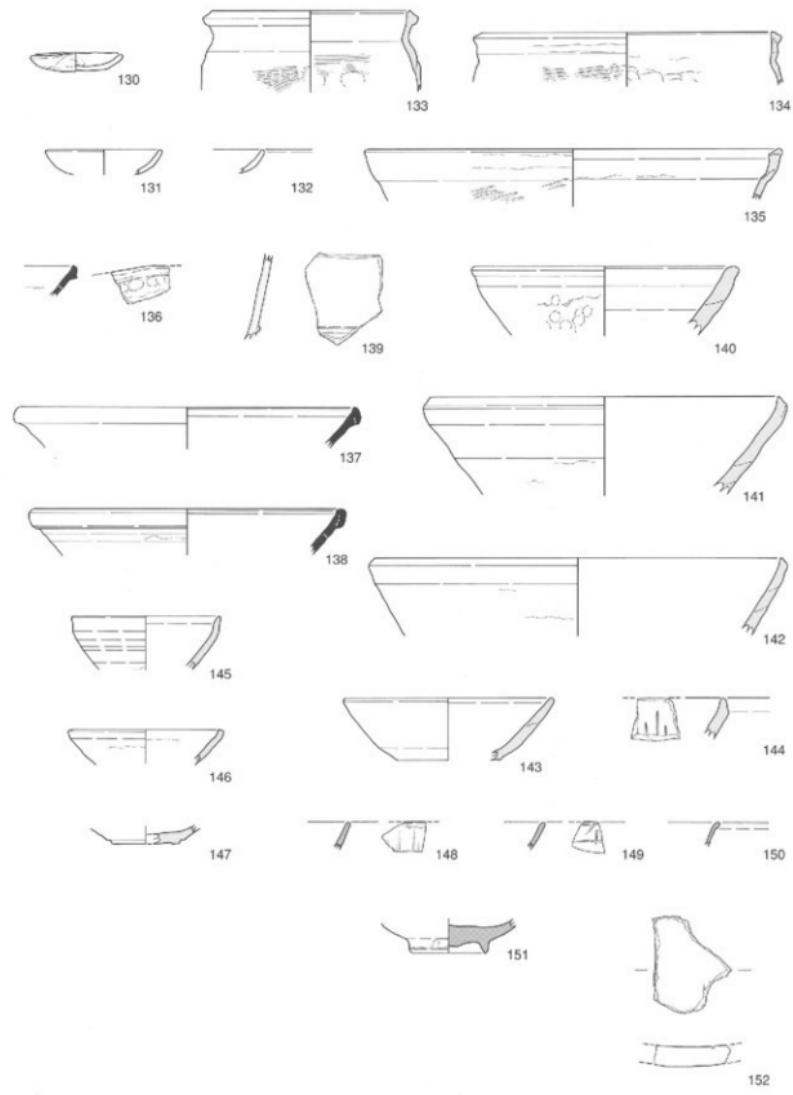
129



出土遺物実測図(6) (溝)

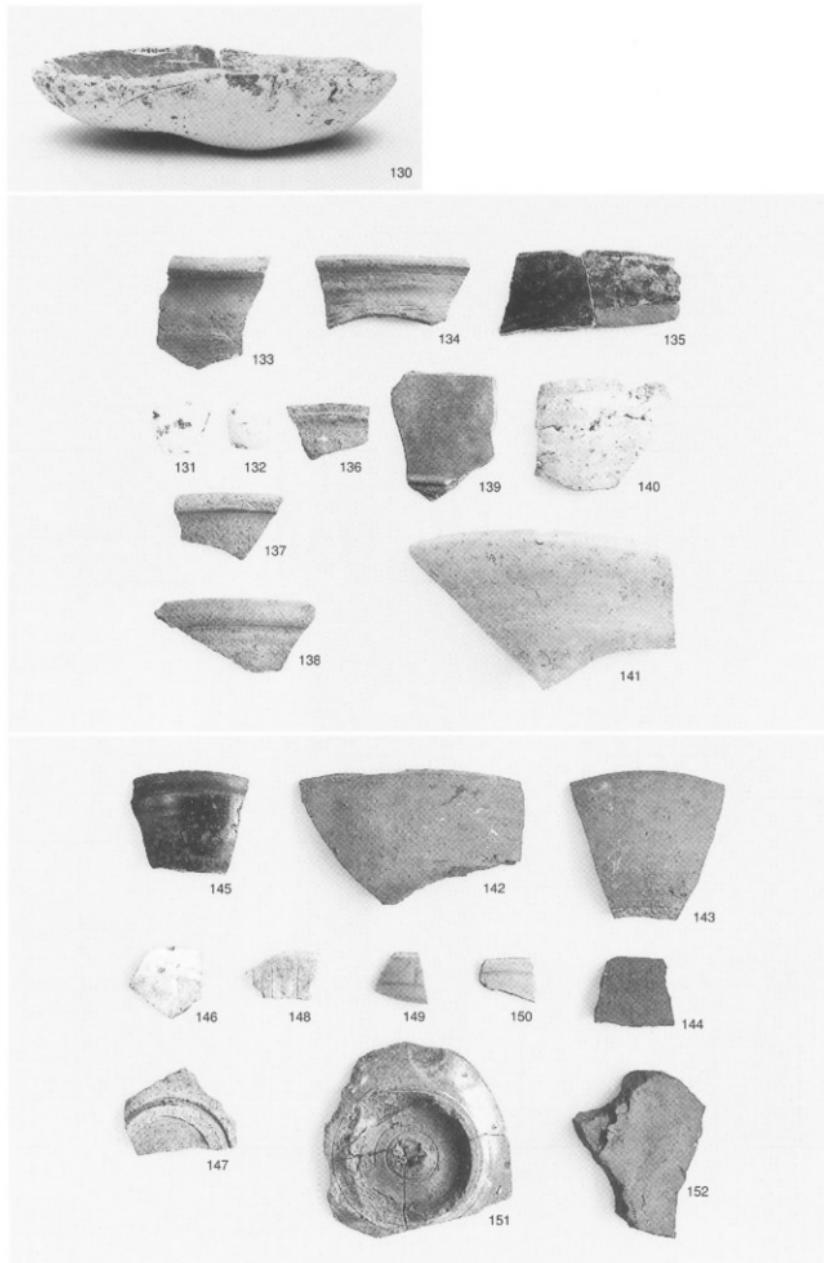


出土遺物(6)

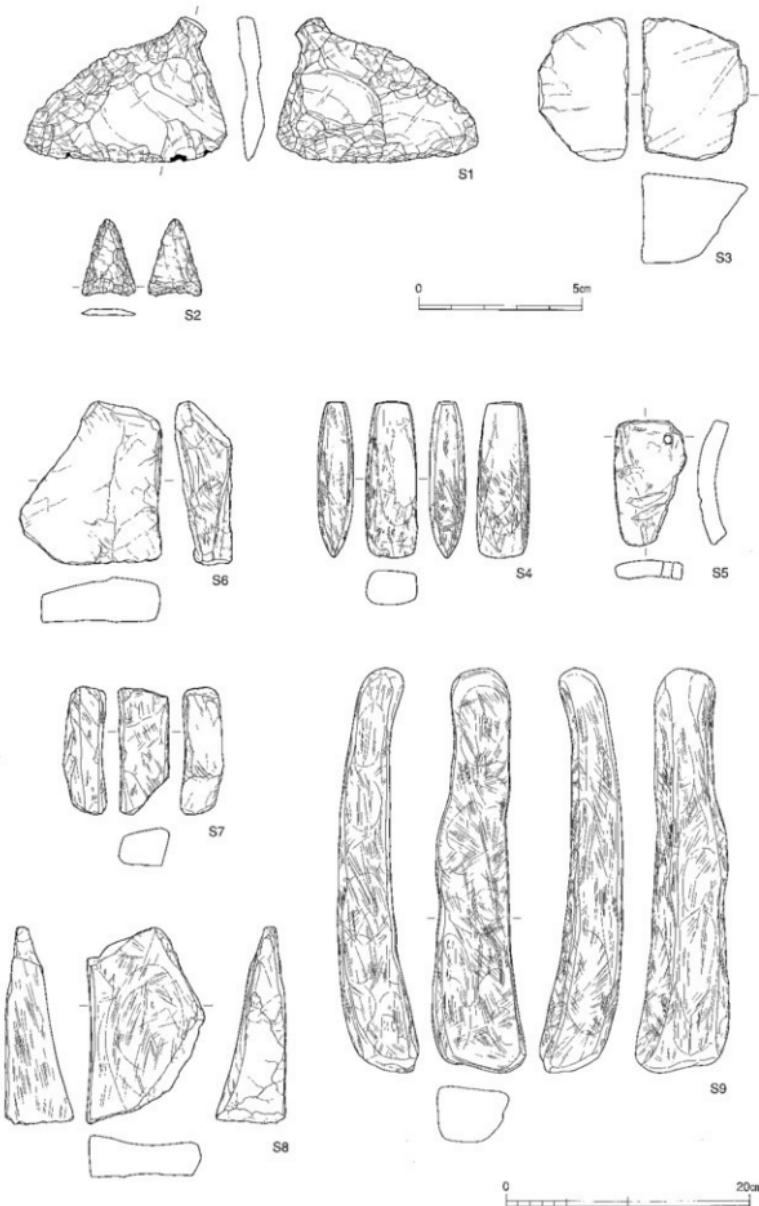


0 20cm

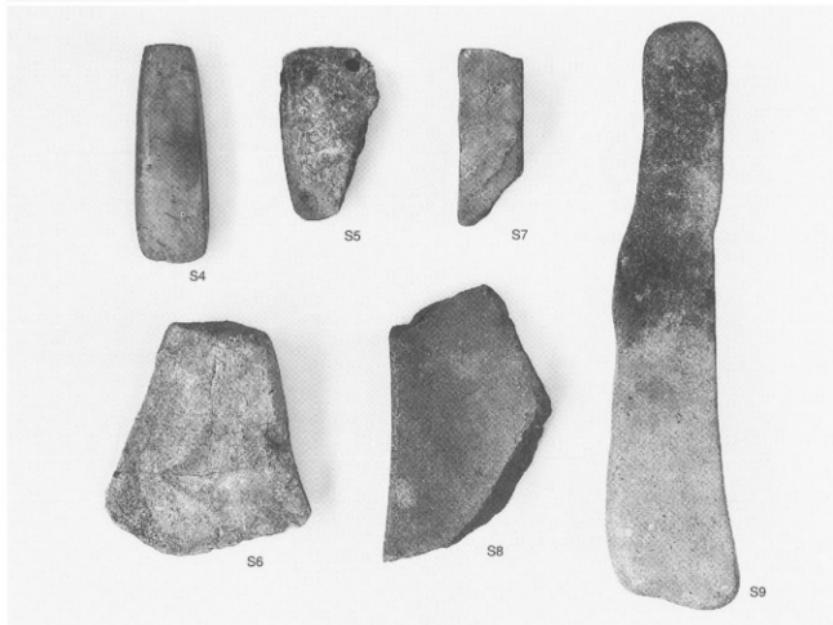
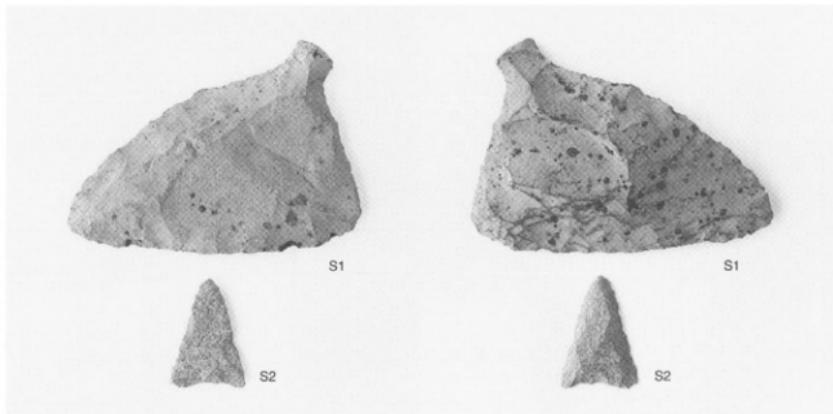
出土遺物実測図(7)（中世包含層）



出土遺物(7)

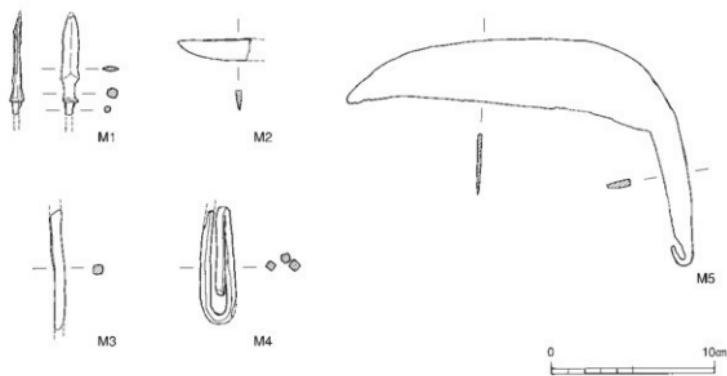


出土遺物実測図(8) (石器)

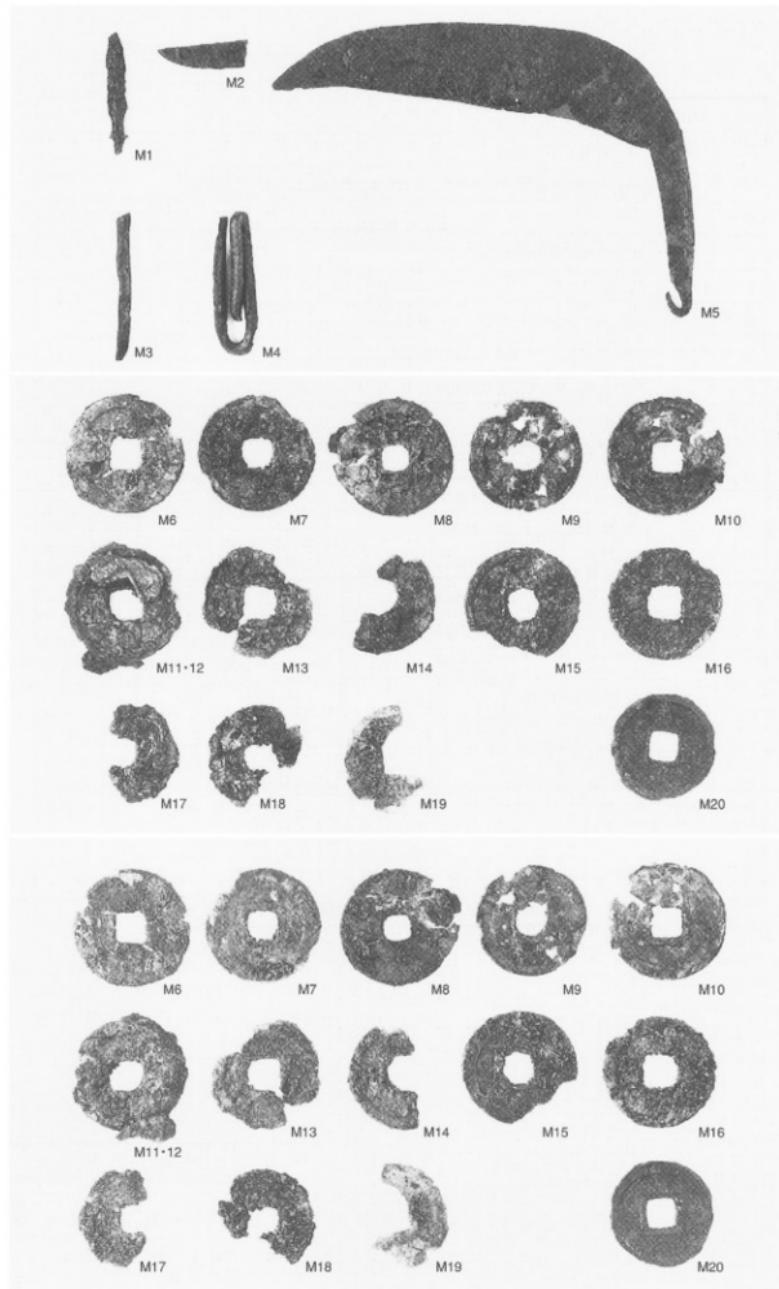


出土遺物(8)

図版71



出土遺物実測図(9)（金属器）



出土遺物(9)

報告書抄録

ふりがな	じゅうのかい						
書名	十ノ貝遺跡						
副書名	国道175号線竹田道路公共道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告						
シリーズ番号	第275冊						
編著者名	渡辺 昇・西口圭介・松岡千寿・青木哲哉						
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所						
所在地	〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号 TEL.078(531)7011						
発行年月日	2005年3月						

所取遺跡名	所在地 市町村	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号					
十ノ貝遺跡	兵庫県丹波市（旧氷上郡）市島町下竹田字十ノ貝	28646	930246	35°	135°	1993.4.7		国道175号線 竹田道路（竹 田バイパス）
			2000361	13'	7'	2001.2.20～21	156m ²	
			2001039	32"	55"	2001.6.1～8.10	1,856m ²	
			2001129			2001.7.23～8.10	151m ²	
			2001208			2002.1.28～3.20	1,053m ²	
							確認 307m ²	
							本発掘 2,909m ²	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
十ノ貝遺跡	集落跡	弥生時代		弥生土器・石匙・石器				
		古墳時代後期	堅穴住居跡	須恵器・土師器				
		鎌倉～室町時代	掘立柱建物跡	青磁・白磁・備前焼・砥石・錢貨				

丹波市（旧氷上郡）市島町

十ノ貝遺跡

2005年3月18日発行

編 集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号

発 行 兵庫県教育委員会
〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印 刷 株式会社 精文舎
